

長岡京市文化財調査報告書

第36冊

編 集

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

1997

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 36 冊

編 集

財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

1 9 9 7

長岡京市教育委員会

序 文

昨年11月、文化庁と建設省が連携して「文化財を活かしたモデル地域づくり」の推進が提唱されました。これまで、開発と文化財保護は対立的にとらえる傾向がありました。ところが、今日わが国も「物質的な豊かさ」から「心の豊かさ」が求められ、「新しい文化立国」を目指す中で、歴史に培われてきた地域の個性を活かした地域づくりが大きな課題となっています。

乙訓地域では、勝竜寺城公園や西国街道などの整備が図られるとともに、乙訓・八幡地域の「三川合流ドラマチックフィールド」にみられるように、近隣自治体が連携した広域的な地域づくりも進められています。しかしながら、これらの施策はまだ途についたばかりであります。本市においても、井ノ内稻荷塚古墳や今里大塚古墳をはじめとした、地域の歴史的シンボルである文化遺産の保護と活用が叫ばれております。今後、地域住民や開発部局と協力し、これらの文化遺産を活かした地域づくりを推進するため、新たな施策の策定が急務になってきています。

さて、ここに刊行します報告書は、国庫補助事業として平成8年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。なかでも、走田古墳群の調査報告は詳細な検討が加えられ、群集墳や横穴式石室を研究する上で貴重な資料となるものと思います。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなど関係機関、また発掘調査にご理解、ご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成9年3月

長岡京市教育委員会

教育長 小 西 誠 一

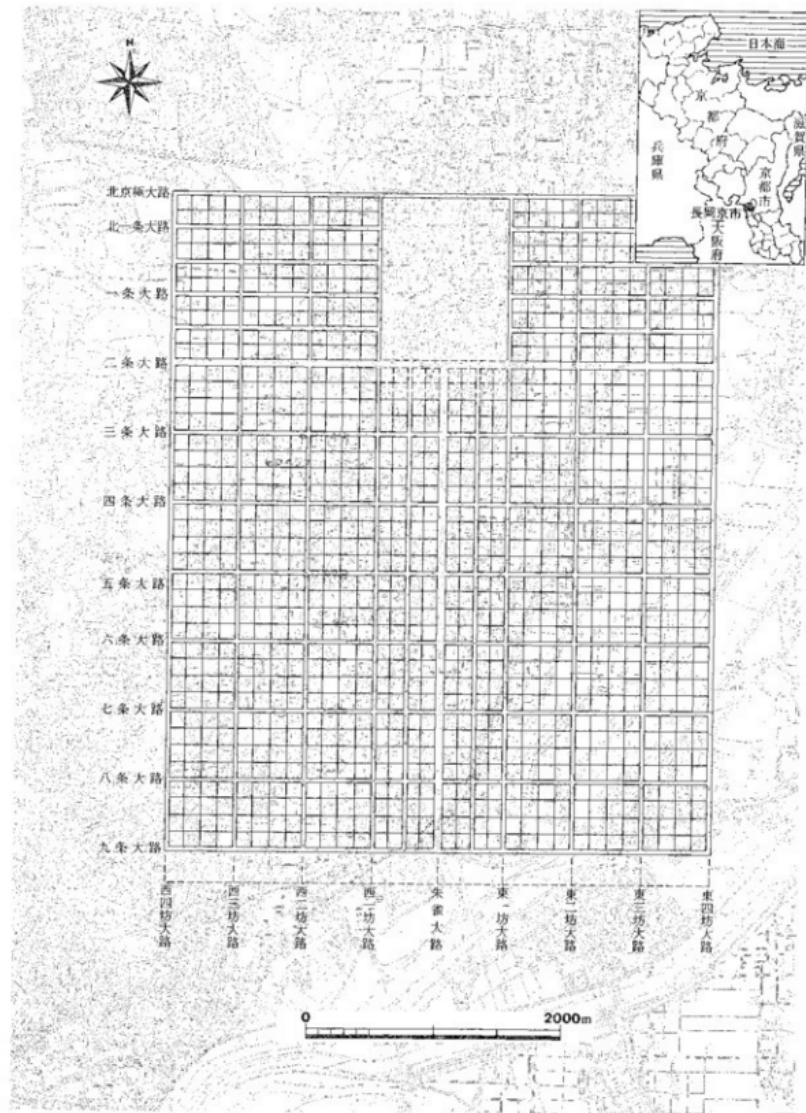
凡 例

1. 本冊は平成8年度に長岡市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は付表1のとおりである。その位置は第1図に示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』による旧字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京跡の条坊復原については、近年条坊が從来の復原より2町分北にずれることが判明しつつある。本書は新たな説である山中一章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原に従った。
5. 本書に使用する地形分類は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史資料編一」(1991年)に従った。
6. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
7. 本書の編集は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが行った。
8. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、下記の方々のご協力を得た。また、遺物写真の撮影は、主に写房楠草堂楠本真紀子氏のご協力を得た。

池庄司 淳・井上礼子・坂根 瞬・上野恵己・尾崎みづ樹・大谷 弘・岡村まり江・岡本弓美子・奥野久美子・久保直子・久保尚子・小畠絢子・佐藤陽子・酒井 歩・田中京子・谷村雅世・羽谷智香・西口秀樹・野村江美子・橋田邦夫・平井和子・向山智栄・村田美智子・森元希美・全京都建設協同組合の作業員

付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	土地所有者	調査期間(現地)	調査面積	備 考
走田古墳群 第1次調査	7CKPME-3	長岡京市 奥海印寺明神前31	宗教法人 寂照院	1995.10.2 ～1996.1.13	271m ²	海印寺跡 第3次調査
長岡京跡右京 第515次調査	7ANKNT-4	長岡京市 開田四丁目608-1	種 口 一 雄	1996.1.16 ～1996.1.31	29m ²	開田遺跡
長岡京跡右京 第527次調査	7ANISY-2	長岡京市 今里二丁目115他	友繁寿江子	1996.5.27 ～1996.6.18	169m ²	今里遺跡 今里城跡
長岡京跡右京 第528次調査	7ANKSC-6	長岡京市 天神一丁目313-3	小 森 一 栄	1996.6.3 ～1996.7.3	158m ²	開田城跡 開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京 第549次調査	7ANIST-10	長岡京市 今里三丁目12-1	宗教法人 大 正 寺	1996.11.5 ～1996.11.29	146m ²	今里遺跡 乙訓寺跡



第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)

本文 目 次

序 文.....	i		
凡 例.....	ii		
第1章 走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査概要.....	1		
1 はじめに	2 位置と環境	3 調査経過	4 走田古墳群の調査
5 海印寺跡の調査	6 まとめ	付編	
第2章 長岡京跡右京第515次調査概要	55		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第3章 長岡京跡右京第527次調査概要	61		
1 はじめに	2 検出遺構	3 出土遺物	4 まとめ
第4章 長岡京跡右京第528次調査概要	67		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第5章 長岡京跡右京第549次調査概要	73		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			

図 版 目 次

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

- 図版1 1. 空からみた調査地
2. 寂照院と走田古墳群（南から）
- 図版2 上. 調査前全景（南西から）
中. 調査前の8号墳（西から）
下. 調査前の9号墳（南から）
- 図版3 1. 8号墳全景（南から）
2. 8号墳横穴式石室全景（南から）
3. 同（北から）
- 図版4 1. 8号墳横穴式石室全景（西から）
2. 8号墳石室内の遺物出土状況
3. 8号墳出土遺物
- 図版5 1. 9号墳遠景（南から）
2. 9号墳全景（南から）
- 図版6 1. 9号墳墳丘東部の盛土（南西から）
2. 9号墳石室東側壁背後の状況（東から）
3. 9号墳石室西側壁背後の状況（西から）
- 図版7 9号墳横穴式石室全景（南から）
- 図版8 1. 9号墳石室奥壁と東側壁（南西から）
2. 9号墳石室奥壁と西側壁（南東から）
- 図版9 1. 9号墳石室玄室の東側壁（西から）
2. 9号墳石室玄室の西側壁（東から）
3. 9号墳石室羨道の袖石（北から）
- 図版10 1. 9号墳石室上面の礎床（南から）
2. 同（北から）
3. 9号墳石室下面の礎床（南から）
4. 同（北から）
- 図版11 1. 9号墳の石室排水溝全景（南から）
2. 9号墳の石室羨道の排水溝（南から）
3. 9号墳の石室排水溝完掘状況（南から）
- 図版12 上左. 9号墳の組合せ式家形石棺（南から）

- 上右、同（北から）
 下、同（東から）
- 図版13 9号墳石室床面上の遺物出土状況（左列、古墳時代の須恵器 右列、長岡京期の土師器）
- 図版14 9号墳石室堆積土中遺物出土状況（上左、土師器小皿 上右、黒色土器碗 中左・中右、土師器壺B 下、須恵器甕）
- 図版15 9号墳石室内出土遺物1
- 図版16 9号墳石室内出土遺物2
- 図版17 1. 8・9号墳間（D区）の陶棺出土状況（南東から）
 2. 同遺物出土状況（南東から）
- 図版18 陶棺1（上、上面 中、長側面 下、底部）
- 図版19 陶棺2（左・右、短側面）
 陶棺3（上、蓋受け部 下左、脚と円孔 下中・下右、長側面の穿孔）
- 図版20 8・9号墳間（D区）の出土遺物1
- 図版21 8・9号墳間（D区）の出土遺物2
- 図版22 8・9号墳間（D区）の出土遺物3、陶棺4
- 図版23 1. A区全景（北東から）
 2. 土葬墓群全景（北から）
- 図版24 1. 土葬墓S X 0 1（南から）
 2. 土葬墓S X 0 2（北から）
- 図版25 1. 土葬墓S X 0 3（北から）
 2. 土葬墓S X 0 8（南から）
- 図版26 1. 集石遺構S X 0 6全景（東から）
 2. 集石遺構S X 0 6全景（西から）
- 図版27 1. 土坑S K 0 7全景（北西から）
 2. 土坑S K 0 7 蔵骨器出土状況（北東から）
 3. 溝S D 0 4全景（東から）
- 図版28 土葬墓出土遺物
- 図版29 1. 土坑S K 0 5出土遺物
 2. 溝S D 0 4出土遺物

長岡京跡右京第515次調査

- 図版30 1. 調査区全景（東から）
 2. 拡張区全景（東から）
 3. 出土遺物

長岡京跡右京第527次調査

- 図版31 1. 調査地全景（北東から）
2. 左・1トレンチ南部（南から） 右上・SD03断面（東から）
右下・SD02断面（東から）

長岡京跡右京第528次調査

- 図版32 1. 西部調査区全景（北東から）
2. 東部調査区全景（北西から）

長岡京跡右京第549次調査

- 図版33 1. 調査地全景（東から）
2. 座棺墓西群（南西から）
3. 出土遺物

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)	iii
走田古墳群第1次・海印寺跡第3次（7CKPME-3地区）調査	
第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	2
第3図 走田古墳群と周辺の遺跡分布図 (1/10000)	4
第4図 9号墳石室の調査状況	5
第5図 石棺の取り上げ状況	5
第6図 現地説明会風景	5
第7図 調査地現況地形測量図 (1/200)	6
第8図 調査区配置図 (1/250)	7
第9図 8号墳の墳丘測量図 (1/100)	8
第10図 8号墳の墳丘土層図 (1/40)	9
第11図 8号墳横穴式石室実測図 (1/50)	10
第12図 8号墳出土遺物実測図 (1/4、1/1)	11
第13図 9号墳の墳丘測量図 (1/100)	12
第14図 9号墳の墳丘断面図 (1/80)	13
第15図 羨道に崩落した天井石（西から）	14
第16図 傾斜した西側壁上部の石材（南東から）	14
第17図 9号墳石室上面実測図 (1/50)	15
第18図 9号墳横穴式石室実測図 (1/50)	17
第19図 9号墳横穴式石室壁面図 (1/50)	18
第20図 9号墳石室床面実測図 1 (1/50)	19
第21図 9号墳石室床面実測図 2 (1/50)	20
第22図 排水溝断面図 (1/25)	20
第23図 組合せ式家形石棺実測図 (1/20、1/10)	22
第24図 組合せ式家形石棺の結合部元図	24
第25図 9号墳石室内遺物出土位置図 (1/50)	25
第26図 9号墳石室内出土遺物実測図 (1/4)	27
第27図 8・9号墳間(D区)の土層図 (1/40)	29
第28図 8・9号墳間(D区)実測図 (1/50)	30
第29図 陶棺実測図 1 (1/20)	31
第30図 底部外面の拓影 (1/2)	31

第31図 陶棺実測図2 (1/4)	32
第32図 8・9号墳間(D区)出土遺物実測図(1/4、1/2)	33
第33図 A区土層図 (1/80)	35
第34図 A区検出遺構図 (1/100)	35
第35図 土葬墓S X01実測図 (1/30)	36
第36図 土葬墓S X02実測図 (1/30)	36
第37図 土葬墓S X03実測図 (1/30)	36
第38図 土葬墓S X08実測図 (1/30)	36
第39図 集石遺構S X06実測図 (1/40)	38
第40図 土葬墓出土遺物実測図 (1/4、1/2)	40
第41図 土坑S K05・溝S D04出土遺物実測図 (1/4)	42
第42図 9号墳石室の構築工程単位 (1/80)	45
第43図 桂川右岸域の主要群集墳と石棺・陶棺分布図 (1/100000)	47
第44図 走田古墳群・井ノ内稻荷塚古墳と竜山石出土位置図 (1/50000)	49
第45図 走田9号墳と井ノ内稻荷塚古墳の出土土器対比図	51

長岡京跡右京第515次（7ANKN T-4地区）調査

第46図 発掘調査地位置図 (1/5000)	55
第47図 調査地検出遺構図・土層図 (1/100)	56
第48図 黄灰色砂質土上面等高線図 (1/100)	57
第49図 出土遺物実測図 (1/4)	58
第50図 周辺遺構配置図 (1/200)	59
第51図 調査作業風景（東から）	60

長岡京跡右京第527次（7ANIS Y-2地区）調査

第52図 発掘調査地位置図 (1/5000)	61
第53図 検出遺構図 (1/150)	62
第54図 S D52702西壁断面図 (1/40)	63
第55図 S D52703西壁断面図 (1/40)	63
第56図 S K52705断面図 (1/80)	63
第57図 S D52702出土遺物 (1/4)	64
第58図 S X52704出土遺物 (1/4)	64
第59図 S K52706出土遺物 (1/4)	64
第60図 S K52705出土遺物 (1/4)	64
第61図 S K52708出土遺物 (1/4)	65

第62図 柱穴出土遺物（1/4）	65
第63図 今里城の堀の輪郭（1/600）	66

長岡京跡右京第528次（7 A N K S C - 6 地区）調査

第64図 発掘調査地位置図（1/5000）	67
第65図 検出遺構図（1/200）	68
第66図 調査地土層図（1/100）	68
第67図 鎌倉時代以後の遺構（1/200）	69
第68図 飛鳥～奈良時代の遺構（1/200）	69
第69図 古墳時代の遺構（1/200）	69
第70図 出土遺物実測図（1/4）	70
第71図 出土土師器竈・縄文土器拓影図（1/3）	71

長岡京跡右京第549次（7 A N I S T - 10地区）調査

第72図 発掘調査地位置図（1/5000）	73
第73図 調査地土層図（1/100）	74
第74図 検出遺構図（1/100）	75
第75図 土坑S X01・11・12実測図（1/40）	76
第76図 土坑S X13～15実測図（1/40）	76
第77図 出土遺物実測図（1/2、1/4）	77

付 表 目 次

付表 1 本書報告調査一覧表	ii
付表 2 報告書抄録	79

第1章 走田古墳群第1次・海印寺跡第3次（7CKPME-3地区）調査概要

——走田古墳群・海印寺跡——

1はじめに

- 1 本報告は、1995年10月2日から1996年1月13日まで、京都府長岡京市奥海印寺明神前31において実施した走田古墳群第1次調査および海印寺跡第3次調査に関する成果をまとめたものである。
- 2 本調査は、走田古墳群ならびに海印寺跡に関する考古学的な資料を得ることを目的として実施したもので、調査面積は約271m²であった。
- 3 発掘調査は、平成7年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが調査員を派遣するなど協力して行った。現地調査は、埋蔵文化財センターの山本輝雄と中島眞夫が担当し、市教育委員会の中尾秀正が調整など調査全般にわたって援助した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、寂照院住職である佐藤俊順氏をはじめ、高橋由夫氏、高橋伸和氏、藤井徳治氏など地元住民の方々に種々の御協力を賜った。
- 5 発掘調査後の整理作業は、平成7年と平成8年の両年度にまたがって行い、井上礼子、上野恵己、大谷弘、向山智栄をはじめ多くの方々の協力を得た。
- 6 発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の方々より様々な御教示と御助言を賜った。
御芳名を記し、深謝の意を表します。（敬称略・順不同）

中山修一（長岡京市文化財保護審議会会長） 都出比呂志・杉井健（大阪大学）

中尾芳治（帝塚山大学） 高橋美久二（滋賀県立大学） 井上満郎（京都産業大学）

和田晴吾（立命館大学） 植村善博（仏教学大学） 成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）

奥村清一郎・小池寛（京都府埋蔵文化財調査研究センター） 森毅（大阪市文化財協会）

丸川義広・平尾政幸・小森俊寛・木下保明・吉崎伸（京都市埋蔵文化財研究所）

橋本清一・久保哲正（京都府立山城郷土資料館） 百瀬ちどり（長岡京市史編さん室）

山中章・松崎俊郎・中塙良・梅本康広（向日市埋蔵文化財センター）

平井三千彦（長岡京市文化財保護審議会委員） 尾野善裕（京都国立博物館）

藤井昇・岩崎誠・木村泰彦・原秀樹（長岡京市埋蔵文化財センター）

- 7 本調査の概略については、平成7年度に『長岡京市文化財調査報告書』第35冊として公刊しているが、本書の記述をもって現時点での認識とする。
- 8 本報告の執筆・編集は、中島の協力を得て山本が行った。また、成瀬正和氏には、年末の多忙な時期にも関わらず、赤色顔料の分析を快諾していただき、ここにその成果を付編として掲載することができた。

2 位置と環境

(1) 位置と地理的環境

京都盆地の西南部に位置する長岡京市は、その名が示すごとく今から1210年ほど前にこの地に造営された都城である長岡京にちなんで名付けられた人口約78000人を有する一地方都市である。北は向日市および京都市西京区、東は京都市伏見区、南は乙訓郡大山崎町、そして西は大阪府の三島郡島本町の2市2町と境を接する東西約6.5km、南北約4.3kmの東西にやや長い市域を成している。総面積19.19km²のうち、西部の山地や丘陵地を除く約65%ほどが居住可能な平坦地であって、中央部は住宅・商業・農業地域として、また東部はおもに工業地域に利用されている。本市は、京都盆地形成の源である桂川、宇治川、木津川の3大河川が合流して淀川に注ぐ地点に近く、桂川を源れば丹波を経由して山陰地方へ、宇治川を源れば近江から東海地方および北陸地方へ、木津川を利用すれば大和や伊賀、伊勢へ、さらに淀川を下れば瀬戸内の諸地域へと通じており、古くから交通の要衝としての役割を担っていた。たとえば、長岡京が当地に遷都された理由に、『続日本紀』では「以水陸之便」とあって、水陸交通の至便さが重視されたことからも窺い知ることができる。それは現代においても同様であって、市内の中央部から東部にかけてJR東海道本線、JR東海道新幹線、阪急電鉄京都線、名神高速道路、国道171号線などの主要幹線が南北に縦走しており、京都や大阪への交通は至極便利であるため、それら大都市の衛星都市として発展し、今日に至っている。

今回の調査地は、阪急長岡天神駅より西方に約1.5km、京都府長岡京市奥海印寺明神前31に所在する寂照院の敷地内、本堂のすぐ北側に位置している。この地は、市街地の中心部からかな



第2図 発掘調査位置図(1/5000)

り離れた所で、付近には田畠や竹林などの緑地がまだかなり残っているとはいえ、近年の宅地化の進行によって緑豊かな景観は次第に失われつつあった。また、調査地が所在する寂照院⁽¹⁾は、平安時代の前期に道雄僧都が創建したと伝える海印寺の子院の一つといわれ、奥海印寺や下海印寺などの大字として現在でも広範囲にその名をとどめているように、かつては広大な寺域に大伽藍を誇ったと推察されているが、現在では寂照院の本堂とそれに接続する護摩堂、仁王門など江戸時代の末期に建築された建造物をわずかに残すのみにすぎない。ただし、寂照院には鎌倉時代に造られた本尊の千手觀音坐像や四天王立像をはじめ、平安時代の菩薩坐像、南北朝時代の仁王立像などいずれも木造の古仏が数多く安置されており、往時の榮華をしのぶことができる。さらに、仁王立像の胎内に納められた「結縁交名および御成敗式目写」は、御成敗式目の写本の紙背に結縁交名を記したものであるが、康永3（1344）年銘があり、御成敗式目の写本としては二番目に古いとされるもので、また仁王立像造立の際に作成された結縁交名には西岡地方の13カ村におよぶ700人弱の人名が記されているなど、貴重な中世史料として注目されている。

調査地を地形的に見ると、式内社である走田神社が鎮座する丘陵地から高位段丘にかけての南傾斜面、標高でいうと73m～68mほどの範囲に立地している。しかしながら、調査地の南部と東部は竹藪の開墾や土取りなどによって平坦地にされており、そのうち南部の平坦地は東西方向に延びる土壘状の高まりによって南北に二分されていた（第7図）。また、調査地の西側も寂照院の墓地に利用されているなど大きな地形の変更が行われており、旧地形をとどめている箇所は非常に少ないものと考えられた。現状は、アカガシ、シイ、ヒノキなどの樹木や孟宗竹などが生い茂っており、地表面や崖面には大小の石材が露出および散在していた。

ちなみに、標高約73m前後とそれほど高所に位置しているわけではないが、南斜面に立地しているため南方向への視界は極めて良好であって、天下分け目の合戦場として著名な天王山や石清水八幡宮が所在する男山丘陵はもとより、遙か北河内の山々をも遠望することができる。

（2）歴史的環境

調査地は、先にも述べた海印寺の推定寺域跡にあたると共に、古墳時代後期の群集墳である走田古墳群の範囲にも含まれており、しかもかつては古い墓碑が数多くあったようで、近世には海印寺（寂照院）の墓地に利用されていたことが知られた。したがって、上記の遺跡に関係する遺構、遺物の検出が期待される所であった。

周辺の遺跡分布を概観すると、まず東方約350mの谷筋には谷田瓦窯跡群がある。窯本体は確認されていないが、これまでの調査で窯の壁体とともに熔着した瓦が出土しており、少なくとも2基以上の窯が存在するものと推察されている。この瓦窯跡では、平城宮式とともに長岡宮の造営瓦である7133型式の軒丸瓦と7757型式の軒平瓦が出土していることから、奈良時代にはすでに操業を開始し、その後長岡京遷都を契機に再開したことが推察されている。一方、西側の丘陵地には、古墳時代後期の群集墳である大原古墳群⁽²⁾が所在し、かつては25基ほどの古墳が存在したといわれるが、その大半は古くからの開墾や宅地開発などによって破壊されている。1974年に2基の古墳が発掘調査され、埋葬施設に横穴式石室を採用していることが確認されている。また、北

側の丘陵地には、古墳時代後期の稻荷山古墳群⁽⁴⁾や弥生時代後期の谷山遺跡⁽⁵⁾、それに古墳時代前期の首長墓である長法寺南原古墳⁽⁶⁾などが所在している。稻荷山古墳群は木棺直葬を埋葬施設とし、時期的には走田古墳群や大原古墳群よりも先行する群集墳と考えられているが、発掘調査されたことがなく、その実態はよく分かっていない。谷山遺跡は、乙訓地域では向日市の北山遺跡に次いで発見された標高約75mに立地する高地性集落である。円形、方形、五角形など各形態の堅穴住居7棟と掘立柱建物1棟が確認され、板状鉄斧や鋤先などの鉄製品が出土したことで注目されている。長法寺南原古墳は、全長約60mの規模をもち、埴輪を伴う葺石の施されていない前方後方墳である。後方部と前方部にそれぞれ大小の堅穴式石室をもち、前者の石室には三角縁神獸鏡など6面の舶載鏡をはじめ、武器類、農工具類などが数多く副葬されていた。その周辺には、埴輪棺を埋葬した南原東古墳群が分布している。そして南側の低位段丘上には、縄文時代から中世にかけての集落跡である奥海印寺遺跡⁽⁷⁾が分布しており、このように当地は非常に恵まれた歴史的な環境の中に位置しているといえよう。



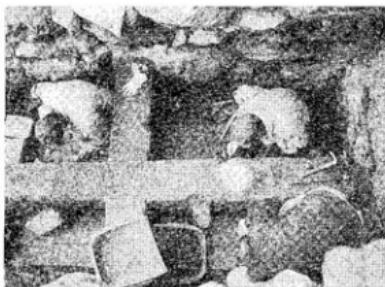
第3図 走田古墳群と周辺の遺跡分布図（1/10000）

3 調査経過

今回の調査は、老朽化していた寂照院本堂が1995年1月17日の早朝に発生した兵庫県南部地震の影響で若干の被害を受けたことから、本堂の北側に場所を移して建て替える計画が具体化し、先述した遺跡に関する遺構・遺物の有無を確認する目的で、その再建工事に先立って実施したものである。

調査地はアカガシ、シイ、ヒノキなどの樹木や孟宗竹、それに雑草が生い茂っていたため、まずこれらを伐採することを10月2日から始めた。その後10月6日から4日間を費やして地形測量を行い、10月13日になってようやく発掘調査に取り掛かることができた。

調査にあたっては、近世墓の存在が予測された平坦地（A区）と石材などが露出して古墳の存在する可能性が高かった傾斜面（B区・C区）に3カ所、延100m²ほどの調査区を設定した。そして、B・C区から人力によって掘り下げに着手した結果、両区とも表土を除去すると石列が姿を表し、横穴式石室の側壁であることを確認できたため、C区の古墳を走田8号墳、B区のそれを走田9号墳と命名した。そのうち8号墳は、遺存状態が極めて悪かったのに対して、9号墳は比較的残りがよく、副葬品などの検出が大いに期待された。9号墳の石室調査では、石室内にセクションを設定して堆積土の掘り下げを進めたが、大きな木の根株や天井石をはじめとする崩落した石材が埋没していたこともあって、調査は難航した。そして、11月13日には9号墳の石室内で組合せ式家形石棺の存在することを確認し、礎床面から古墳に副葬された須恵器とともに長岡京期の土師器がまとまって出土したこと、長岡京期に盗掘を受けていることなどが判明した。このため、古墳の副葬品は種類、数量とも極めて乏しく、組合せ式家形石棺も蓋石や長側石などの部材がすでに持ち



第4図 9号墳石室の調査状況



第5図 石棺の取り上げ状況

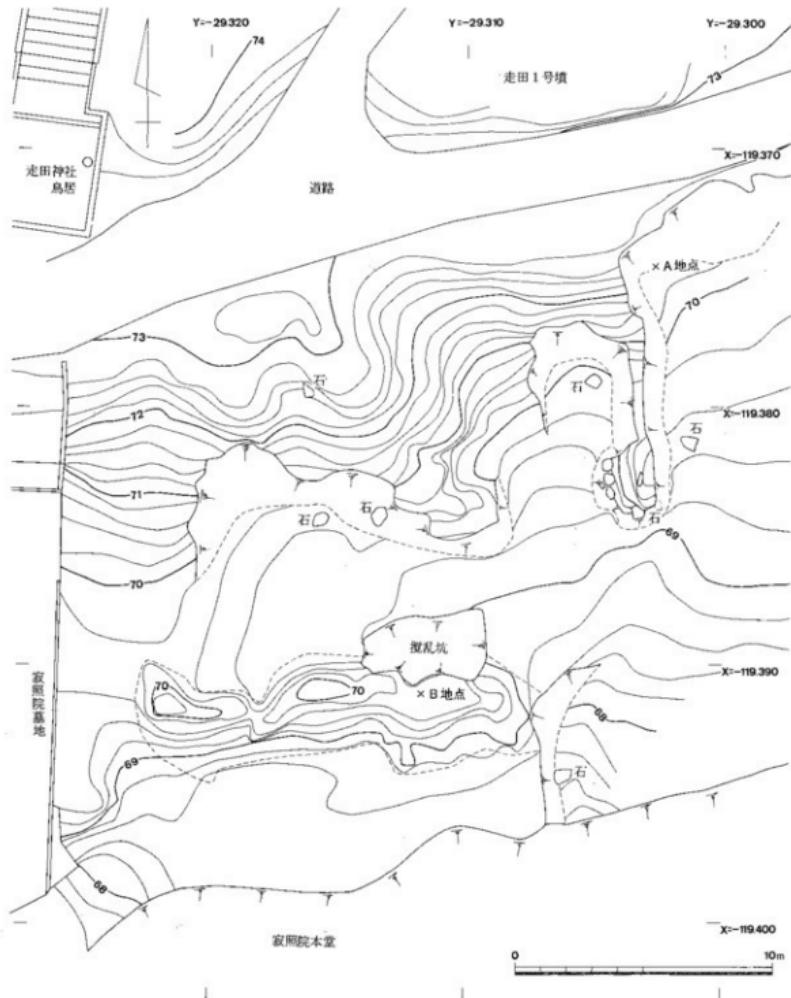


第6図 現地説明会風景

6 調査経過

去られて残っていなかった。

一方、平坦地での調査は、10月17日に重機を導入してA区の掘削に着手し、古墳の調査と並行して進める方針をとった。A区では、過去に重機で掘削されたとみられる擾乱坑が2か所あったものの、江戸時代の土葬墓群をはじめ集石遺構、溝、土坑など海印寺の墓地に関係する遺構・遺物を確認することができた。特に、各土葬墓には、陶器の椀や土師器の皿、それに銭貨などの副葬品が良く残っており、近世墓の実態を知る上で有効な資料が得られた。そして、これらの遺構

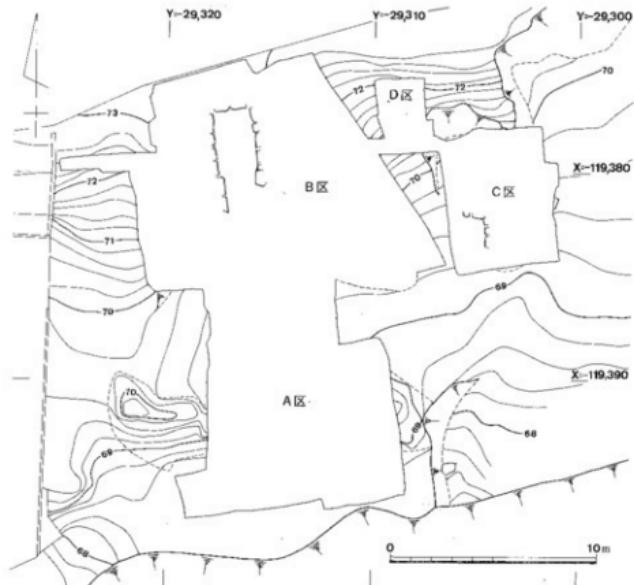


第7図 調査地現況地形測量図（1/200）

群をさらに追究するため、人力で調査区を東側に拡張するなどして調査を進めたが、ここでも木や竹の根株を除去するのに手間暇を費やした割りには顕著な成果を得ることはできなかった。

一応の調査成果を得た12月7日に報道機関へ調査内容を公表し、12月9日の午後から現地説明会を開催した。説明会は、冬の寒い日ではあったが、150名ほどの参加者が得られた。その後、12月18日に9号墳石室の石棺部材をクレーンで撤去し、石室床面のさらなる調査と墳丘を断ち割って構築状況を確認するための調査を引き続き行った。ところが、12月22日に9号墳東側の墳丘裾付近で陶棺の破片が出土したため、この部分に調査区（D区）を新たに追加設定してさらに調査を進めたが、年末にあたる12月28日に調査を一旦休止した。この間、9号墳の石室の保存を巡って、寂照院と市教育委員会との間で再三協議が重ねられた結果、12月21日に保存されることが決定したことは、調査担当者として非常に喜ばしいことであった。

翌1996年の1月5日から9号墳の石室とD区の調査を再開した。9号墳の石室では、礎床が重厚に造作されていることが明らかになるとともに、礎床下に排水溝の存在することを新たに確認できた。またD区で確認した陶棺は、すべて棺身の破片であって棺蓋は1点もなく、陶棺片の下層で須恵器や土師器など副葬品と考えられる遺物がまとまって出土したが、これらはすべて廃棄された状態を示しているものと判断された。そして、1月11日からA区を中心とする平坦地および9号墳の石室の埋め戻しを開始し、特に9号墳の石室については土嚢袋で充填して後日の保存整備にそなえることにした。これらの作業が終了した1月13日に、現地での調査を完了した。



第8図 調査区配置図 (1/250)

4 走田古墳群の調査

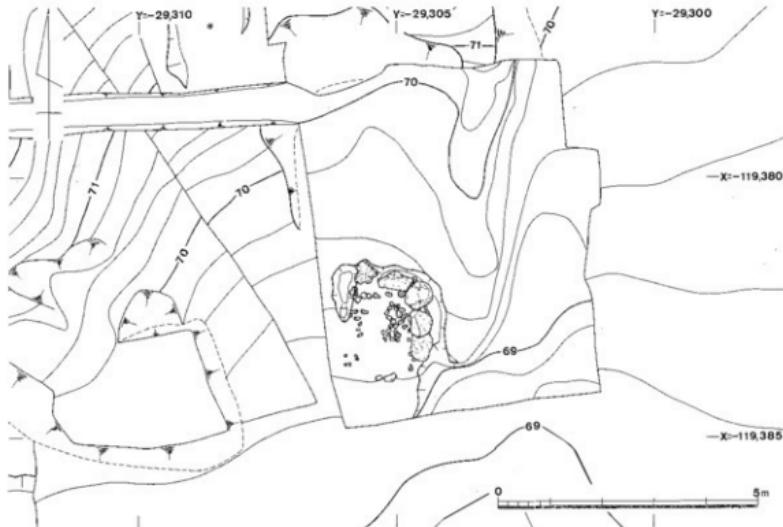
走田古墳群は、走田神社が鎮座する丘陵地から高位段丘にかけて分布する古墳時代後期に築造された群集墳である。過去の分布調査などで7基の古墳が存在したといわれるが、西側斜面の竹林に分布する古墳については竹の子栽培に伴う開墾などによってすでに消滅し、また南斜面の雑木林に所在する1号墳などの古墳も遺存しているとはいえ、墳丘の中央部が陥没するなどかなり破壊されているようである。古墳群を構成する古墳の埋葬施設は、石材が散在していることから横穴式石室であるらしいこと、陶棺が出土したといわれていること、寂照院の境内に点在する組合せ式石棺の部材4点はこの古墳群から出土した可能性のあることなどが推測されていたとはいえ、これまでに発掘調査が行われたことは全くなく、その実態は今一つ証然としない古墳群であった。

今回の第1次調査では、2基の古墳を新たに確認することができ、これで古墳の総数は9基になったが、本来はそれ以上存在したものと考えられる。また、今回の2基の古墳は埋葬施設がともに横穴式石室であって、しかも組合せ式家形石棺と陶棺の存在を確認できるなど上記の推測を証明する成果が得られた。

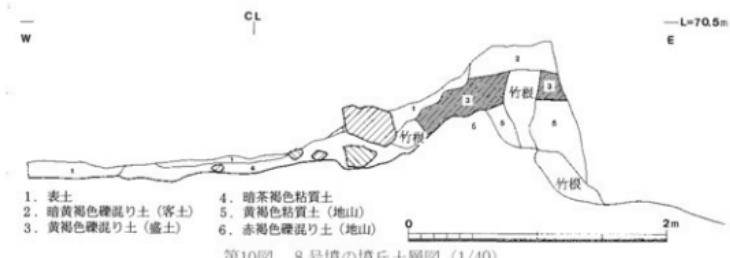
(1) 走田8号墳

A. 墳丘（第9・10図）

調査地の東端、調査前から南北に並ぶ石列が露出していた地点に設定したC区で確認した古墳である。調査前の状況をみると、竹藪の開墾などによって湾曲するように抉り取られており、北



第9図 8号墳の墳丘測量図(1/100)



第10図 8号墳の墳丘土層図（1/40）

側は比高約1.5mほどの崖面を成していた。さらに東側と南側は、ともに竹藪の開墾で完全に平坦地にされており、石列のすぐ東側に墳丘の残骸と考えられた南北方向に細長く延びる高まりをわずかに残すのみであった。この高まりは、幅2~3m、高さは1.65mほどの規模があり、頂部での標高は70.85mで、そこには孟宗竹が茂り、竹藪の客土中には明らかに移動されたとみられる大きな石材が露出していた。

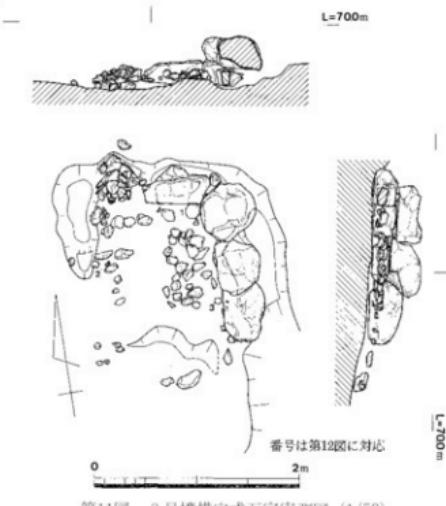
調査の結果、墳丘は地山面まで削平を受けており、ほぼ全壊に近い状態であることが明らかになった。しかしながら、竹藪の客土の下に盛土と考えられる黄褐色練混り土層を若干認めることができたので、墳丘の大半は盛土を施して構築されているものと考えることができた。盛土は、地山の直上に厚さ約0.2mほど遺存していたが、後述する9号墳で確認した旧表土は認められなかったため、地山を削り取って整地している可能性が考えられる。また、周溝については完全に削平を受けているようで、検出することはできなかった。ちなみに、表土や竹藪の客土中からは須恵器の杯蓋や甕の破片が少量出土している。

以上のように、墳丘の形態や規模などを知る情報はあまりにも乏しいが、後述する横穴式石室の規模や9号墳との位置関係などからみて、10mにも満たない小規模な円墳であったと推察しておきたい。

B. 横穴式石室（第11図、図版3・4）

埋葬施設は、南南西の方向に開口する横穴式石室であるが、墳丘の場合と同様に遺存状態が極めて悪い。奥壁と東側壁の一部がわずかに残るのみで、調査前に観察できた南北に並ぶ石列は東側壁に相当するものであった。このような遺存状態のため、石室の形態や構造、それに規模などの詳細は不明であるが、遺存する石材や抜取り跡より推察して、平面形態は胴のやや張る長方形で、主軸の方位をN-8°49'-Eにとる長さ1.3m以上、奥壁での幅が1mほどの小規模な石室であったと考えられる。また、袖の有無は不明だが、石室の幅が1m前後しかないと重視すれば、両袖式というよりはむしろ片袖式あるいは無袖式の可能性が考えられる。

横穴式石室は、奥壁の基底石2石と東側壁では奥壁付近の基底石が3石、2段目までがわずかに遺存していたにすぎず、奥壁の西側基底石も土圧などで破碎されていた。石室は、地山を掘り窪めた掘形内に幅約55cm、高さ約40cm前後の石材を平積みにして構築しており、石灰岩、緑色岩類、砂岩、チャート、頁岩～粘板岩など6種類もの岩石を使用していた。これらの岩石は、北西



第11図 8号墳横穴式石室実測図 (1/50)

りその多くが失われていた。礫には、緑色岩類、砂岩、チャート、頁岩～粘板岩など石室の構築材と同種の岩石が使用されており、円礫が多いことから小泉川など近接する河川から搬入されたものと考えられる。また、床面は北から南に向かって緩やかに傾斜していたが、この傾斜は旧状を示すものなのか、あるいは後世の削平によってなされたものかは判断できない。ちなみに、床面に排水溝は施されていなかったようで、確認することはできなかった。

C. 石室内の遺物出土状況（第11図、図版4）

石室は遺存状態が極めて悪いこともあって、石室内からは須恵器の杯身1点と壺および甕の破片が3点出土したにすぎない。そのうち須恵器の杯身（第12図1、以下第12図省略）は完形品であり、しかも石室の北東隅の床面上に口縁部を上に向かって状態で出土していることから、原位置をとどめている可能性が濃厚である。床面の南西部で壺（2）の破片が、また南東部で甕（3）の破片がそれぞれ出土しているものの、床面が搅乱を受けていることを考慮すれば、原位置をとどめていないことはもちろんのこと、二次的に紛れ込んだものとも考えられる。この他、石室の掘形内からは打製石鐵（6）1点と須恵器の甕片が少量出土しているが、これらも二次的に紛れ込んだものと考えてよからう。

D. 出土遺物（第12図、図版4）

8号墳から出土した遺物は、先にも述べたように極めて少量であった。横穴式石室からは、須恵器が数点出土しているが、そのうち須恵器の杯身1点のみが原位置を保っていると考えられ、これが唯一確実な副葬品と考え得るものである。また、表土や竹藪の客土からも須恵器の杯蓋や甕が出土しているが、そのうち杯蓋は石室出土の杯身と同じ型式であることを重視すれば、これも副葬品であった可能性が強い。

の山地に分布する丹波層群中に認められることから、そこで採取して運び込まれたものであると考えられた。一方、西側壁については完全に抜き取られており、かろうじて奥壁に接する基底石の抜取り跡を確認することができたのみである。この抜取り跡は、東西約0.45m、南北約1.1m、深さ約0.05mほどの規模があり、奥壁や東側壁の基底石よりもやや大き目の石材を使用しているようである。

床面には10cm大ほどの礫が散乱しており、本来は疊床として石室全面に密に敷かれていたものと考えられるが、竹の根株の影響や後世の削平などによ

1～3は、石室内から出土した須恵器である。1は杯身の完形品で、口径11.9cm、器高3.8cmある。

底部に焼歪みがみられ、外面には自然釉が付着している。2は壺の肩部かと考えられる破片で、肩部に凹線を1条巡らせている。4・5は須恵器の杯蓋で、とともに表土から出土したものである。天井部外面には回転ヘラケズリによる調整を施しているが、粗雑で中央部をケズリ残している。4は口径

13.5cm、器高4cmほどあり、1の杯身と同型式である。

6は、石室の掘形内から出土した四基式の打製石鎌で、長さ約1.6cm、幅約1.2cm、厚さ約0.4cmのサヌカイト製である。形態や大きさからみて、縄文時代のものであろう。

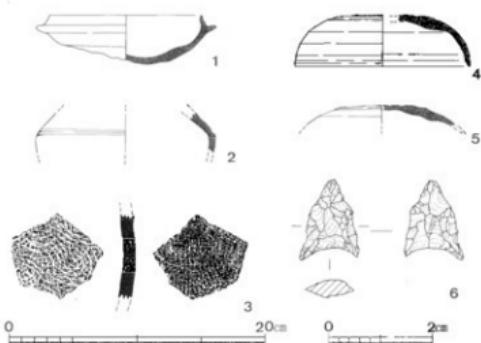
(2) 走田9号墳

A. 墳丘（第13・14図、図版5・6）

8号墳の西約12mで、それよりも約1mほど高い地点に築造されていた古墳である。南に傾斜する丘陵尾根の末端付近に立地しており、最高所での標高は約73mほどで、8号墳よりも占地はすぐれていた。

調査前の状況 墳丘の南半部は土取りによって大きく湾曲するように削平されており、削平によって生じた崖面の高さは2.1mほどあった。崖面には石材が露出しており、横穴式石室の存在することが予測された。また、削平を受けて平坦地にされた所にも石材が点在するなど、ほぼ完全に破壊されている状況であった。一方、北半部は樹木で覆われており、地表面に石材の露出する部分が若干窪んでいるなど等高線の乱れが認められたものの、遺存状態は比較的良好で、当時の状況に近いものと考えられた。ただし、墳丘の北側には幅約3mほどの農道が東西方向に走っており、また西側には水道管が埋設されているというから、それらの部分は地形の改変を受けている可能性が予測された。墳丘は全体を表土で覆われており、表土中には狐を主体とする土人形や土師器の小皿などを含んでいた。地元の人によると、走田神社の鳥居の前にかつて稲荷を祀った小祠が存在したと言うから、そこに供えられていたものと考えられる。

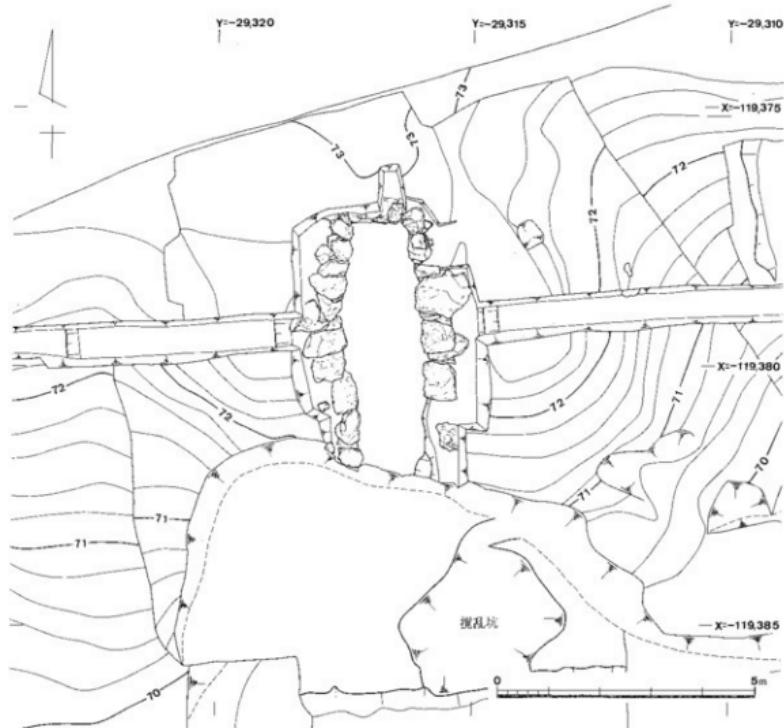
盛土 表土を除去すると、盛土と考えられる土層を確認でき、墳丘中央部に設定したサブトレント（A-A'ライン）や南側崖面（B-B'ライン）での断面観察などによって、おおよその構築状況を確認することができた。それによると、墳丘は地山を大きく削り出すような整地作業を行ふことなく、そのほとんどを盛土によって構築していることが明らかになった。盛土は旧表土の上面に施されており、厚さはA-A'ラインで1.6m、B-B'ラインで1.2mほど遺存していた



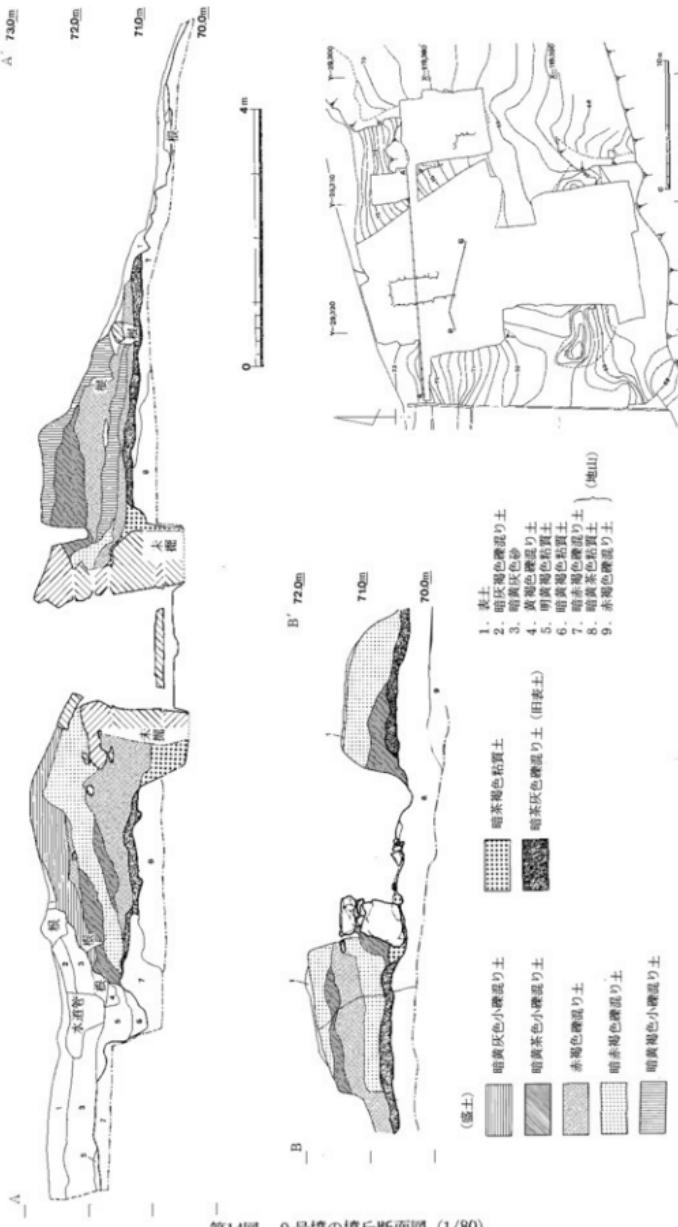
第12図 8号墳出土遺物実測図（1～5-1/4, 6-1/1）

が、後述する横穴式石室の高さを考慮すると、本来はさらに厚く施されていたことは確実である。盛土には、赤褐色系、黄灰色系、黄褐色系、黄茶色系、茶褐色系などに大別できる疊った粘質土を使用しており、土質や色調などからみて、石室の掘形および墳丘の周辺などを開削した際の高位段丘を形成する地山や旧表土などを活用したものであると考えられる。上記の4種類に大別した土を交互に積上げることによって墳丘を構築していたが、盛土の各単位は一様ではなく、薄くて約0.15m、厚いところでは約0.7mほどあり、特に墳丘の東部では比較的細かい単位で積み上げている傾向がみられた。これらの盛土は、横穴式石室の背後にも及んでいることから、石室の構築作業と並行して墳丘を築造していったことが想定できる。また、旧表土は地山の直上に堆積する厚さ0.15mほどの暗茶灰色疊混り土で、その上面はA-A'ラインで標高約71.3m、B-B'ラインで標高約70.8mとなり、ゆるやかな傾斜面に墳丘を構築していることが分かった。

墳形と規模 墳形と規模については、この古墳で旧状をとどめているのが墳丘の北半部のみであるため、推定の域をでないが、盛土上面の等高線を見るとおむね円弧状のカーブを描いていることを重視すると、墳形は円墳であったと考えてよいであろう。そこで、旧表土が途切れる地



第13図 9号墳の墳丘測量図（1/100）



第14図 9号墳の墳丘断面図 (1/80)

点を墳丘の裾部と考え、その距離をA-A'ラインで計測すると、約11mという数値が得られる。このラインは、おおむね横穴式石室の主軸に直交しており、これを直径とすれば石室は墳丘の中央よりも西側に片寄って構築されていることになる。また、墳丘中央部のサブトレンチ西部において溝状の遺構を断面で確認したが、この遺構は幅約0.9m、深さ約0.6mの規模で、その位置はちょうど旧表土がとぎれる地点にあたることから、周溝になる可能性も十分に考えられた。しかしながら、周溝とするにはあまりにも溝幅が狭く、どのような方向に延びるのか未調査のままで終わったため、その当否は不明であるといわざるを得ない。いずれにしても、明確な墳丘の裾部を確認することはできず、本古墳の墳形や規模を断定するには不十分な調査成果ではあったが、径約12m、高さ約3.5mほどの円墳になるものと推察しておきたい。

B. 横穴式石室（第15~22図、図版7~11）

埋葬施設は、南南東の方向に開口する両袖式の横穴式石室で、主軸はN 5° 21' Wにとる。石室は、玄室が比較的良好に遺存していたのに対して、羨道は後世にかなり破壊されており、しかも遺存する部分での石材も多くがすでに抜き取られていた。また、天井石については、羨道内に崩れ落ちていた長さ約1.8m、幅約0.6mほどもある1石（第15図）以外はすべて除去されており、

このため石室内は完全に土砂で埋没した状態にあった。石室内には、暗黄褐色系、暗茶褐色系、それに淡黄灰色系などの土が比較的大きな単位で堆積しており、床面上を覆う堆積土は比較的硬くしまっていたのに対して、石室の側壁ぎわの堆積土は木の根の影響もあってか非常にもろくなっていた。これらの堆積土中には、壁体から崩落した幾つかの石材が埋没し、また土師器、須恵器、黒色土器、瓦器など長岡京期から中世を中心とする遺物が出土している。

以下、石室の説明を進めるが、煩雑さを避けるため次の用語を設定しておく。石室の壁面に使用された石材は、水平方向を幅、垂直方向を高さとし、そのいずれかが1m以上のものを大形石材、0.5~1mのものを中形石材、0.5m以下を小形石材とする。また、石材間の隙間に埋め



第15図 羨道に崩落した天井石（西から）



第16図 傾斜した西側壁上部の石材（南東から）

られた10cmほどの石材は、小石と表記する。

a 掘形

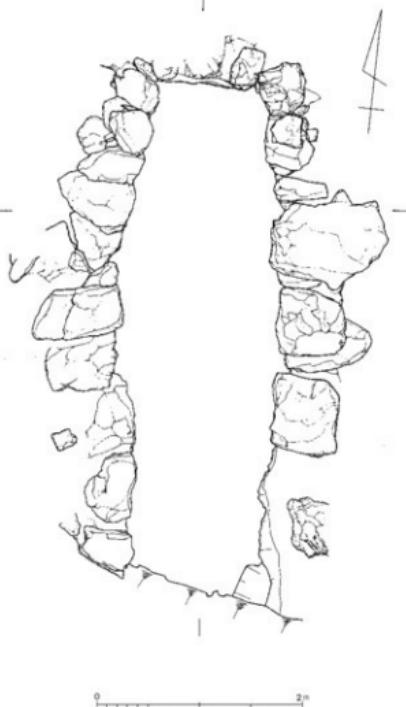
横穴式石室構築にあたっての掘形は、填丘の盛土をすべて除去した調査を行っておらず、このため全容を確認するまでには至らなかった。しかしながら、A-A'ライン（石室の玄室部分に相当）とB-B'ライン（石室の羨道部分に相当）における断面観察によって、以下に述べるような知見を得ることができた。

すなわち、掘形は旧表土の上面から掘り込まれており、底面は暗黄茶色粘質土の地山面に達していた。東西方向の断面は逆台形を呈し、上面での幅は玄室部分が約4.5m、羨道部分が約3.4mと南に向かって徐々に幅員を減していくよう、平面形態はおそらく羽子板状を呈するものではないかと考えられる。深さは、旧表土面が北から南に向かってなだらかに傾斜しているので、玄室部分が約0.9m、羨道部分で約0.4mと数値に差があるが、底面はおおむね水平で大きな高低差はなく、石室内の基底面にあたる部分を高さ約0.2mほど掘り残していた。また、掘形内の石室裏込めには、若干の石材を使用しつつも、おもに暗黄褐色粘質土によって行われていた。

b 玄室

玄室は、平面形態が胴張りの長方形を呈しており、床面での長さ約3.05m、幅は奥壁で約1.8m、中央部で約1.9mほどの規模がある。高さは、奥壁および東西の側壁とも約2.3mほど遺存していたが、そのうち西側壁では上部の石材が石室内に向って傾斜し、崩落する危険が高かったため（第16図）、その幾つかを調査を進める過程で除去した結果、最終的には約1.9mほどの高さになってしまった。

奥壁 奥壁は2～3段積みと考えられ、東西の側壁に挟み込まれた状況であった。持ち送りの角度は7°ほどである。基底石は2石で構成され、東側には幅、高さとも約80cmほどの中形石材を、西側には幅約75cm、高さ約110cmの大形石材を縦位の状態にして置き並べていた。東側の基底石上には、西側基底石の上面と横目地が通るように幅約75cm、高さ約40cmほどの中形石材を積上げ、さらに東側壁との隙間には小形石材や小石を詰めて補っていた。上段には、玄室幅にはば



第17図 9号墳石室上面実測図（1/50）

匹敵する大形石材を1石使用しており、両側壁との隙間を小形石材と小石で埋めていた。この上におそらく天井石が架けられていたと考えられるが、西側基底石の高さと上段の大形石材の高さがほぼ同じであることは、奥壁高の中間、標高でいうと71.55m前後の高さに横目地を通していきることになる。

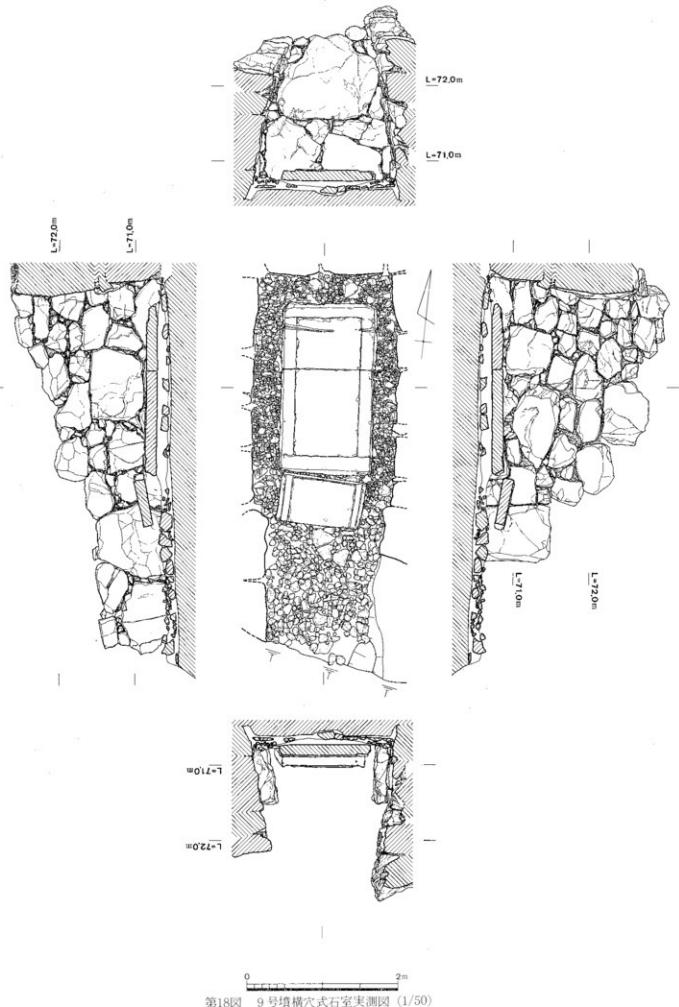
東側壁 東側壁は7段積み以上で、持ち送りの角度は約8°である。基底石には、幅35~80cm、高さ35~60cmほどの中形や小形石材を横位の状態で5石置き並べており、奥壁から3番目の石材がやや高くなっている以外はおおむね高さを揃えていた。2・3段目には中形や小形を中心とする石材を横位の状態にして積上げていたが、奥壁から3番目の石材は幅約110cm、高さが約60cmもある大形石材を使用しており、石材の隙間には小石などを多用して埋めていた。そして、3段目の上面は若干の凹凸があるといえ、おおむね横目地が通っていると判断することができ、その目地はさらに奥壁中位の横目地に連続していた。3段目より上位には、中形や小形の石材を用い、高さをおおむね水平に揃えながら1~2段づつ積み上げており、数条の横目地を確認することができる。上部に積上げられた石材をみると（第17図）、石材の短辺を石室の内側に用いたいわゆる小口積みにしている例がいくつかあり、なかには1m以上の奥行きがある石材も確認されているなど、大きな石材であっても小口積みにしようとした様子を知ることができる。ただし、基底石など下部の石材も同じ積み方であるかどうかは不明である。

西側壁 西側壁は6段積み以上で、上部の石材が内側に傾いていたため、持ち送りの角度は約12°と東側壁に比べて内傾斜の度合いが強くなっていた。基底石には、幅60~100cm、高さ40~50cmほどの大きさの石材を横位の状態で4石置き並べおり、東側壁よりも1石少なかった。奥壁に接する石材がやや高くなっていた以外はおおむね横目地が通っていると判断できる。2・3段目には中形および小形の石材を横位の状態で積上げていたが、ここでも奥壁から3番目に大形石材を使用しており、その上面は3段目の上面とおおむね横目地が通るように高さを揃えていた。この横目地は、東側壁のそれよりも直線的であって、奥壁中位の横目地に連続している。3段目より上位には、中形や小形の石材を用いて段積みしており、隙間を小石で埋めていた。こうした上部の石材は、調査の過程で除去した石材も含めて東側壁よりも小口積みにしている例が目立ち、壁体の構築にあたっては、小口積みを多用していたことがうかがわれる。また、裏込めには、人頭大や拳大の石材を混入していることが確認された。

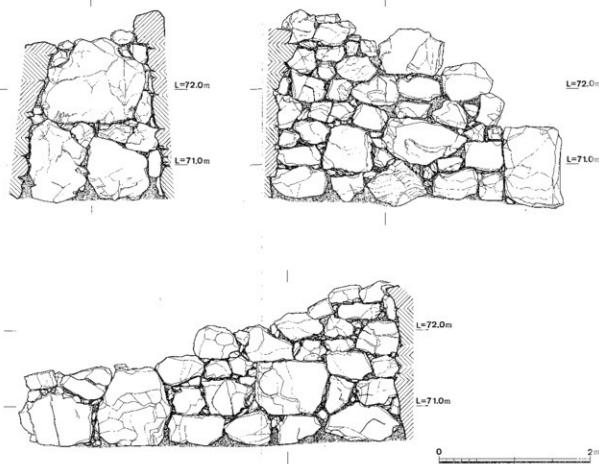
c 羨道

羨道は、先にも述べたように石材の大半が失われており、わずかに東西の袖石と西側壁の基底石1石、2段分が残るのみであった。このため、全体の規模や構造は不明だが、幅約1.5m、長さは2.3m以上あり、全長はおそらく6m前後に達するものと推察される。

東西の袖石は、高さ約1.05m、幅0.7~0.9mほどの大形石材をほぼ垂直に立てており、両者の上面はほぼ同じ高さ、標高でいうと71.5m前後に揃えていた。この高さで、先に述べた玄室の奥壁および東西両側壁に認められた横目地と一連につながっており、袖石の高さを石室構築の際の基準線にしていた可能性が濃厚である。基底石については、西側壁に残る1石が幅0.9m以上、



第18图 9号填横穴式石室平面图(1/50)



第19图 9号填横穴式石室立面图(1/50)

高さ約0.7mほどの大形石材で、玄室の基底石に比べてはるかに大きい石材を使用しており、これは東側壁でも同様であろうことは十分に推察できる。基底石の上には、袖石上面の高さまで中形石材を1石積上げており、したがって玄室の場合と同様に羨道の側壁にも横目地を通していった可能性が考えられる。また、東側壁の石材は遺存していなかったが、基底石の抜取られた跡の底部に大小の偏平な石材が残っており、これらの石材は基底石を安定して設置させるために据えられたものと考えられる。

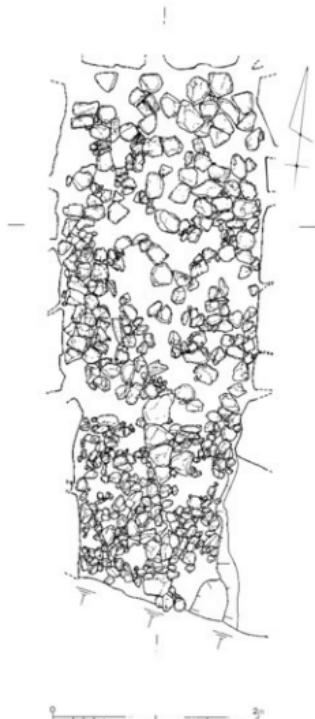
d 床面

礫床 床面は、玄室から羨道にかけて一面に礫を敷き詰めて礫床としていたが、礫を敷く前の基底面は北から南にむかって緩やかに傾斜しており、玄室奥壁と羨道との比高は約10cmあった。礫床は、玄室と羨道とでは使用した礫の大きさや敷き方などに相違が認められた。

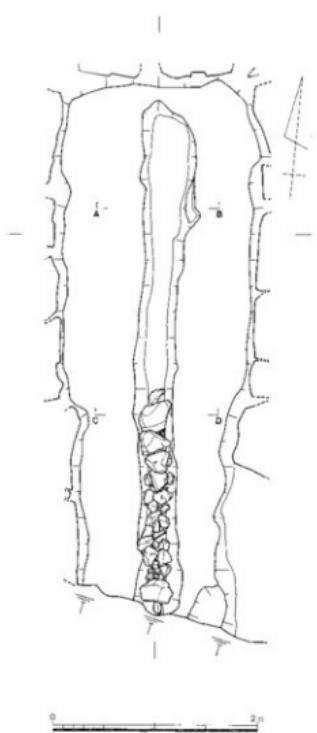
玄室では、まず下面に15~30cm大ほどのやや偏平な角礫を敷く（第20図）。角礫は、比較的平滑な面を上に向けて配されており、礫のない部分も多いことから、密というよりはむしろ粗雑に敷かれているといえる。その上面には、石棺を安置する範囲に5cm未満の細かいものを中心とした角礫を厚さ約10cmほど緻密に敷き、その周囲に10cm程度の円礫を壁面に至るまで均一に敷き詰めて礫床を仕上げていた。ただし、石棺の周囲に施された礫面は、石棺の底部よりもやや高くなっている。石棺の設置後に礫を補充している可能性もある。礫床上面のレベルはおおむね水平で、羨道のそれよりも10cmほど高くなっていた。このように、全体の礫床の厚さは20cmほどになり、かなり重厚かつ丁寧に礫床を作成しているが、これは總重量が数tにもなる石棺の荷重に耐え得るための構造上の工夫であったと考えられる。

これに対して羨道では、玄室上面に使用された礫よりもやや大きい10~15cmほどの円礫を重ねて敷き詰めたのみで、玄室で認められたような礫の使い分けは認められなかった。礫床上面のレベルは水平ではなく、南に向かって穏やかに傾斜していたが、この礫敷の範囲が羨道全面に及ぶのか、あるいは中途で終わっているのかは不明である。

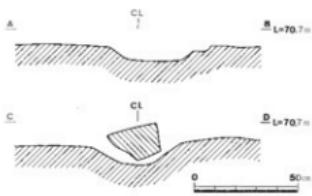
排水溝 矽床下の基底面には排水溝が施されていた（第21・22図）。排水溝は石室のほぼ中軸線上に掘り窪められていて、玄室の奥壁直前から始まり、羨道に至るまでほぼ直線的に延びていた。断面の形



第20図 9号墳石室床面実測図1 (1/50)



第21図 9号墳石室床面実測図2 (1/50)



第22図 排水溝断面図 (1/25)

態がU字状をした素掘りの溝で、玄室部分では幅が50cmほどあるが、深さは5cmしかなく、わずかに掘り窪められた程度であった。溝内には、礎床下面に施された偏平な角礫が入り込んでいた。

一方、羨道部分では幅約35cm、深さは10cmほどあり、南に向かって深さを徐々に増していくようで、溝底のレベルは玄室奥壁付近と羨道との高低差が17.5cmほどある。排水溝内には、30cm大ほどのやや大振りの礫を配している所があり、蓋をしているように見えるが、20cm大以下の礫が入り込んでいる部分も多く、必ずしも有蓋の排水溝とはいえないであろう。いずれにせよ、この排水溝は暗渠排水的な機能を有していたと考えられる。

e 石室の使用石材

石室の壁体に使用された石材は、石灰岩、緑色岩類、チャート、砂岩の4種類の岩石が確認された。そのうち、石灰岩がほとんどといっていいほど圧倒的多数を占め、その他の岩石はごく少量であったことは、石材を選別している可能性が考えられる。石灰岩は、東西の袖石に使用された大形石材から隙間に埋められた小石に至るまで大小様々な大きさのものが使用されており、表面にシワのあるものや風化によって剥落しつつあるものもあった。多量の石灰岩を使用していることで、石室内は全体に灰白色を呈しており、各種類の岩石を用いて構築された8号墳の石室とは様相を異にしている。この岩石は、当古墳群より北西約200mの丘陵斜面に露頭しており、そこから採取して運搬された可能性が濃厚である。石灰岩の使用例は乏しく、これまでのところ当古墳群に近接して分布する長法寺南原古墳の竪穴式

石室や大原古墳群の横穴式石室に認められている程度で、使用地域が限定されていた可能性がある。緑色岩類は、玄室の奥壁上段と東側壁上部で計3石が確認された他、天井石もそうであったが、いずれも中形及び大形石材であって、比較的大きな石材に限り使用されているようである。この岩石は、チャートや砂岩、頁岩～粘板岩などとともに丹波層群中に認められる石材であり、北側の山地に分布することが知られているので、そこで採取し運搬されたものと考えられる。緑

色岩類は、長法寺南原古墳の堅穴式石室をはじめ井ノ内稻荷塚古墳や今里大塚古墳の横穴式石室などで多用されており、この他チャートは玄室の東側壁上部で小形石材1石が確認された。

また、床面に敷き詰められた砾は、チャート、砂岩、頁岩～粘板岩、緑色岩類、脈石英など多種にわたる。円礫が多いことから、8号墳の場合と同様に、小泉川など近接する河川の河床砾をおもに使用しているものと考えられる。

C. 組合せ式家形石棺（第23図、図版12・15）

a 石棺の配置

横穴式石室の玄室から組合せ式家形石棺（以下、石棺と略称する）が確認された。石棺は、玄室中央部の砾床上に石室の主軸とほぼ平行するように安置されていたが、石棺と玄室奥壁および東西側壁との間隔は基底付近でも30～40cm程しかなく、ましてや側石が立ち蓋をした埋葬時の状態では人が通ることは全く不可能である。したがって、玄室には石棺上に棺を置くことでもしない限り追葬できる空間は残されていない。

ところで石棺は、2枚の部材からなる底石と南側の短側石1枚が完全な形で遺存していた他、長側石の破片も1点出土しているが、北側のもう1枚の短側石と蓋石、それに長側石のほとんどはすでに持ち去られていた。これらの持ち去られた石棺部材は、おそらく玄室の天井石を除去してそこから引き上げられた可能性が高いと考えられる。というのは、羨道の開口部から侵入してそこから石棺部材を持ち出したとすれば、開口部に近い南側の短側石を残し、遠くにある北側の短側石を持ち出していることは不合理で、むしろ前者を先に持ち出す方が作業手順の上から邪魔にならず、より効率的であろう。後述するように、盜掘後すぐに石室内が玄室から羨道に至るまで土砂で埋められ始めていることもこの想定と矛盾するものではない。

b 石棺部材

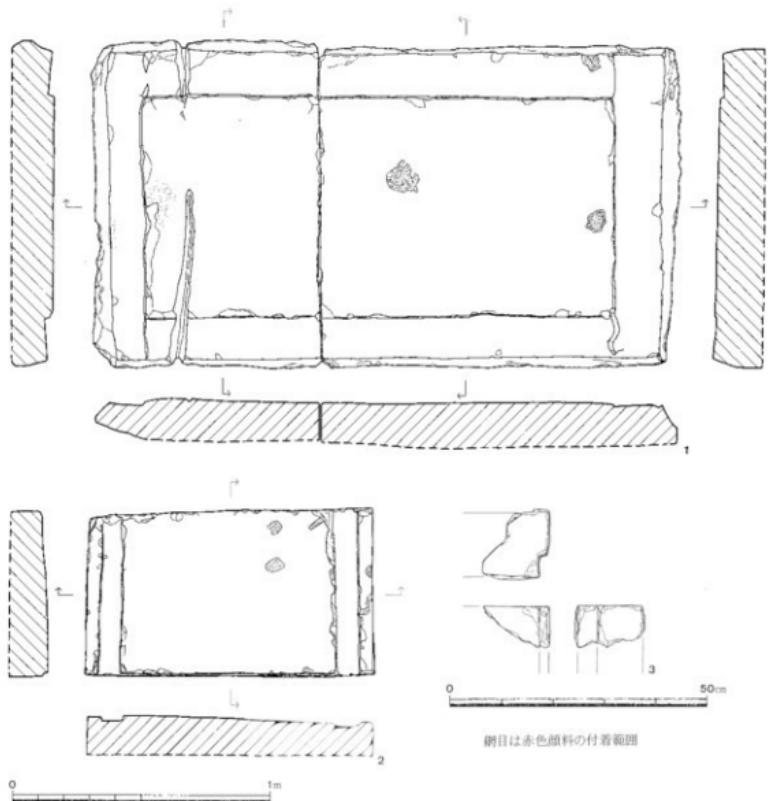
ここでは石棺の各部材について説明を加えるが、方向や上下を述べる場合は、石室内で組合せられた本来の姿に復元した状態でのそれである。

底石 底石（第23図1）は2枚の部材を重ね合わせたもので、北側の部材（以下、底石Aと呼称する）に比べて南側の部材（以下、底石Bと呼称する）の方がはるかに大きく、その比率は3.5:6.5である。底石AとBは、ほとんど隙間のない状態で南北に並べ置かれており、上面のレベルは前者が後者よりもやや低く若干の段差が認められたものの、おおむね水平に据えられているといつてよいであろう。これらの状況から、底石は動かされた形跡が全くなく、原位置をとどめているものと判断することができる。

2枚の部材からなる底石はおおむね平板で、ともに遺存状態は極めて良好であった。上・下面とも平滑に仕上げられているのに対して、側面は底石AとBの接する部位が垂直であることを除くと、いずれもやや裾広がりに粗く加工されていた。このため、上面と下面とでは法量が異なり、上面では長さ約215cm、幅約118cm、下面では長さ約227cm、幅約125cm、厚さは15.5～19.5cmほどであった。棺の内法は、長さ184cm、幅は北端で約85cm、南端で約83cmと南の方が若干狭くなっていた。重量は底石Aが約330kg、底石Bが約600kgである。

底石上面の四周には、側石を立てるために削り取って段を施しているが、段の幅は北辺が約13cmとやや狭い以外は17cm前後の規模がある。また、長側石よりも短側石を立てる方をやや深めに削っていたことは、短側石が長側石を挟み込むようにして組合されたことを示している。さらに、四周の段は水平ではなくてやや内傾するように削られていたが、これは側石を立てて組合せる際に、側石が外側に倒れないようにするための工夫であるといえよう。

底石Aの北端中央には、赤色顔料（ベンガラであることが判明、付編参照）の付着を2箇所で確認したが、その範囲は極めて狭く、しかも遺存状況が非常に悪かった。このため、赤色顔料が部分的にしか塗布されなかったのか、あるいは全面に塗布されたものが流れてしまった結果なのかは判断できない。また、底石Aの北寄りのところには、底石の長辺と直交する方向に断面がV字状を呈する溝状の彫り込みが東西にそれぞれ施されていた。西側の彫り込みは中央部付近から西端に至るまで、東側のは東辺の段にのみ限定しており、いずれも外方に向かって幅、深さとも



第23図 組合せ式家形石棺実測図（1・2-1/20、3-1/10）

に増大していた。これらの溝状の彫り込みは、底石としての構造上に機能的な意味を持たないものと考えられ、しかも彫り込みの表面が新鮮でないことから、盗掘時に石棺を分割するために施されたものではないことは確実である。したがって、原材料からこの底石を制作する以前に、別途の製品を作ろうとした段階で施された加工痕とみることもできるが、その可能性を指摘するにとどめ、断定は控えておきたい。

短側石 短側石（第23図2）は、底石Bのすぐ南側に内面を上に向かた状態で出土したもので、南端は漢道にまで及んでいた。短側石は礫を寄せ集めた高まりの上にのっており、このため礫床面から浮遊した状態で、しかも北から南に向かって傾斜していた。このことは、盗掘者が石棺を暴くにあたって外側、すなわち南側に倒したままの状態を保持しているものと考えてよく、礫の高まりは倒す際のクッションとして配されたものとも考えられる。したがって、これは南側に施された短側石と判断した。

短側石も底石と同様に遺存状態が良好で、しかも全体に平滑に仕上げられていたため、明瞭な加工痕はとどめていなかった。長辺は111cmあるが、短辺は東側が60cm、西側が64cmとやや歪な長方形を呈している。厚さは上辺部が約12cm、下辺部が約15cmあり、明らかに下辺部を厚くしているのは、組立てた場合に安定を保持するためであったと考えられる。重量は約230kgほどであった。

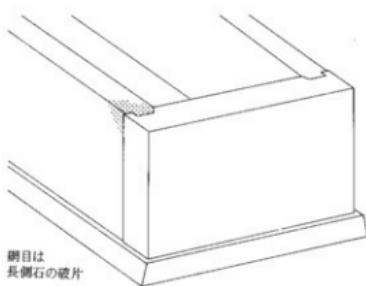
短辺の両端からそれぞれ5.5cmほど内側には、長側石と組合せるための溝が2条彫り窪められている。これらの溝幅は、上端で9.5cm、下端で9cm、深さは2cmほどで、断面が逆台形を呈している。両溝の間隔は上辺部で82cm、下辺部が83.5cmほどになり、上の方が若干狭くなっていた。また、底石と組合う内面下辺に面取りを施して角を切り欠いていたが、これは底石の段と雌雄関係になるものである。

長側石 長側石（第23図3）は、玄室の南西部、底石Bと短側石の間付近から出土した破片で、盗掘時の持ち出す際に破損した可能性が考えられる。この破片は、ちょうど短側石と組合う上辺の隅部に相当し、短辺の外側を削り取って内側に突出部を設け、それを短側石の溝にはめ込んで結合させるものである。突出部は、先端での幅8.4cm、基部の幅が約9cmある断面台形を呈しており、約1.5cmほど突出していた。蓋がのる上面は平坦に仕上げられており、厚さは約12.5cmである。この長側石は、出土した位置からみて西側の長側石であった可能性が濃厚であるが、一枚ものか、あるいは複数からなる一部材なのかは不詳である。

石棺の結合方法 以上が各部材の概要であり、ここでは再述することになるが、組合せ方と結合の方法を復元しておきたい（第24図）。

まず底石と側石の関係であるが、長・短いずれの側石も底石の上にのせる組み方で、底石の四周を削り取って段を設けた「有段技法」を用いて結合していた。この場合、底石の段幅が側石の厚さよりもやや広くなっているため、底石が外方に少しあみ出るようである。

次に短側石と長側石の関係をみると、前者が後者を挟み込む組み方で、短側石に溝を彫り窪め、そこに長側石の突出部を挿入して結合する「有溝技法」を用いている。



第24図 組合せ式家形石棺の結合復元図

た。肉眼観察によれば、各部材の色調はおおむね淡黄白色を呈しており、基質となる粒子は比較的細かいが、長石や石英などを含んでいる。

D. 石室内の遺物出土状況（第25図、図版13・14）

石室内からは、床面上と堆積土中からそれぞれ遺物が出土している。これらはさらに、古墳に副葬されたものと盗掘時や石室内に土砂が流入していく過程で埋没した後世の遺物に分けることができる。

a. 床面上の出土状況（第25図、図版13）

石室の床面や石棺上からは、古墳に副葬された須恵器と盗掘時に置き去られたと考えられる長岡京期の土師器が出土しているが、前者は玄室の南部に、そして後者は玄室北部に偏在する傾向が認められた。ちなみに、羨道の床面からは全く遺物は出土していない。

古墳に伴う遺物 盗掘を受けていたため、古墳に伴う副葬品は極めて乏しく、後述する須恵器以外は何も確認することはできなかった。

須恵器は、底石Bの南部に杯身4点と杯蓋2点、玄室の奥壁付近と南西隅で杯身がそれぞれ1点ずつ出土したが、杯身・杯蓋以外の器種が全く残されていないことは興味深い。底石B上に置かれたものは、完形もしくはそれに近い状態に復元できたもので、杯身の場合は口縁を下に、杯蓋は口縁を上に向かたものが多く、そのうち杯蓋（第26図7、以下第26図省略）は底石Bの段上に置かれ、杯身（6）と杯蓋（8）は身に蓋をして重ねた状態であった。また、玄室の奥壁付近と南西隅の杯身は、ともに砾床中から出土した破片であって、そのうち後者には赤色顔料（ベンガラであることが判明、付編参照）が付着していることから、本来は石棺内に副葬されていた可能性が考えられる。以上のような出土状況からみて、古墳に副葬された須恵器はすべて原位置をとどめたものではなく、盗掘の際に移動されていることは確実である。特に、石棺上のものは盗掘者が意図的に置き直したものとも考えられ、後述する長岡京期の土師器と一緒に再使用された可能性がある。

盗掘時に伴う遺物 盗掘に伴う遺物としては、長岡京期に限定できる土師器がまとめて出土しており、量的には古墳の副葬品と拮抗している。

最後に長・短側石と蓋石の関係は、もちろん側石の上に蓋石をのせて組合せるものであるが、長・短側石の上面部がいずれも平坦であって、結合のための細工を施していないことから、平面どうしが単に接するだけのものであったと考えられる。

石棺の石材種 石棺に用いられた石材は、すべて流紋岩質凝灰岩（姫路酸性岩類）であり、兵庫県南西部に位置する加古川流域に産出するいわゆる竜山石であることを確認できた

土師器は、底石A上の北西寄りに杯A（11）1点が離れて出土した以外は、おおむね玄室の北東隅付近からまとまって出土している。玄室の北東隅付近から出土したものは、杯A 1点、皿A 2点、椀A 1点、それに壺B 2点などがあり、そのうち椀A（15）が礎床中から出土した以外はいずれも礎床上に置かれていたものと判断できる。また、皿A（14）は杯A（12）の上に重ねられた状態であった。これらの土師器は、完形ないしそれに近いものばかりで、おおむね口縁部を上に向いた状態で出土したことから、盗掘時に置き去られたままの状態を保持しているものと考えられ、長岡京期に盗掘されたものと判断した。ちなみに、同時期の須恵器が1点も出土していないことは興味深い。

b 堆積土中の出土状況（図版14）

石室内の堆積土中から出土した遺物には、長岡京期の土師器壺B 2点と須恵器甕1点、平安時代中期の黒色土器椀1点と土師器小皿1点、それに中世の瓦器椀1点や古墳時代の高杯などがある。その大半が、完形ないしはそれに近い状態に復元できたもので、残存状態も極めて良好であった。

長岡京期の土師器壺Bは、玄室と羨道からそれぞれ1点ずつ出土し、前者（17）は床面から約0.8m、後者（16）は床面から約0.3mほど上方に埋没していた。

ともに口縁部を下に向いた状態で出土したことから、無作為に投棄されたものではなく、意図的に伏せ置いた状態で埋め置かれたものと考えられる。また、須恵器の甕（18）は玄室2カ所と羨道1カ所に分かれて出土し、前者は床面から約0.65mと約1.25m上方、後者は0.75mほど上方に埋没していたが、いずれも接合関係が認められたことから、破損したものが分散して埋められたものと考えられる。

平安時代中期の黒色土器の椀（19）と土師器の小皿（20）は、玄室からそれぞれ1点ずつ出土しており、前者は床面から約1.3m、後者は床面から約1.5mほど上方に埋没していた。これらの土器類も、長岡京期の土師器と同様に口縁部を下に向いた状態で出土しており、これらも伏せ置いた状態で埋め置かれた可能性が高い。また、鎌倉時代の瓦器椀（21）は、出土状態を確認することはできなかったが、平安時代中期の土器類よりも上方から出土したことは確実である。

以上のように、石室内の堆積土中から出土した遺物は、おおむね長岡京期から鎌倉時代までの長期間にわたるものであった。それらの出土状況から石室の埋没過程を復元すると、次のように



番号は第26図に対応

第25図 9号墳石室内遺物
出土位置図(1/50)

なる。すなわち、長岡京期の盗掘時にいくつかの天井石が取り除かれ、祭祀を行った後、石室内の半分以上が土砂で埋め立てられた。その後、平安時代の中期に再び人が侵入し、さらに上位にまで埋没が進行した。そして、遅くとも鎌倉時代の後期にはほぼ完全に埋没したものと考えることができよう。

E. 出土遺物（第26図、図版15・16）

9号墳の横穴式石室からは、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土しているが、盗掘を受けていたため、古墳に伴う副葬品はその種類、数量とも極めて少なかった。また、墳丘を覆う表土や盛土からも、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、窯の土製品などの遺物が出土しているが、ここでは石室出土のものに限定して説明する。

a 石室床面出土の遺物（第26図、図版15・16）

古墳時代の遺物 須恵器の杯身 6点と杯蓋 2点がある。

杯身（1～6）は、立上がりが短く内傾し、底部は丸みをもたず比較的平坦に近いため、全体に偏平な器形となっている。底部外面は、ヘラ切り痕をそのままとどめているものがほとんどで、回転ヘラケズリを加えて調整するものは少ない。口径9.4～10.4cm、器高2.7～3.6cmと全体に小さい。6が軟質焼成である以外は、いずれも硬質に焼成されている。また、1の内面と外面の一部には赤色顔料が付着していた。

杯蓋（7・8）は先の杯身と対応関係をもつ蓋である。7が口縁部との境に不明瞭ながらも稜をもち、口縁部が直立するのに対して、8は全体に丸みを帯びて稜をもたない。ともに、天井部外面はヘラ切り痕をそのままとどめ、硬質に焼成されている。口径12cm、器高は3.7cmである。

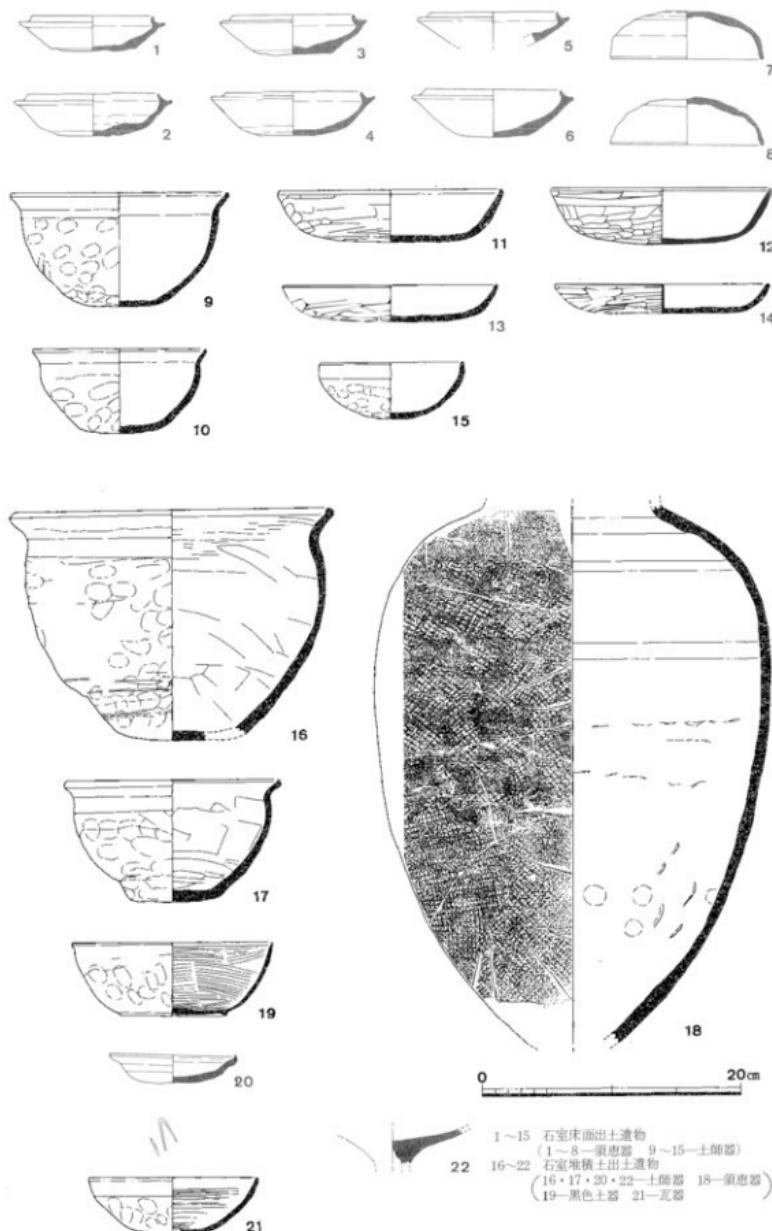
長岡京期の遺物 土師器の杯A 2点、皿A 2点、椀1点、壺B 2点がある。

杯A（11・12）は、平底の底部と外上方に延びる口縁部をもつ形態で、口縁端部を内側に丸く折り曲げている。内面はナデを施して仕上げ、外面は底部から口縁部までかけてヘラケズリするc手法で調整している。色調は橙褐色を呈し、11は口径17.6cm・器高4cm、12は口径17.3cm・器高4.3cmで、ともに杯AⅠに相当する。

皿A（13・14）は、短く外上方に延びる口縁部に平底の底部をもつ形態で、口縁端部を丸くおさめている。ともに内面はナデ調整、外面は杯Aの場合と同じくc手法を用いて仕上げている。口径は16.8cmで同じであるが、器高は13が2.8cm、14は2.3cmと若干異なるが、いずれも皿AⅡに相当する。

椀（15）は、丸底の底部に直立する口縁部をもつ形態で、通有の椀Aや椀Cと形態や調整技法が異なる粗雑な土器である。内面と口縁部外面のみナデを施すが、他は未調整で、ケズリやミガキなどは加えられていない。口径11.2cm、器高は4.4cmである。

壺B（9・10）は、鉢状の体部に屈曲して外反する口縁部をもつ形態で、口縁端部をわずかに上方に突出させ、底部は平底である。内面と口縁部外面のみにナデを施すが、他は未調整である。口径17cm・器高8.7cmの中型品（9）と口径13.6cm・器高6.6cmの小型品（10）があり、人面が墨書きされることの多い器形であるが、ともに施されていない。



第26図 9号墳石室内出土遺物実測図(1/4)

b 石室堆積土出土の遺物（第26図、図版16）

古墳時代の遺物 この時期の遺物として、土師器の高杯や甕などが出土しているが、そのうち甕については細片が多くて接合できず、全体の形態を把握することはできなかった。

土師器の高杯（22）は、杯部から脚柱部にかけての破片であるが、全体に摩滅しており、調整の痕跡は残されていない。

長岡京期の遺物 この時期の遺物としては、土師器の壺B 2点と須恵器の甕1点がある。

土師器の壺Bには、口径24.4cm・器高17.7cmの大型品（16）と口径17cm・器高9.4cmの中型品（17）がある。先にみた壺Bと比較すると、底部付近が屈曲し、口縁端部を内側に巻き込むなど形態的に若干の相違が認められる。また、体部内面は比較的幅広い板状のナデで調整し、16の口縁部内面にはハケメの痕跡が認められるなど製作技法の上でも異なる点がみられる。ただし、ともに人面が墨書きされていないことは同じである。なお、16の底部付近にある屈曲部にはリング状の圧痕が認められるが、これは製作時に置台として転用された椀などの容器の口縁部の痕跡で、甕の製作工程でタタキ技法などを省略した途中の器形であるという興味深い指摘がある。⁽⁹⁾

須恵器の甕（18）は口縁部を欠失するが、破片が1点も出土しなかったことからすると、当初から打ち欠かれたものであると考えられる。器形は砲弾形の体部をもち、底部は尖底気味におわるようである。外面には格子のタタキ痕が広範囲に残るが、上から軽くナデを施し、また肩部のみは強くナデを加えてすり消している。内面は比較的丁寧にナデ調整し、同心円の当て具痕を消している。硬質に焼成されており、現存高45cm、体部最大径は30.8cmある。

平安時代の遺物 黒色土器の椀1点と土師器の小皿1点があり、ともに9世紀でも後半頃のものと考えられる。⁽¹⁰⁾

黒色土器の椀（19）は、底部に断面三角形を呈する高台を貼り付けた椀で、内面と口縁部外面を黒色化するA類である。口縁端部内面に1条の沈線を施し、内面はヘラミガキ調整して仕上げている。色調は茶褐色で、胎土に長石や雲母を含むなどの特徴がある。口径15.4cm、器高5.6cmである。

土師器の小皿（20）は、口縁部が屈曲する形態で、端部を丸く肥厚させている。口径9.9cm、器高2.2cmである。

鎌倉時代の遺物 瓦器の椀が1点あり、時期的には13世紀後半頃のものと考えられる。⁽¹¹⁾

瓦器椀（21）は、口径13.2cm、器高4.2cmで、底部に断面三角形の非常に低い高台を貼り付けている。外面の調整を省略するが、内面にはヘラミガキし、見込みに鋸歯状の暗文を施す。

(3) 走田8号墳・9号墳間（D区）

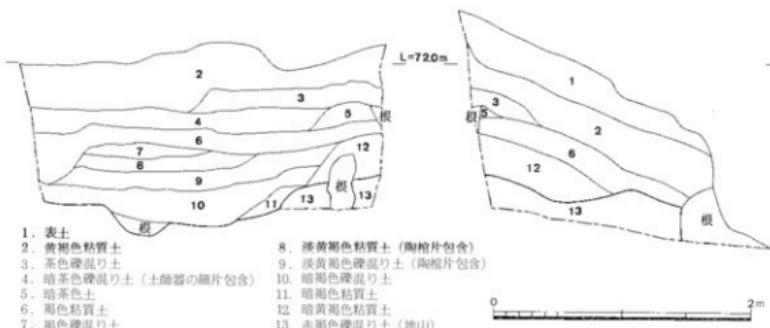
9号墳の墳丘を断ち割り作業中に、その東端部において陶棺の破片が数点出土した。そこで、陶棺片を追究するため東西約2.3m、南北約2.8mの調査区（D区）を新たに設定して調査を進めた結果、陶棺と土師器、須恵器などの土器類が上下に折重なった状態で埋没していることを確認した。

A. 陶棺・土器類の出土状況（第27・28図、図版17）

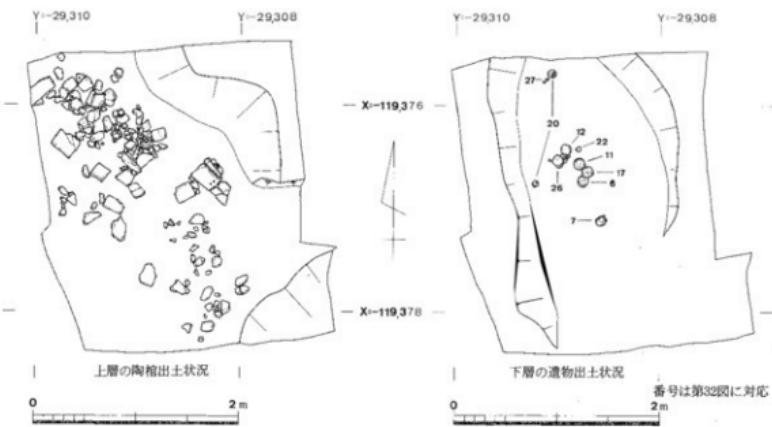
陶棺や土器類が出土した場所は、1号墳のすぐ南側、8号墳の石室から北西に約5m、9号墳の石室から東へ約6mに位置している。この地点は、ちょうど3基の古墳の裾部が接する付近にあたると推察され、南東方向に下降する窪地内、標高にして71.1m～70.7mほどの所であった。調査区の層序は、上から表土、黄褐色粘質土、茶色疊混り土、暗茶色疊混り土、褐色粘質土、褐色疊混り土、淡黄褐色粘質土、淡黄褐色疊混り土、暗褐色疊混り土の順で堆積しており、そのうち表土には須恵器の短頸壺や甌の土人形などが、暗茶色疊混り土層には瓦器椀や土師器皿などの細片を包含していた。

陶棺は淡黄褐色粘質土と淡黄褐色疊混り土から出土したが、すべて棺身のみの破片であって、棺蓋は1点も出土しなかった。陶棺片は、東西約1.5m、南北約3.5mほどの範囲に面的に広がっており、脚部の破片が調査区の北側に集中する傾向があったとはいえ、比較的小さい破片が多く、かなり散乱した状態で埋没していた。そして、これらの陶棺片を取上げたところ、その下に堆積する暗茶色疊混り土層から土師器の椀・甌、須恵器の杯身・杯蓋・短頸壺・甌・平瓶・甌、それに鉄鏃などの遺物がまとまって出土した。土師器や須恵器などの土器類は、完形もしくはそれに近い状態に復元できたものが多いものの、陶棺の場合と同様にかなり散乱した状態で埋没していた。これらの遺物は、後述するように陶棺の年代とおおむね一致しており、陶棺が埋葬された古墳の副葬品であることは間違いないであろう。

以上のような出土状態、それに陶棺の棺蓋が1点もないことを考慮すると、陶棺や土器類などは本来この場所に埋葬されていたものが攪乱されたのではなく、盜掘を受けた古墳から持ち出されたものをここに廃棄したものと考えるべきであろう。そこで、どの古墳に埋葬されていたのかが問題になるが、今回確認した走田8号墳と9号墳、それに1号墳など近接する古墳をその候補に上げることができよう。そのうち、すぐ北側に所在する1号墳が、位置的にみて最も可能性が高いのではないかと考えられる。また、廃棄された時期については、陶棺を包含する土層の上位に土師器や瓦器など中世の遺物を含む堆積層が認められたので、それよりも古い時期であること



第27図 8・9号墳間(D区)の土層図(1/40)



第28図 8・9号墳間(D区)実測図(1/50)

は確実であり、あるいは9号墳が盗掘を受けた長岡京期にまで溯る可能性も十分に考えられる。

ちなみに、この地点から約5mほど東にあたる農道の崖面下(第7図のA地点)から陶棺の棺蓋片(第31図の1)が1点出土しており、この棺身と組合う可能性が考えられる。さらに、A区の表土中(第7図のB地点)からも、先に述べた棺身とは明らかに別個体と考えられる棺身の破片(第31図の2)が1点出土している。

B. 陶棺(第29~31図、図版18・19・22)

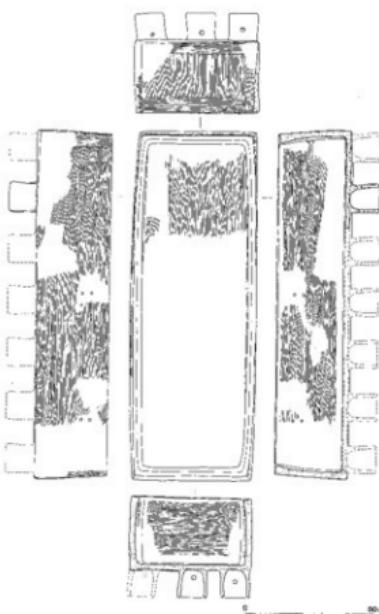
ここでは、8・9号墳間以外の地点で出土した陶棺もあわせて説明したい。

棺身 第29図は、走田8号墳・9号墳間のD区で出土した須恵質四注式と考えられる陶棺の棺身で、ほぼ旧状に復元することができた。形態は、中央部がやや膨らむ平面長方形をした箱形で、底部には3行7列に配された計21本の脚が付く。側壁は四面ともやや内傾気味に立上がるため、底部では長さ135.8cm、最大幅49.2cm、最小幅45.5cm、上縁部では長さ132.2cm、最大幅48cm、最小幅43cmと上下で法量が若干異なっていた。高さは29cm、脚を含めた全高は39.5cmである。厚さは、底部で約1.7cm、側壁で約2.3cmと前者が後者よりも薄く造られている。棺の内法は、長さ129cm、最大幅が41cmであって、成人を伸展の状態で埋葬できる大きさではなく、子供あるいは北平尾1号墳のように改葬骨を埋葬した可能性が考えられる。上縁部の四周には、内側に粘土紐を貼り付けて凹状の蓋受け部を設けていた。蓋受け部は幅が約3.5cmほどあり、その中央部は深さ約0.6cmほどU字状に窪んでいた。長側壁には、2面ともに縦位に穿たれた2個1組の小円孔が3カ所に配されていた。小円孔はいずれも径約1cmほどの大きさで、外面から内面に向かって穿たれていた。小円孔の間隔は、縦位が3.5~4cm、横位が48.5~49cmほどあり、ほぼ均等に配置されていることが知られる。底部外面に同心円文の当具痕(第30図)が残っていることから、タキ技法によって成形し、ハケメやナデ調整を加えて仕上げていることが知られた。ハケメは、

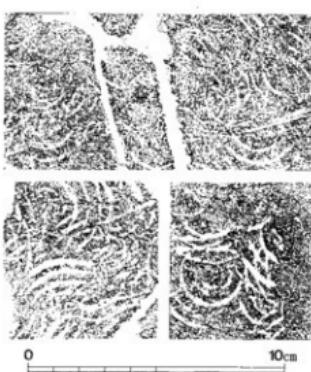
底部外面以外のすべての面に施されており、基本的に横方向であるが、短側壁及びそこに近い長側壁の外面には縦方向に施されていた。脚は、直径約11.5cm、高さ約10.5cmほどの円筒形で、粘土紐を巻上げて成形し、ロクロによるナデを加えて仕上げていた。各脚には、いずれも長辺と平行する方向に径約1.75cmほどの円孔を2個穿っているが、穿たれている高さは一様でなく不揃いである。この円孔は、短側壁の方では見えるのに対して、長側壁の方からは見ることができない。円孔は棒状のものを外から差込んで穿っていた。焼成は必ずしも均一ではなく、硬質と軟質に焼成された部位がある。色調は、硬質に焼成された部分は暗灰色、軟質焼成された部分は灰褐色を呈していた。胎土は比較的に精良で、大きな砂粒をあまり含んでいない。

第31図2は、A区の表土から出土した須恵質四注式と考えられる陶棺の棺身片である。底部から側壁にかけてL字状に屈曲する部位の破片で、底部外面には円筒形の脚の剥離した痕跡が残っていた。厚さは底部が2.7cm、側壁が約1.7cmで、底部の方を薄く造作している。底部内面は横方向、側壁の内外面は縦および横方向のハケメを施し、底部外面をナデ調整して仕上げていた。硬質に焼成されており、色調は灰色を呈していた。

棺蓋 第31図1は、8号墳の北北東の崖面下から出土した須恵質四注式陶棺の棺蓋である。四注式屋根の短側面にあたる部位の破片で、厚さは約2cmほどあり、上部には復元すると径約6.5cmほどの大きさになる円孔が穿たれている。内面の下部には、粘土紐を貼付けた凸帯を施しているが、これは棺身の蓋受け部と雌雄関係になつて組合う部位である。凸帯は断面が台形で、幅は基部で約4.5cm、先端で約2cmあり、約2



第29図 陶棺実測図1 (1/20)



第30図 底部外面の拓影 (1/2)

cmほど突出していた。内面に同心円文の当具痕が残っていることから、タタキ技法で成形したものと考えられる。調整は、外面に縦および斜め方向の比較的細かいハケメを施し、内面にはナデを加えて仕上げていた。硬質に焼成されており、色調は灰色、胎土は精良で砂粒をほとんど含んでいない。この蓋は、出土位置からみて第29図の棺身と組合う可能性がある。

C. 出土遺物（第32図、図版20～22）

陶棺の下層で出土した遺物には、須恵器、土師器、鉄鏃などがあり、すべて古墳の副葬品と考えられるものであった。その大半を占めるのが須恵器であって、他はごく少量である。

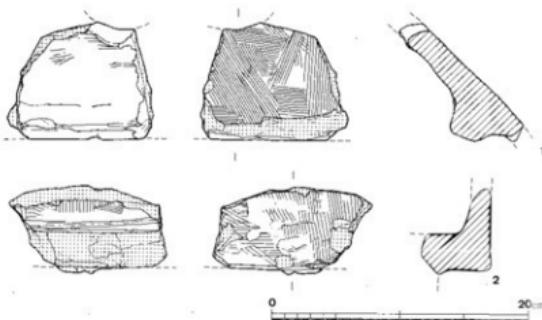
須恵器 須恵器には、杯類、高杯、短頸壺、甌、平瓶、甕などの器種があり、そのうち杯類は古墳時代に通有の杯H・杯H蓋と、蓋に宝珠つまみをもつ杯G・杯G蓋に大別することができる。

杯H（1）は、立上がりが短く内傾し、底部はやや丸みをもっている。底部外面はヘラ切り痕をそのままとどめ、口径9.1cm、器高は3cmある。杯H蓋（2～8）は、全体に丸みを帯びるもの（3・7・8）と、天井部が比較的平坦で口縁部が直立するもの（2・4～6）があり、後者は杯Gと考えた方がよいのかもしれない。口径10cm前後、器高は3.5cm前後のものが多いが、8のように口径14.2cm、器高が4.3cmのやや古い特徴を示すものがある。天井部外面はヘラ切り痕をそのまま残すものがほとんどで、回転ヘラケズリ調整を施すものは極めて少ない。全体に硬質焼成されているものが多く、5・6は軟質で焼成が不良である。

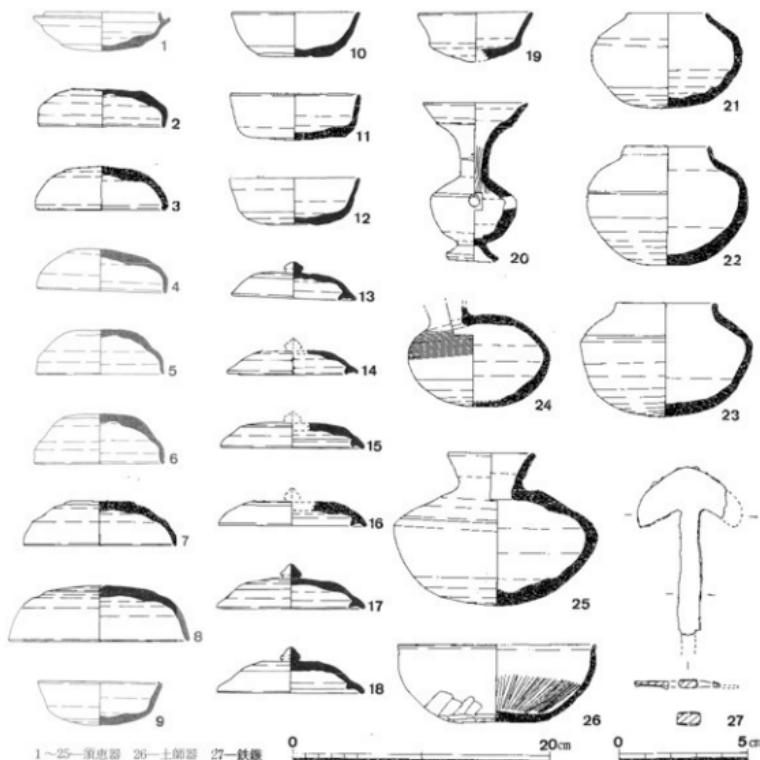
杯G（9～12）は、口径10cm前後、器高が3.5cm前後ある。底部は平底で、その外面には回転ヘラケズリを施すものとヘラ切り痕をそのままとどめるものがある。杯G蓋（13～18）は、全体に笠形状の形態をもち、つまみは整った宝珠形を呈している。かえりは口縁部より下方に突出するものが14のみで、他はいずれも内側におさまる。天井部外面は、回転ヘラケズリにより調整しているものが多い。法量には、口径11.5cm・器高3.5cm前後のものと口径10cm・器高3cm前後の2種が認められる。

高杯（19）は、口縁部が外反する杯部の破片で、脚部の形状は不明である。口径は9cm。

短頸壺（21～23）は、頸部が短く内傾し、肩部も丸みをもって明瞭な稜はない。22・23の体部最大径付近には、1条の沈線を巡らせており。丸底の底部外面は、いずれも回転ヘラケズリにより調整している。21は口径6cm・体部最大径11.7cm・器高7.3cm、22は口径6.9cm・体部最大径12.5cm、器高9.1cm、23は口径7.8cm・体部最大径13.3cm・器高8.7cmある。



第31図 陶棺実測図2 (1/4)



第32図 8・9号墳（D区）出土遺物実測図（1～26-1/4、27-1/2）

瓶（20）は、底部に裾広がりの脚台が付くものである。体部の中央には径0.8cmの円孔を穿ち、肩部には凹線を1条巡らしている。口径8.2cm、器高12.3cm、体部最大径7.3cm、高台径は3.6cmある。

平瓶（24・25）は偏球状の体部をもつが、口頸部は体部のほぼ中央から上方に延びるもの（25）と、やや片寄った位置から斜め上方に延びるもの（24）がある。底部外面を回転ヘラケズリ調整し、24の肩部にはカキメを施している。ともに、自然釉が厚く付着している。

土師器 土師器には、椀Cと甕が1点ずつ出土しているが、甕については図示していない。

椀C（26）は、口径15.4cm、器高6cmほどある深手の椀で、口縁端部をわずかに外反させている。底部外面はケズリによって調整し、内面には放射状の暗文が施されている。

鉄鎌 鉄鎌（27）は、幅の広い三角形の鎌身に細長い鎌被部（頸部）が付く形態であるが、鎌身の一方と茎部は欠失して存在しない。いわゆる飛燕式とも呼ばれるもので、鎌身は長さ2.4cm、幅3.4cm以上、厚さ0.3cm、鎌被部は断面方形で長さ4.7cm、幅0.8cm、厚さは0.4cmある。

5 海印寺跡の調査

海印寺跡に関係する発掘調査は、寂照院の南側で過去に2度実施されている。第1次調査は1991年に仁王門のすぐ南西部で行われたもので、古墳時代後期の土器溜りと柱穴、戦国期から江戸時代にかけての井戸、落ち込み、柱穴、それに繩文時代から古墳時代の間に形成された土石流堆積などが確認されている。¹²⁾ 第2次調査は仁王門の南東部で1993年に行われたもので、13世紀から16世紀にかけての井戸、土坑、溝、落ち込み、柱穴など数多くの遺構が確認され、16世紀前半の井戸からは舟形や刀形の木製品など興味深い遺物も出土している。¹³⁾ 以上のように、これまでの調査では、中・近世の海印寺に関わる成果が中心で、創建瓦はもとより伽藍に関係すると考えられる遺構は未検出であった。

今回の第3次調査は、寂照院の北側では初めての調査であって、走田9号墳の南側に設定したA区で海印寺跡に関係する遺構、遺物を確認することができた。遺構には、土葬墓4基、集石遺構1基、溝1条、土坑2基などがあり、その他に火葬墓の存在した可能性を示唆する蔵骨器が1点出土するなど、そのほとんどが墓地に関係するものである。

(1) 層序（第33図）

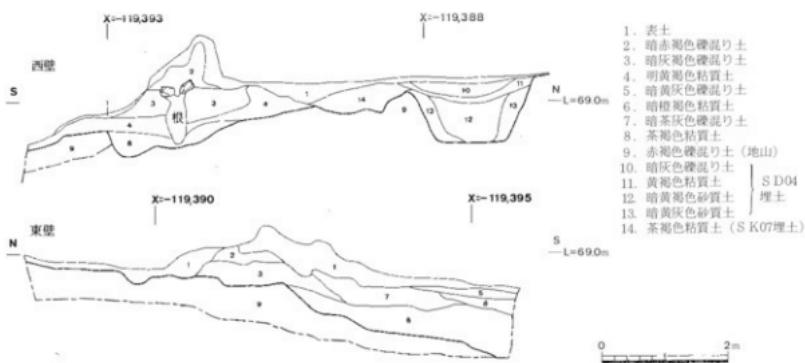
走田9号墳の南側に位置する土壘状高まりとその南北にある平坦地に設定したA区は、およそ東西10m、南北11mほどの規模で、標高にして68.5～70mほどの範囲に相当する。

A区での層序は、土壘状高まりの北と南で大きく異なっていた。まず北側では、表土のすぐ下が赤褐色疊混り土の地山面であり、地山を大きく削り取って平坦面を形成していることが判明した。この平坦面には、重機で掘削されたとみられる搅乱坑が2か所あり、現代にも人の手が加えられたようである。一方、土壘状高まりを含めた南側では、地山面が北から南に向かって穏やかに傾斜しており、その上には明黄褐色粘質土、暗茶灰色疊混り土、暗茶褐色粘質土などの土層が厚さ60～90cmほど堆積していた。これらの土層は、墓地の造営にあたり、平坦面を形成するために土盛りされた整地層であると考えられ、9号墳の南半部はこの際に削り取られた可能性が強い。また、土壘状高まりは、墓碑の基礎施設と考えられる集石遺構S X06を構築するために暗灰褐色疊混り土を盛り上げた人工的な構築物であることが判明した。遺物は、主に表土やその下に堆積する暗黄灰色疊混り土から出土しており、土師器の小皿や瓦など近世以降のものが中心であるが、古いものでは先述した陶棺の棺身片や須恵器の破片などがある。

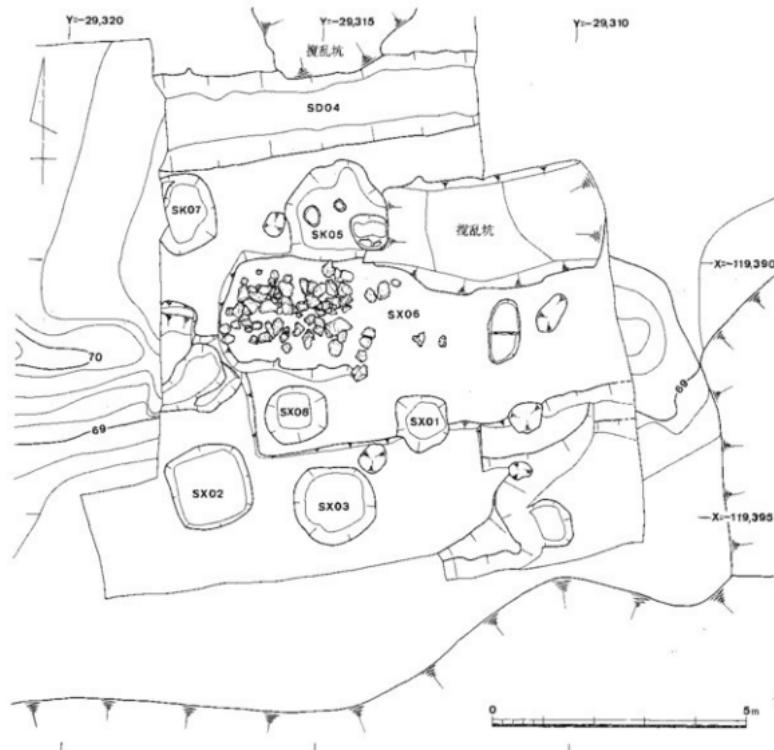
(2) 土葬墓群（第34～38図、図版23～25）

今回の調査では、4基の土葬墓を検出した。土葬墓は、いずれも重複することなく約1mほどの間隔で近接して並んでいたが、そのうちS X02とS X03の2基の土葬墓は重機掘削の際に地山の判断を誤り、それらの上部をかなり掘り過ぎてしまった。このため、2基の土葬墓の規模については、以下で説明する数値よりも本来は大きくなることを断っておく。

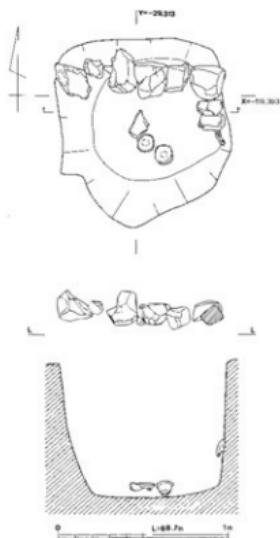
土葬墓S X01 土壘状高まりのすぐ南側の平坦面において確認した土葬墓である。墓壙は明黄褐色粘質土の上面から掘り込まれており、平面形態は隅円方形で、その方位は真北に近い。墓壙



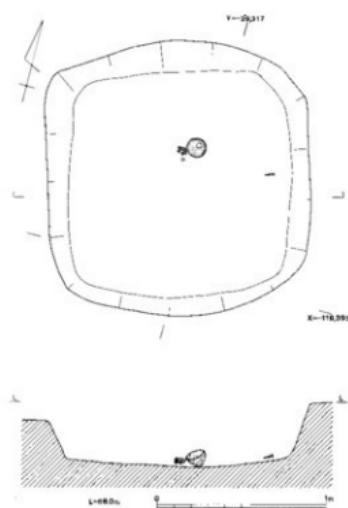
第33図 A区土層図 (1/80)



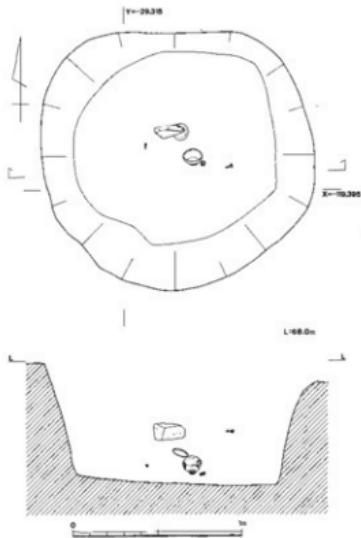
第34図 A区検出構造図 (1/100)



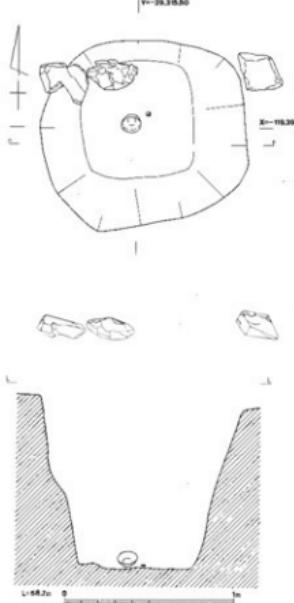
第35図 土葬墓S X01実測図(1/30)



第36図 土葬墓S X02実測図(1/30)



第37図 土葬墓S X03実測図(1/30)



第38図 土葬墓S X08実測図(1/30)

の規模は、上面で東西約1m、南北1.1m以上、底面で東西0.75m、南北0.7m、深さは0.79mほどあり、ほぼ垂直に近い状態で掘り窪められていた。墓壙内には暗黄褐色疊混り土が充满し、底部に暗灰色土がわずかに堆積していた。人骨は全く遺存していなかったが、墓壙の形態や規模などからみて、遺骸を座らせた状態で埋葬した坐葬であると考えられる。

墓壙の底部中央には、美濃焼きの天目茶碗1点、土師器の小皿1点、砥石1点、それに銅銭6枚の副葬品が残っていた。天目茶碗は、若干北側に傾いていたものの口縁部を上に向かた状態で、そのすぐ北西には口縁部を上にした土師器の小皿と砥石が並び、銅銭は土師器小皿の真下に置かれていた。6枚の銅銭は完全に密着して剝離することができないため、銭文の内容は分からぬ。このような出土状態は、埋葬時の状態をほぼとどめていることを示唆するものである。また、墓壙の東側傾斜面には、土師器の小皿1点が底部から20cmほど浮遊した状態で出土しており、これは墓壙の上部に副葬されたものが転落したものであろう。この土葬墓の上部では、L字状に並んだ石列を確認でき、上部施設の存在した可能性が推察された。L字状に並んだ石列は、墓壙の北寄りで検出面から約25cmほど上方に施されていて、10~25cm大ほどの礫を並べ置いたものである。東西に約1m、南北に0.35mほど遺存していたが、本来は方形に配列されていたのではないかと考えられる。ただし、その規模や墓碑を伴っていたか否かは不明である。

土葬墓S X02 S X01の西約3mの地点で確認した土葬墓である。墓壙の平面形態は隅円方形で、方位は北で西に約18°ほど振れている。墓壙の規模は、上面で東西1.54m以上、南北1.63m以上、底面では1.33m四方、深さは0.49m以上あり、4基のうちでは最も規模が大きい。棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙内には暗黄褐色疊混り土が堆積しており、棺の緊結用とみられる鉄釘が2点出土していることから、遺骸はおそらく木製の棺に納めて埋葬されていたものと推察することができる。

墓壙の底部中央の北寄りには、美濃焼きの天目茶碗1点と銅銭75枚が副葬されていた。天目茶碗は口縁部をおおむね上に向けた状態で、そのすぐ西側に接して銅銭がまとまって置かれており、これらはほぼ原位置を保持しているものと考えられた。銅銭は緑青によって密着しており、三つの塊に分かれていたが、いわゆる縁銭の状態で収納されていたものである。そのうち銭文がわかるのは、わずかに至道元寶、元豐通寶、政和通寶の3種類のみであって、いずれも北宋銭に限定される特徴がある。

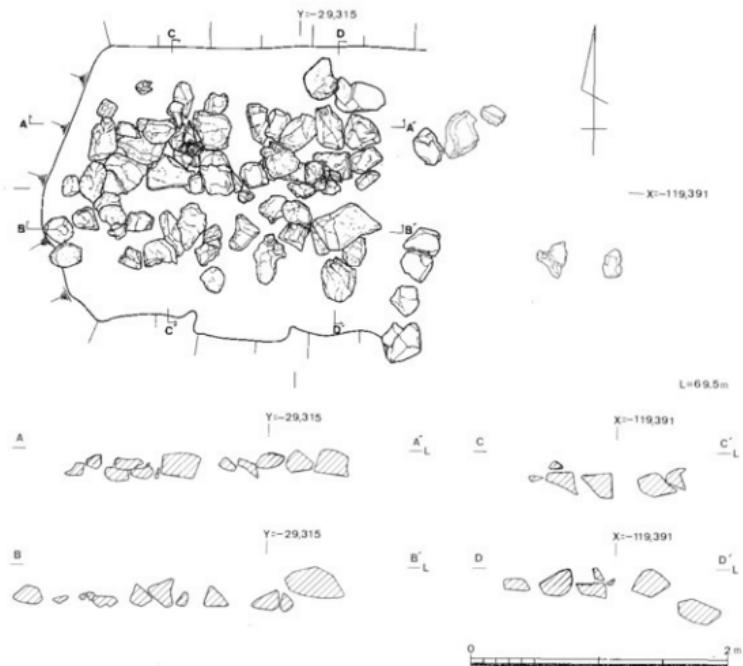
土葬墓S X03 S X02の東約1mの地点で確認した土葬墓である。墓壙の平面形態は隅円方形であるが、南側は丸くなつておらず、方位は真北に近い。墓壙の規模は、上面で東西1.61m、南北1.53m、底面で東西1.2m、南北1.1m、深さは0.72m以上の規模がある。墓壙内には、うえから暗橙褐色疊混り土、黃灰色砂質土、暗黄褐色疊混り土、暗黄灰色砂質土などの堆積が認められたが、上から踏むと沈下するぐらいい軟弱なものであった。この墓壙内からも鉄釘が4点出土しているので、S X02の場合と同じく遺骸を木製の棺に納めて埋葬されていたものと推察することができる。

墓壙の底部中央には、唐津焼きの茶碗1点と銅銭6枚が副葬されていた。茶碗はおおむね口縁

部を上に向けた状態で、そのすぐ西側に接して銅銭が置かれており、ほぼ旧状をとどめているものと考えられる。銅銭6枚は密着しており、銭文がわかるのは元豊通寶のみである。また、底部から15~25cmほど上方に浮遊した状態で、口縁部を下に向かた土師器小皿1点と拳大などの自然石1点が出土しているが、これらは棺上に置かれていたものが転落したものであろう。

土葬墓S X08 S X01の西約1.3mにあり、明黄褐色粘質土の上面で確認した土葬墓である。墓壇の平面形態は隅円方形で、上面で東西1.2m、南北1.1m、底面では0.68m四方、深さは約1mほどの規模ある。墓壇内には、暗黄褐色疊混り土が充満し、ここでも底部に暗灰色土の薄い堆積が認められた。

墓壇の底部中央には、美濃焼きの天目茶碗1点とそのすぐ東側に銅銭6点が置かれていた。天目茶碗は口縁部を上に向けた正位の状態で、銅銭は6枚が密着していた。銅銭の表面には、紐とみられる痕跡をとどめていることから、紐で括られていた可能性が濃厚であるが、銭文のわかるものはない。この土葬墓の上部においても、東西方向に並んだ石列を確認でき、上部施設の存在した可能性が推察された。石列はS X01の場合と類似した位置にあったが、遺存状態が極めて悪く、1.4mの範囲に30cm大ほどの疊がわずかに3石並ぶだけのものであった。



第39図 集石遺構S X06実測図（1/40）

(3) 集石遺構（第39図、図版26）

集石遺構 S X06 A区中央部の土壘状高まり内において確認した遺構である。この遺構は、東西約3.8m、南北約1.8mほどの範囲内に30cm大ほどの礫が集中して分布するものであったが、重機で表土などを掘削した際に木や竹の根株とともにその一部を除去した恐れがあるので、本来はさらに西側へ広がっている可能性がある。集石は、土盛りされた幅2.4～3m、高さ約0.4mほどの高まり上に施されていた。遺存状況は必ずしも良好ではなく、礫のいくつかは後世の搅乱および木や竹の根株の影響などで動かされた形跡が認められ、特に東部では礫の密度が乏しく、全体に雑然とした様相を呈していた。このため、明確な区画を確認することはできなかったものの、集石の上面はおおむね平坦であり、また礫が上下に重なっている部分もあることなど、本来は方形に組まれたものではないかと推察することができる。また、集石の内部やその下から埋葬施設はもとより、副葬品と考えられる遺物も確認することはできなかったが、この地にかつて数多くの墓碑が存在したことを考えすれば、この集石遺構は墓に関わる施設、具体的にいうと埋葬を伴わない供養のための塔婆などを立てる基礎施設であった可能性が濃厚である。そして、このように考えられる基礎施設は、複数の施設が東西に連なった状態を示すものと考えられる。ただし、後述する蔵骨器がこの施設に伴う余地もあって、今後の検討を要する。

(4) 溝・土坑（図版27）

溝 S D04 A区北端の地山面上で確認した東西方向に延びる素掘りの溝である。長さ約6.3m分を検出したが、さらに調査区外の東西に統いており、北辺の一部は重機による現代の搅乱坑で削り取られていた。溝の方位は、東で北に約10°ほど振れている。溝の断面は逆台形を呈し、溝幅は上辺部で1.4～1.9m、底部では約1mあり、深さは0.9mほどの規模がある。底部は東から西に向かって緩やかに傾斜していた。溝の埋土は上下2層に大別することができた。上層は暗灰色礫混り土と黄褐色粘質土からなり、厚さは30cmほどで、非常に硬質に固められていた。下層は暗黄褐色砂質土と暗黄灰色砂質土からなる厚さ60cmほどの堆積で、土師器や陶磁器などの遺物は主にこの下層からまとまって出土している。この溝は、その位置や規模などからみて、海印寺の墓域の北辺を限る施設であった可能性が考えられる。

土坑 S K05 集石遺構 S X06のすぐ北側の地山面上で検出した土坑である。平面形態は梢円形で、径約2m、深さは約0.3mほどの規模がある。土坑内には、人頭大もある礫が多量に埋没し、須恵器の壺の破損品なども出土したが、ビニール袋が混在していたことから、現代に搅拌を受けていることが判明した。須恵器の壺内には火葬したとみられる骨片が炭化物とともにに入っており、蔵骨器として使用されたことを知ることができたが、その破片は土坑周辺の表土や現代の搅乱坑内からも出土しており、かなり散乱した状況を示していた。したがって、本来この土坑内に埋納されていた蔵骨器が搅拌を受け、周辺に四散したとも考えられるが、この土坑と集石遺構 S X06とが極めて近接し、しかも両者の礫が類似することを重視すれば、むしろ S X06が搅拌された際にそこから礫とともに転落して混入したと考える余地も十分にありうる。いずれにしても、この地には、土葬墓以外にも火葬墓の存在したことが確実であることだけは指摘できよう。

土坑SK07 SK05の西約1mにある土坑である。平面形態は隅円方形で、東西約1.3m、南北1.55m、深さは約0.55mほどの規模があり、形態的には先に述べた土葬墓と類似するが、埋土の状況が大きく異なり、しかも出土遺物が皆無であるため、その性格や時期は不明である。

(5) 出土遺物 (第40・41図、図版28・29)

A. 土葬墓出土の遺物 (第40図、図版28)

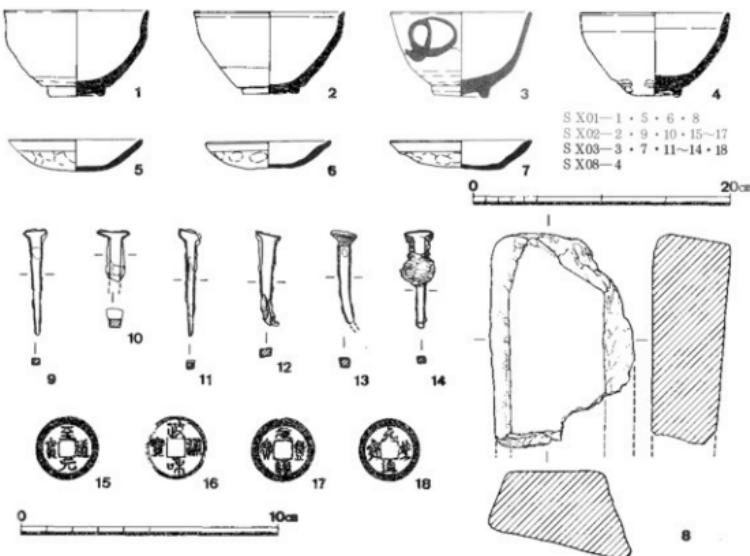
土葬墓からは、陶器の茶碗、土師器の小皿、錢貨、砥石などの副葬品と、木棺の緊結金具と考えられる鉄釘などが出土している。いずれの遺物も遺存状態は極めて良好で、しかも完形品がほとんどであった。これらの遺物は、おおむね16世紀末から17世紀初頭の所産と考えられる。⁽¹⁶⁾

土葬墓SX01出土遺物 陶器の茶碗、土師器の小皿、砥石、錢貨などが出土している。

1は美濃焼きの天目茶碗で、口径11.1cm、器高7.7cm、高台径4.2cmある。素地をケズリによって調整し、その上に施釉して仕上げているが、その範囲は底部近くにまで及んでいる。釉は黒褐色を呈する鉄釉で、光沢が顕著である。胎土は締まった黄白色である。

5・6は土師器の小皿で、平坦な底部と外方に延びる口縁部をもつ。内面と口縁部外面にナデを施すが、他は未調整。5は淡灰白色で硬質焼成されており、口縁部内面に油煙の痕跡が認められ、口径10.4cm、器高は2.5cmほどある。6は淡黄褐色を呈し、口径9.8cm・器高2.2cmである。

8は砥石の破損品で、断面が台形を呈する砂岩を使用したものである。底面は上下2面に認められるが、上面は全体に使用痕があるのに対して、下面は一部にしか認められなかった。長さ16.5cm、幅11.1cm、厚さは6.9cmほどである。



第40図 土葬墓出土遺物実測図 (1～8-1/4, 9～18-1/2)

銭貨は6点あるが、すべて段状に密着しているため、銭文の内容は不詳である。

土葬墓S X02出土遺物 陶器の茶碗と銭貨、それに鉄釘が出土している。

2は美濃焼きの天目茶碗で、口径11.9cm、器高6.4cm、高台径4.4cmである。釉は灰釉系であるが、全体にムラがある。また、体部下半の露胎部には化粧掛けしている。

銭貨は75点も出土しているが、縕錢の状態で多くが密着しているため、銭文のわかるものは至道元寶、元豊通寶、政和通寶のわずか3種類にすぎなかった。

鉄釘は2点(9・10)あり、断面が方形を呈する芯棒にT字状の頭部が付く形態である。9は全長4.1cm、頭部長0.8cm、断面は 0.2×0.3 cmあるが、10は頭部長1.2cm、断面が 0.3×0.5 cmあり、ばらつきが認められる。

土葬墓S X03出土遺物 陶器の茶碗、土師器の小皿、銭貨、それに鉄釘が出土している。

3は唐津焼きの茶碗で、口径10.9cm、器高6.7cm、高台径4.3cmである。釉は灰色を呈しており、体部の中位まで施釉されている。また、一对の絵柄が描かれている。

7は土師器の小皿で、口径11.1cm、器高2.3cmあり、形態はS X01出土例に類似しているが、口径はやや大きい。

銭貨6点は段状に密着していたが、そのうち1点は元豊通寶であることが確認できた。

鉄釘は4点あり、いずれも形状と法量がS X02出土の9に酷似している。木目の痕跡をとどめるもの(12~14)があり、木目はいずれも釘の長軸に対して直交するように付着していた。

土葬墓S X08出土遺物 陶器の茶碗と銭貨が出土している。

4は美濃焼きの天目茶碗で、口径11.8cm、器高6.3cm、高台径4.3cmである。釉は茶褐色を呈する鐵釉であるが、1に比べると光沢はほとんどなく、施釉の範囲は高台にまで及んでいる。高台の底部には、三叉トチンの痕跡が認められる。

銭貨6点はすべて段状に密着しているため、銭文の内容は不明である。ただし、表面には織維の痕跡がわずかに残っていたことから、紐で縛られていた可能性が考えられる。

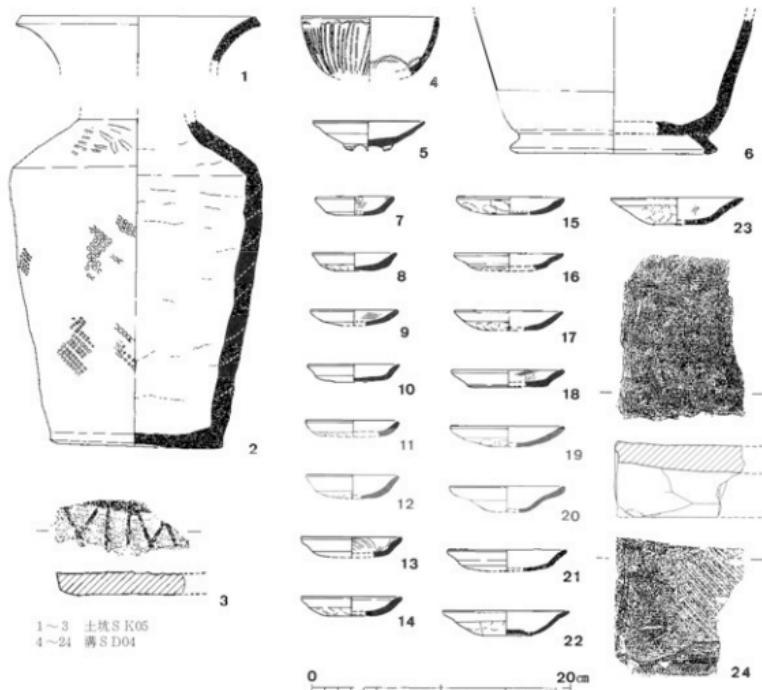
B. 土坑・溝出土の遺物(第41図、図版29)

土坑S K05出土遺物 須恵器の壺、平瓦などの遺物が少量出土している。

1は、須恵器壺の口縁部片である。大きく外反する口縁部で、端部は外傾する面をもつ。内外面には釉が厚く付着しており、口径は18.2cmある。

2は、火葬骨の入った蔵骨器として使用された須恵器の壺である。肩の張る長胴の体部と平底の底部をもつ器形であるが、口縁部を欠失するため、その形状は不明である。外面は肩部に平行タタキ、体部に格子状のタタキが残り、内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ消している。外面全体に厚く釉がかかり、また底部内面には釉とともに他の器体片が熔着している。底径13.5cm、肩部径19.7cm、現存高は25.4cmほどある。この壺は、渥美焼きではないかと考えられ、13世紀初頭の所産と推察することができよう。⁽¹⁵⁾

3は平瓦の破片で、凹面はナデをして調整しているが、凸面には斜格子状の特異なタタキ痕をとどめている。厚さ約1.7cm、色調は灰色で、須恵質に焼成されている。



第41図 土坑S K05・溝S D04出土遺物実測図(1/4)

溝S D04出土遺物 青磁碗、白磁の皿、須恵器の壺、土師器の小皿、丸瓦などが出でており、そのうち磁器や土師器はおおむね16世紀前半の特徴を示している。

4は底部を欠失する青磁の碗である。外面には花弁文、内面には弧状の文様を印刻によって施している。釉は暗緑色を呈するが、光沢はほとんどない。口径10.8cm、現存高は4.6cmある。

5は白磁の皿で、底部を切り欠いて3方に脚を施している。内面には重ね焼きの痕跡をとどめ、口径8.8cm、器高は2.3cmほどある。

6は須恵器壺の底部片である。底部に径16.2cmの高台を貼り付けているが、高台は外側に強く張り出している。この壺は、蔵骨器として使用されていた可能性も考えられる。

7~23は土師器の小皿で、口縁部がすなおに外反するものと、屈曲して外反するものがあり、前者は口径6~7.5cm、後者は口径8.6~10.4cmほどの大きさがある。口縁部外面と内面をナデ調整するが、内面にハケメの痕跡を残すものも比較的多い。口縁端部に油煙の痕跡をとどめるもの(22)がある。

24は瓦質焼成された丸瓦で、厚さは約1.7cmほどある。凸面は繩タタキを施した後に軽くナデを加えて仕上げ、凹面には布目圧痕をとどめている。

6 まとめ

(1) 走田古墳群について

A. 古墳群の構成

走田古墳群は、標高90~69mほどの丘陵地に存在する古墳群で、その分布状況を検討すると、丘陵地の西傾斜面に所在する一群と、南傾斜面に立地する一群とに大きく分けることができそうである。このまとまりを支群と理解すれば、今回新たに確認した8号墳と9号墳は、後者の支群に所属することになるが、丘陵地の末端付近に築かれた径10m前後の小円墳であること、埋葬施設が横穴式石室で組合せ式石棺や陶棺を伴うこと、さらには出土遺物の内容から築造時期がおおむね6世紀末~7世紀初頭に比定できることなど、これまで実態が不明であった当古墳群の一端を知ることができた意義は極めて大きい。

しかしながら、古墳群を構成する多くの古墳が未調査のまま消滅ないしは破壊を被っているため、支群間の相互関係はもとより、支群内での築造順序や格差の有無、それに造墓期間の問題などわずか2基の調査例から知り得る資料はあまりにも乏しいといわなくてはならない。ただし、8・9号墳は東西に隣接して築造されていること、墳丘と横穴式石室に規模の大小が認められること、また築造に時期差が認められるることはほぼ確実であって、それらが2基で1組になると考(16)えてよければ、京都市西京区に所在する大枝山古墳群の群構成に類似している可能性を指摘することができるであろう。また、同じ丘陵地の頂部付近には、木棺直葬を埋葬施設とし、6世紀の前半に築造されたと推察できる稻荷山古墳群が存在することは重要で、この丘陵地においては稻荷山古墳群の出現を契機に造墓活動を開始し、その後立地を低位に移行させつつも走田古墳群として群集墳の形成が進み、この間埋葬施設が木棺直葬から横穴式石室に変質していったものと理解することができよう。

B. 横穴式石室

8・9号墳は、ともに南に開口する横穴式石室を埋葬施設としていることが判明した。そして、古墳群の分布する丘陵地の傾斜面に石材が散在していることを考慮すれば、この古墳群ではおそらくすべての古墳が横穴式石室を採用しているものと考えてよいであろう。8号墳は小型の横穴式石室と考えられるが、遺存状態が悪いため、ここでは9号墳の横穴式石室についてその特徴を抽出し、京都盆地に分布する他の横穴式石室墳と比較検討してみたい。

平面形態と規模 9号墳の横穴式石室は両袖式で、中央部がやや膨らんだ長方形を呈する玄室に、幅約1.5m、長さが6mほどになると考えられる羨道が取り付くものであった。このように、玄室の平面形態が両壁とも胴張りの長方形を呈するものは、物集女車塚古墳をはじめ御堂ヶ池古墳群の17号墳(17)や大枝山古墳群の23・25号墳、下西代古墳群の1・2号墳(18)、福西古墳群の18号墳(19)などにみられ、また片側の壁のみが張るものとしては双ヶ岡1号墳、音戸山古墳群の1号墳や大枝山14・18号墳などがあり、時期の新旧ならびに規模の大小に関わらず、かなり普遍的に存在する平面形態であることが知られる。

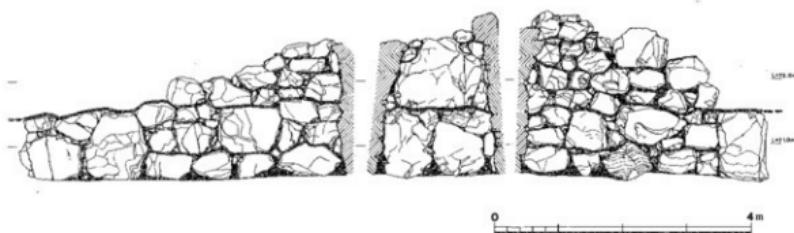
次に玄室の規模についてみると、長さ3.05m、幅は1.8~1.9mほどで、長幅比（玄室幅／玄室長）が0.62となり、大枝山古墳群や下西代古墳群、音戸山古墳群などにこの規模の古墳を多く認めることができる。特に、大枝山古墳群でB類に分類されたものとは、平面形を含めて酷似していることは注意してよく、平面形態や規模にある種の規格の存在が想定できる。ただし、それらの群集墳中には、より規模の大きな玄室長をもつ古墳も存在するので、本石室は決して大きな部類に属しているものではないが、1m以上もある大形石材を比較的多く用い、しかも組合せ式家形石棺を埋葬していることなど、石室構築の労力量や棺の格式などの点からみて、必ずしも劣っているとはいえない。

床面の構造 一般に横穴式石室の床面を碌床にする例は多くの古墳で認めることができる。走田9号墳の場合、基底面に排水溝を施し、その上部に碌を厚く敷き詰めて碌床としているが、特に玄室では大小の碌を上下に使い分けて敷き詰めるなど、重厚かつ丁寧に床面を整備している特徴がある。このような二重ともいべき構造をもつ碌床は類例がほとんどなく、おそらく石棺の荷重に耐え得るためになされた工法と解釈できる。

また、排水溝については、灰方古墳群やカラネガ岳古墳群などにみられ、その多くが有蓋もしくは本例のように溝内に碌を入れる構造をもつようである。これに対して、大枝山古墳群や福西古墳群、それに御堂ヶ池古墳群や音戸山古墳群などでは、これまでに数多くの発掘調査例があるとはいえ、排水溝を伴うものは1例も確認されておらず、古墳群ごとで排水溝の有無があったことを知ることができる。ここで注目されるのは、排水溝を備えた古墳が桂川右岸流域でも南部に集中し、その北部や左岸流域にあたる嵯峨野地域ではほとんど認められないことである。このことは、床面整備の優劣に関わる問題だけでなく、桂川右岸流域の南部における地域的な特色を示唆するものとして重視すべきであろう。

石室の構築過程 石室の構築にあたっては、まず墳丘の基底面に掘形を開削し、その中に基底石を据え付けることによって平面形を決定しているが、玄室の奥壁が東西の側壁よりも先行して設置されたものと考えられる。基底石に使用された石材は、大きさや数量が各壁でそれぞれ異なっているものの、玄室奥壁と東西の袖石が縦位である以外はいずれも横位の状態にして配しており、両側壁ではおおむね上面の高さを揃えていた。また、基底石は、玄室よりも狭道に大きな石材を使用していることが知られる。そして、基底石の上に石材を順次積上げて壁体を構築しているわけであるが、各壁面には作業単位を示すとみられる数条の目地を認めることができるので（第42図）、それを手掛りにして作業単位を復元すると、壁体は大きく2段階に分けて積み上げていることが判明した。

すなわち、玄室奥壁の中位を通る横目地は東西の袖石の高さとほぼ同じであり、両者を結ぶ横目地が両側壁に認められることから、この高さまでの構築を作業工程の第1段階と考えることができる。この工程においては、基底石を含めると玄室の奥壁では1~2段、東西の側壁では2~3段積みにしているが、横目地の上面をみると、西側壁に比べて東側壁に若干の乱れが認められ、前者の方をより緻密に作っていることが知られる。さらにこの横目地は、漸次的に低くなりつつ



第42図 9号墳石室の構築工程単位 (1/80)

も羨道部にまで及んでいるので、玄室から羨道に至るまで袖石上面の高さを基準にして連続的に構築された可能性が高いと考えることができる。ここで注目されるのは、袖石上面のレベルが石棺を側石まで組み立てた場合の高さとおおむね一致することである。このことは、石室の構築と石棺の組み立てとが密接な関係にあること、つまり石室をこの上面まで構築することと連動して床面を整備しつつ石棺が安置されたことを示すものではないかと推察できる。確かに、本石室の空間はさほど広いものではなく、しかも底石1枚の重量が約600kgもあることなどを考慮すれば、たとえ部材が数枚に分かれているといっても、石室完成後にそれらを搬入して組合せることは容易でないことはもとより、むしろ不可能であったに相違ない。したがって、石棺の組み立て作業を石室の構築と並行して進めたと考える方が合理的で、かつ当然のことと考えるべきであろう。ただし、その時点において、蓋をした状態まで石棺を組合せたのか、あるいは側石を組上げたところで一端休止し、石室が完成した後に遺骸や副葬品を納めて蓋を被せたのかは、葬送儀礼の問題とも関わるだけに、今後の検討課題としておきたい。

次に第2段階の作業工程は、玄室の奥壁にその幅ほどもある大形石材を1石しか積上げていなければならずすると、おそらく壁体の上面までであったと考えられる。この工程では、東西の側壁にそれぞれ石材を5~6段程度積上げているが、両側壁には5段目上面に横目地が通ると判断でき、しかも両者のレベルが共通していることは、東西の高さを揃えつつ石材を積上げようとした意図をうかがい知ることができる。また、この横目地と先にみた第1の作業工程上面までの高さは約60~70cmほどあるが、後者と基底石上面までの間隔、さらに東側壁5段目の上に積まれた石材の高さもおおむね同じ数値を示していることは注目してよく、基底石より上方ではこの単位を基準にして壁面が構築されたとも考えられる。こう考えてよければ、この石室は規格性をもって整然と施工された可能性が強い。

C. 組合せ式家形石棺

京都盆地において、乙訓地域と嵯峨野地域は組合せ式家形石棺の2大集中地域といわれており、これまでに数多くの石棺が確認されている。ところが、その大半は過去に掘り出されて四散し、庭石や石碑などに転用されているものが多く、本来どのような古墳から出土したのかを知る手掛かりは皆無に等しい。また、発掘調査で出土した石棺にしても、盜掘などで破壊された例が多く、

全体の形状はもとより、石室内での埋葬位置などが判明するものは物集女車塚古墳など極めて少數である。その意味において、今回走田 9 号墳から組合せ式家形石棺の底石と短側石 1 枚が完形で出土した他、長側石の破片も 1 点ではあるが出土し、蓋石以外の形態を知ることができるとともに、石室内での配置状況が判明した意義は極めて大きいといふことができる。これによって、寂照院境内に所在した 4 点の石棺部材（蓋石 1 点、底石 3 点）⁽²⁰⁾ も、本来は当古墳群から出土した可能性がより一層高まったといえよう。この想定が妥当だとすれば、走田古墳群には少なくとも 3 個体分の石棺が存在したことになり、石棺の保有率が高い古墳群になることは特筆すべきことである。

ところで、組合せ式家形石棺は、首長墓と考えられる前方後円墳や大型の円墳はもとより、群集墳を構成する古墳から出土することが知られており、群集墳では中心的とはいひ難い規模の小さな古墳から出土している場合も少なくない。本石棺は、まさにその典型例であるといふことができるであろう。こうした類例を京都盆地に求めれば、音戸山 5 号墳や福西 2・7・10 号墳などが知られ、また小規模な単独墳としては石見上里古墳⁽²¹⁾がある。これらの古墳の多くが横穴式石室に石棺を納める点では共通しているが、音戸山 5 号墳が二上山の白石凝灰岩、他はいずれも竜山石を使用しており、石棺の石材種に相違が認められる。また、福西古墳群での実態はよくわからないが、石棺の保有率が極めて高い古墳群であることは確実であって、この点においても走田古墳群と共に通している。ただし、福西古墳群からは少なくとも型式の異なる 3 種類の石棺が出土したと考えられており、また走田古墳群においても型式差の有無までは不明だが、底石と側石の結合法や法量の異なる石棺を含んでいることなど、同じ古墳群の中でも使用される石棺にそれぞれ相違が認められることは興味深い。

D. 須恵質四注式陶棺

今回の調査では、須恵質四注式と考えられる陶棺の棺身が 2 個体分と棺蓋が 1 点出土し、過去に出土したといわれる陶棺片を加えると少なくとも 3 個体分が存在したことになる。しかしながら、それらの陶棺はいずれも原位置をとどめたものではなく、本来どの古墳にどのように埋葬されていたのかを特定することはできない。とはいえ、走田古墳群に伴うものであることは確実であって、当古墳群では先述した組合せ式家形石棺とともに陶棺が多用されたことを知ることができ、当古墳群を特徴づけるものとなっている。

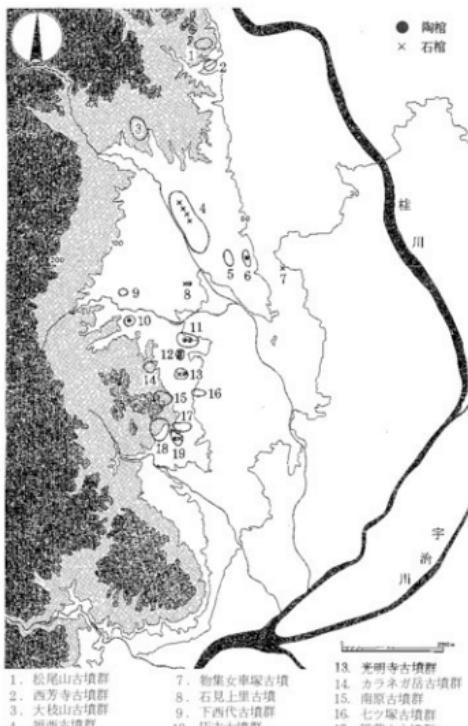
須恵質四注式陶棺は、畿内の各地域に広く分布しているが、山城地方では乙訓地域を中心とした桂川右岸流域に集中する傾向が認められる。乙訓地域においては、この走田古墳群をはじめ、光明寺古墳群、芝古墳群、北平尾古墳群などが知られていたが、最近の調査で灰方古墳群と長野丙古墳群⁽²²⁾でも新たに確認されるなど、近年その数は増加している。すでに指摘されているように、須恵質四注式陶棺は土師質亀甲形陶棺に比べて、その形態はもとより、製作技法と焼成、それに分布地域や年代などが大きく相違しており、加えて法量の小さいものが多いことを知ることができる。例えば、乙訓地域で確認された最も内法の大きな陶棺は、芝 12 号墳の 2 号棺で長さ 169cm、幅 46cm、一方小さいものは北平尾 1 号墳出土棺で、長さ 101cm、幅は 35cm あるにすぎない。そこ

で、今回出土した陶棺のうち、全形の明らかになった棺身（第29図）をみると、3行7列の円脚を備えた北平尾タイプに属するものであるが、内法は長さ129cm、幅は41cmほどしかなく、北平尾1号墳例に次いで小さいものであることが分かる。したがって、もちろん成人を伸展葬するには無理な大きさであり、小児用棺ではないかとも考えられるが、人骨が出土していないため断定することはできない。とはいって、北平尾1号墳の陶棺内には成人女性の人骨が、また最近確認された長野内古墳群の岡田古墳では内法長141cmの陶棺に2体もの成人骨が納められており、ともに伸展葬であるとは考えられないので、これらの人骨は改葬骨とみて間違いないものと考えられる。こうした類例は、

他地域でも少なからず認められていることから、須恵質四注式陶棺が改葬を前提として使用されたという指摘は十分に首肯できるものであって、当古墳群の場合もそのように解釈するのが妥当であろう。また、陶棺の埋葬方法については、横穴式石室に納められた例と直葬したものとに大別でき、前者は石見上里古墳や灰方1号墳、そして後者では北平尾1号墳や光明寺1号墳、岡田古墳などがある。そのうち石見上里古墳では、横穴式石室内に組合せ式家形石棺とともに収納されており、追葬のための棺に使用されたと考えられているが、この点を重視すれば、走田古墳群の場合も直葬ではなく、横穴式石室に納められていた可能性が強いと推察しておきたい。

E. 出土遺物の検討

今回の調査で確認した8・9号墳の2基の古墳は、過去に盜掘や破壊を受けていたため、出土した遺物は極めて乏しかった。一方、8・9号墳間（D区）で陶棺の棺身とともに出土した遺物は、8・9号墳に比べて種類が多く、数量も比較的まとまっていた。これらの遺物は、当古墳群の性格や年代を知る上で重要な資料になると考えられるので、ここではそれらの遺物の編年的な位置付けを行いたい。



第43図 桂川右岸域の主要群集墳と石棺・陶棺分布図 (1/100000)

- 1. 松尾山古墳群
- 2. 西芳寺古墳群
- 3. 大松山古墳群
- 4. 福西古墳群
- 5. 東山古墳群
- 6. 長野内古墳群
- 7. 物集女車塚古墳
- 8. 石見上里古墳
- 9. 下西代古墳群
- 10. 灰方古墳群
- 11. 芝古墳群
- 12. 北平尾古墳群
- 13. 光明寺古墳群
- 14. カラネガ岳古墳群
- 15. 南原古墳群
- 16. 七ツ塚古墳群
- 17. 稲荷山古墳群
- 18. 大原古墳群
- 19. 走田古墳群

まず、8号墳と9号墳から出土した須恵器の杯類を見ると、両者間には明らかに型式差が認められる。すなわち、8号墳は杯身が口径12cm、杯蓋が口径13.5cmほどで、外面にはヘラケズリを施しているが、その範囲は狭くて粗い。これに対して、9号墳は杯身が口径10.5cm前後、杯蓋が口径12cm前後で、いずれもヘラ切り痕をとどめ外面の回転ヘラケズリ調整を省略しているなど、法量の矮小化と調整技法の退化傾向が認められ、8号墳よりも新しい特徴を備えている。以上の所見から年代を検討すると、前者は陶邑古窯跡群のTK209型式、そして後者はTK217型式に比定できるが、後者に宝珠つまみをもつ杯G・杯G蓋を伴わないことを考慮すると、TK217型式でも古い要素を呈しているものと考えられる。したがって、前者は6世紀末頃、後者は7世紀の初頭という実年代を与えることができる。ちなみに、横穴式石室では追葬される場合が一般的で、石室内から新旧の遺物が混在して出土する例も多いが、両古墳から出土した須恵器がそれぞれ同型式のものに限られることは注意すべきであろう。この点を重視すれば、両古墳では追葬がなかったと考える余地があり、須恵器の年代がそのまま古墳の築造年代を示している可能性も十分に考えられるが、遺物の出土量があまりにも少ないため速断することは避けたい。

次に、8・9号墳間（D区）の遺物としては、須恵器の杯類、短頸壺、平瓶、甌、甕などの他、土師器の杯Cと甕、それに鉄鑓などがある。そのうち須恵器の杯類には、古墳時代に通有の形態をもつ杯H・杯H蓋と、蓋に宝珠つまみをもつ杯G・杯G蓋の二者が認められ、両者の数量はほぼ拮抗している。杯H・杯H蓋は、口径が10cm大ほどのものが多く、口径14cmほどのやや古い特徴を示すものも含まれる。杯H蓋では、天井部が丸味をもつものと屈曲するものがあり、いずれもヘラ切りの今まで、回転ヘラケズリ調整を省略している。また杯G・杯G蓋は、口径が10～11.5cm前後で、外面の調整を省略しているものが多く、杯G蓋のかえりは口縁端部より突出するものではなく、ほぼ一致している。杯類以外の器種では短頸壺が目立ち、頸部の屈曲がなめらかで、肩部も丸みをもつなどの特徴がみられる。また、類例の乏しいものとして台付きの甌がある。これら須恵器の特徴を検討すると、陶邑古窯跡群のTK209型式からTK217型式に対応させることができるが、後者の占める比率の方が極めて高く、先にみた8号墳はもとより、9号墳の出土品と比べても新しい様相を呈しているものが多いことは明らかである。また、土師器の碗Cは口径が15.5cmほどあり、坂田寺SG100ないしは山田寺整地土の出土例に類似し、鉄鑓は奈良時代まで存続する型式で、岡山県定北古墳などいわゆる終末期古墳からの出土例が知られる。このように考えると、遺物の実年代は7世紀前半のものが主体と考えられ、共伴して出土した陶棺の年代観と比べても大きな矛盾はないものと推察できる。

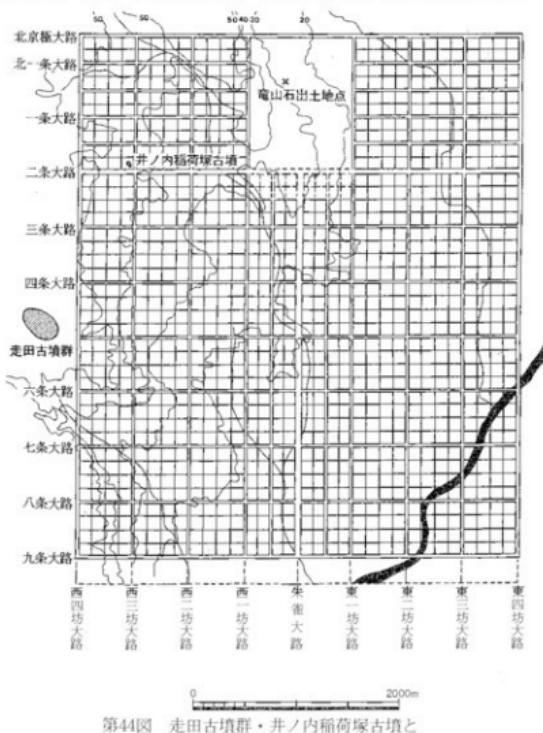
（2）走田9号墳と長岡京の造営

A. 9号墳の破壊とその目的

走田9号墳の横穴式石室は、過去に盗掘と破壊を受けていることが判明した。その時期については、石室の床面上や堆積土中から長岡京期に比定できる土師器や須恵器がまとまって出土していることから、長岡京期に限定してほぼ間違いないものと考えられる。そして、その時点で組合せ式家形石棺が暴かれ、わずかの須恵器を除く副葬品の大半は取り出されたものと推察されるが、

石棺の蓋石や長・短側石など多くの部材も同時に持ち去っている可能性が強いことを重視すれば、単なる副葬品目当ての盗掘や破壊というよりは、むしろ長岡京の造営という大規模な土木工事に必要な石材を入手することが主目的であったと考えるべきであろう。特に興味深いのは、土師器のなかに祭祀用と考えられている壺Bが床面上と堆積土中からそれぞれ2点ずつ計4点も出土していることであり、おそらく盗掘や破壊に対して何らかの祭祀が行われ、その際に使用された可能性が濃厚といえよう。近年、長岡京市井ノ内小西に所在する井ノ内稻荷塚古墳においても、横穴式石室の石材が長岡京時に持ち去られ、その抜き取り跡から壺Bを含む土師器や須恵器などの土器類が出土したという同様な調査事例が確認されており⁽³⁰⁾、そうした行為が井ノ内稻荷塚古墳の位置する長岡京内（右京二条四坊四町）はもとより、京城外にあたる遠隔の丘陵地にまで広範囲に及んでいたことが判明したことは注目すべきことである。

このような石室の石材や石棺部材を取得するための古墳破壊は、少人数ではとても成しえるものでないことは確実であり、多人数で大々的に行われたであろうことは疑問の余地がない。長岡京に遷都する少し前のことであるが、『続日本紀』宝亀11年（780）12月4日条に次のような興味深い記事がある。それは「勅左右京。今聞。造寺悉壞墳墓。採用其石。非唯侵驚鬼神。實亦憂傷子孫。自今以後。宜加禁断。」とあって、古墳を破壊して寺院造営用の石材を取得することを禁じた勅令を左右の京職に下しているのである。この勅令が出された背景には、そうした行為が奈良時代の後期に多発していたことを物語り、当時の人々はもちろん古墳に礎石などに適した石材が埋設されていることを熟知していたからに他ならない。走田9号墳や井ノ内稻荷塚古墳の場合は、長岡京の造営という国家事業であるがゆえに、おそらく國家の承認を得て実施されたものと考えるのが妥当であろう。特に、井ノ内稻荷塚古墳から「功食」と墨書きされた須恵器の杯Aが出土していることは、石材の取得や運搬



第44図 走田古墳群・井ノ内稻荷塚古墳と
竜山石出土地点図 (1/50000)

などの作業従事者に食料が支給されたことを示しており、国家が関与していたことの証明になるものと考えられる。

B. 石棺部材の転用先

走田9号墳では組合せ式家形石棺の蓋石と長・短の側石などが持ち去れ、それらが長岡京の造営の際に再利用されている可能性の高いことが判明した。ここでは、それらの石棺部材が転用されたとすれば、どのような場所で、どのように使用された可能性があるのかについて、おもに石材種の観点から検討してみたい。

平城京や長岡京などの都城で使用される凝灰岩類は、礎石建物の礎石やその基壇を飾る化粧石（羽目石・地覆石・葛石など）の他、溝や暗渠の側石などに使用された例も知られているが、その使用区域はおのずと限定される。すなわち、都城の中権を占める宮室内をはじめ、京内に設置された官衙や寺院、それに大規模な邸宅などにおいてであるが、貴重品であったために抜き取られ、残存しているものは必ずしも多いとはいえない。このように資料的に乏しく、しかもこの分野での研究が十分に進展しているとはいえない難いが、石材種についていえば、次のような事実が明らかにされている。まず平城宮では、河内と大和の国境に位置する二上山産と大和の春日山産の凝灰岩を多用していることが指摘されており、奈良時代前半は前者、後半では後者の凝灰岩を使用する傾向があるという。また、竜山石については、これまでのところ羅城門の礎石に使用例が確認されている程度で、この他恭仁宮大極殿の礎石にも使用されている点については、平城宮の第1次大極殿を移築した際に転用したものと考えられている。一方、長岡宮でも二上山産の白色凝灰岩がほとんどであると指摘されているが、長岡宮の第137次調査で唯一竜山石が出土している。出土地点は、長岡宮の北部にあたる大蔵の推定地で（第44図）、竜山石は池状遺構S G13701から東に延びる石組構S D13702の敷石として使用されていた。敷石は、長辺約100cm、短辺約60cmの規模をもつ長方形の板材であって、その形態と法量が走田9号墳から出土した組合せ式家形石棺の短側石に類似していることは注意すべきであろう。もちろん、両者をただちに関連付ける確証はなく、断定するつもりはもうとうないが、石棺部材を転用している可能性が十分にあることだけは指摘しておきたい。

以上、簡単に見てきたように、平城宮や長岡宮では二上山産の凝灰岩が多用され、竜山石の使用頻度が非常に少ないことを知ることができた。このことは、古墳時代から現代に至るまで使用され続けている竜山石の都城への供給量が、極めて少なかったことを示していると考えられる。したがって、これらの都城で竜山石が出土したとすれば、その形態や法量を十分に考慮し、石棺の転用材である可能性を検討すべきである。もっとも、石棺には二上山産の凝灰岩を使用しているものも多いことから、この点にも同様の注意が必要であろう。そこで、石棺部材がどのような所に転用されている可能性があるかを推察すると、礎石建物の基壇（壇上積み基壇）などでは、羽目石・地覆石・葛石などその使用箇所によって形態や法量が異なるから、石棺部材をそれぞれの大きさに対応すべく緻密な再加工が望まれたと考えられる。一方、溝や暗渠の側石などの場合においては、おそらくそのままの形状でも使用が可能で、加工を要するとしても、目立たない所

に配されるわけであるから、比較的粗雑でも不都合でなかったとも考えられ、むしろこのケースの方が可能性としては高いのではなかろうか。いずれにせよ、これ以上憶測を積み重ねることは控え、今後の調査によって比較検討できる類例の増加を待ちたい。

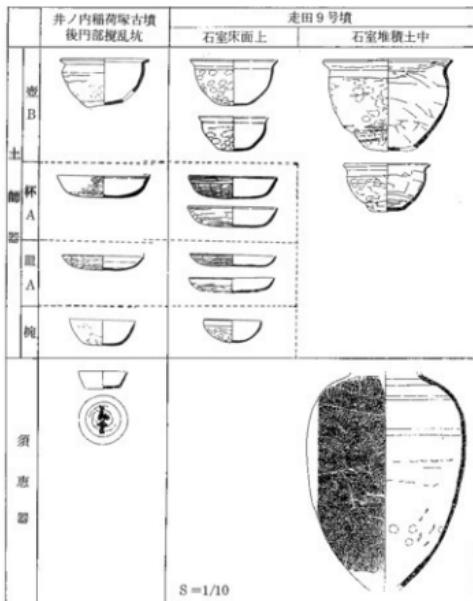
C. 古墳破壊に伴う祭祀

走田9号墳と井ノ内稻荷塚古墳では、長岡京の造営に関連して石室の石材や石棺部材取得のための古墳破壊があり、その際に何らかの祭祀が行われたであろうことを先に指摘したが、ここでは両古墳から出土した遺物を中心にして、古墳破壊などに伴う祭祀について検討したい。

走田9号墳では、石室内から土師器の壺B・皿A・杯A・椀と須恵器の甕が、また井ノ内稻荷塚古墳では石室の石材を抜き取った擾乱坑内から土師器の壺B・皿A・杯A・椀と須恵器の杯Aなどがそれぞれ出土している（第45図）。ここで注目されるのは、土師器の器種すべてが両者に共通している点であり、これを単なる偶然のこととすることはできないであろう。さらに注意すべきことは、走田9号墳では壺Bが石室の床面から2点、堆積土中から2点の計4点も出土したことである。壺Bは、その小型器種である壺Cとともに外面に人面を墨書する例が多く、墨書人面土器ないしは人面墨書き土器などと通称されている器種で、罪や穢を氣息と共に土器に封じ込めて除去するための祭祀具とする見解が有力視されているものの、必ずしも定説的地位は確立されていない。とはいえ、この器種の用途が日常の食器としてではなく、祭祀具とするのに異論がないことは確かである。両古墳で出土したすべての壺Bには人面は墨書きされていないが、もちろん祭祀に使用されたものと考えてよいであろう。また、土師器の皿・杯・碗の3器種はいずれも供膳形態の食器類であって、具体的な内容は不明であるが、祭祀にあたって飲食に関わる行為のあった可能性が濃厚である。

こうした祭祀具や食器類を使用して執り行なわれた祭祀の内容は、どのようなものであろうか。ここでは、次の二通りの解釈を提示したい。

まず第一は、古墳破壊に対する贖罪意識から、被葬者の靈魂を慰めるための鎮魂を目的にした祭祀と見る解釈である。『統日本紀』和銅2年（709）10月2日の条に「勅造平城京司。若



第45図 走田9号墳と井ノ内稻荷塚古墳の出土土器対比図

彼墳隕見発掘者。随即埋歟。勿使露棄普加祭酌。以慰幽魂」とあり、平城京の造営にあたって古墳を発掘した場合にはただちに遺骸を再埋葬し、地に酒を注いで幽魂を慰めるべきことを命じていることが知られる。それから70数年を経た長岡京の場合においても、同様に対処したことは十分に考えられることであり、長岡京を造営した桓武天皇が同母弟である早良麿太子の怨霊に悩まされ、延暦11年（792）に早良の墓所がある淡路島へ「靈に謝し奉る」ための使者を派遣したり、延暦19年（800）には崇道天皇の称号を追贈するなど鎮魂に関わる処置を下していることからも、この時期に鎮魂の観念が増幅したとさえ考えられるからである。

第二には、死体に触れたり古墳破壊に携わったために生じる穢を除去するための祭祀とする解釈である。穢とされる事象については、『延喜式』をはじめ平安時代以降の貴族や寺社などの日記・記録類に数多く認められるが、すでに『古事記』や『日本書紀』にも見え、穢の観念の始源がかなり古い段階から存在していたことを知ることができる。また、8世紀末から9世紀にかけて穢に対する忌避の意識が肥大化したという指摘もあり、その時期がまさに長岡京期にあたることは興味深い。平城京や長岡京では、人形、斎串、土馬、墨書き人面土器などといった各種の祭祀具が京内の各所で出土しており、大祓をはじめとする様々な祭祀が頻繁かつ広範囲に行われていたものと推察されているが、もちろんその中に穢の浄化を目的とした祭祀が含まれている可能性は十分に考えられる。『延喜式』臨時祭の条によれば、穢のなかでも死体に触れる死穢は忌み慎むべき日数が最も多く、また穢は伝染するものともされており、死穢が最も忌み嫌うべきものと考えられていたことが知られる。走田9号墳や井ノ内稻荷塚古墳の事例はこの死穢に関わることであり、それを祓い清めるための祭祀が行われたと考えても不思議ではないであろう。この他、以上のような二者の内容を兼ね備えた祭祀とみることも否定できないが、現段階においてはいずれとも判断しかねる。今後、さらに類例の増加をまって再考を試みたい。

注1) 井ヶ田良治他「寂院院総合調査報告」『長岡市報告書』第16冊 1985年

2) 小田桐淳「谷田瓦窯群」『長岡市史』資料編1 1991年

3) 三上貞二「奥海印寺大原古墳群」『長岡市報告書』第1冊 1973年

4) 山本卿雄「稲荷山古墳群」『長岡市史』資料編1 1991年

5) 木村泰彦「右京第237次調査略報」『長岡市センターレポート』昭和61年度 1988年

6) 都出比呂志他「長法寺南原古墳の研究」『長岡市報告書』第30冊 1992年

7) 山本卿雄「奥海印寺遺跡第1次調査概報」『長岡市センターレポート』昭和61年度 1988年

山本卿雄「奥海印寺遺跡第2次調査概報」『長岡市センターレポート』昭和62年度 1989年

小田桐淳「奥海印寺遺跡第3次調査概要」『長岡市報告書』第20冊 1988年

木村泰彦「奥海印寺遺跡第4次調査概要」『長岡市報告書』第20冊 1988年

原秀樹「奥海印寺遺跡第5次調査概報」『長岡市センターレポート』昭和63年度 1990年

山本卿雄「奥海印寺遺跡第6次調査概報」『長岡市センターレポート』平成4年度 1994年

原秀樹「奥海印寺遺跡第7次調査概報」『長岡市センターレポート』平成6年度 1996年

8) 石室の石材や石棺部材の石材種については、京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に鑑定していただいた。

- 9) 平尾政幸「畿内の土師器窯の製作技法」『古代の土器研究会第4回シンポジウム資料集』古代の土器研究会 1996年
- 10) 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』 1993年
- 11) 橋本久和『中世土器研究序論』 1992年
- 12) 原秀樹「海印寺跡第1次調査概要」『長岡市報告書』第29冊 1992年
- 13) 中尾秀正「海印寺跡第2次調査概要」『長岡市報告書』第32冊 1994年
- 14) ~~側~~京都市埋蔵文化財研究所の平尾政幸・小森俊寛、~~側~~大阪市文化財協会の森毅の各氏より御教示を賜った。
- 15) 京都国立博物館の尾野善裕氏より御教示を賜った。
- 16) 丸川義広他『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 ~~側~~京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 17) 秋山浩三他『物集女車塚』『向日市報告書』第23集 1988年
- 18) 京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』 1971年
- 19) 加納敬二他『南春日町遺跡第17・19次調査』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 ~~側~~京都市埋蔵文化財研究所 1994年
加納敬二他『南春日町遺跡第20・21次調査』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 ~~側~~京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 20) 京都市文化観光局洛西室『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』 1970年
- 21) 京都市文化観光局『双ヶ丘1号墳の発掘調査及び保存修景事業概要』 1981年
- 22) 北田栄造『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局・~~側~~京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 23) 灰方1号墳で排水溝が確認されている。灰方古墳群の最近の調査成果については、~~側~~京都市埋蔵文化財研究所の木下保明氏より種々の御教示を賜った。
- 24) 岡内三真他『京都府カラネガ岳1・2号古墳の発掘調査』『史林』第64巻第3号 1981年
- 25) 山本輝雄「走田古墳群」『長岡市史』資料編1 1991年
- 26) 島田貞彦「山城国乙訓郡大原野村発見の陶棺と其遺蹟に就きて」『歴史と地理』第18巻第4号 1925年
- 27) 長野丙古墳群の岡田古墳から出土している。~~側~~向日市埋蔵文化財センターの中塙良氏より種々の御教示を賜った。
- 28) 吉岡博之他『北平尾古墳発掘調査報告』『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 1979年
- 29) 田辺昭三『須恵器大成』 1981年
- 30) 福永伸哉他「井ノ内稻荷塚古墳第2次調査概要」『長岡市報告書』第33冊 1995年
- 31) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XI』 1981年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XIV』 1993年
- 32) 山中章「凝灰岩と石工」『平成元年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城2』 1990年
- 33) 宮原晋一他「長岡宮第137次調査概要」『向日市報告書』第17集 1985年
石材種については、~~側~~向日市埋蔵文化財センターの山中章氏の御教示による。

付編

長岡京市走田9号墳出土赤色顔料の化学的調査

宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

走田9号墳より出土した赤色顔料2試料について蛍光X線分析、X線回折、顕微鏡観察を行い、赤色顔料の種類を明らかにした。試料2点は、9号墳の横穴式石室内に安置されていた組合せ式家形石棺の底石Aに付着していた顔料と、同じく床面上から出土した須恵器杯身（第26図1）の外面に付着していた顔料である。

蛍光X線分析 赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；25mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（ 2θ ）；10~65°の条件で行った。測定では、薬包紙に包んだままの供顔料をそのまま用いた。

X線回折 赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；30kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（ 2θ ）；30~160°の条件で行った。試料は、供試料より赤色部分をバンドピックで集め、これを無反射試料板に乗せて測定した。

結果 蛍光X線分析およびX線回折の結果と、それによって明らかとなった赤色顔料の種類を次表に掲げる。

試 料	蛍 光 X 線 分 析		X 線 回 折		顔料の種類
	鉄 (Fe)	水銀 (Hg)	赤 鉄 鉱	辰 砂	
石 棺 底 石	+	-	+	-	ベンガラ
須 恵 器 杯 身	+	-	-	-	ベンガラ

顕微鏡観察により、須恵器の杯身内に付着していたベンガラは、いわゆるパイプ状の形状を呈し、最長のものは長さ $20\mu\text{m}$ ほどあることがわかった。一方、組合せ式石棺の底石に付着したベンガラはパイプ状の形状ではなかった。

最後に、今回の調査の機会を与えていただいた長岡京市埋蔵文化財センターの山本輝雄氏に感謝の意を表したい。

第2章 長岡京跡右京第515次（7 A N K N T - 4 地区）調査概要

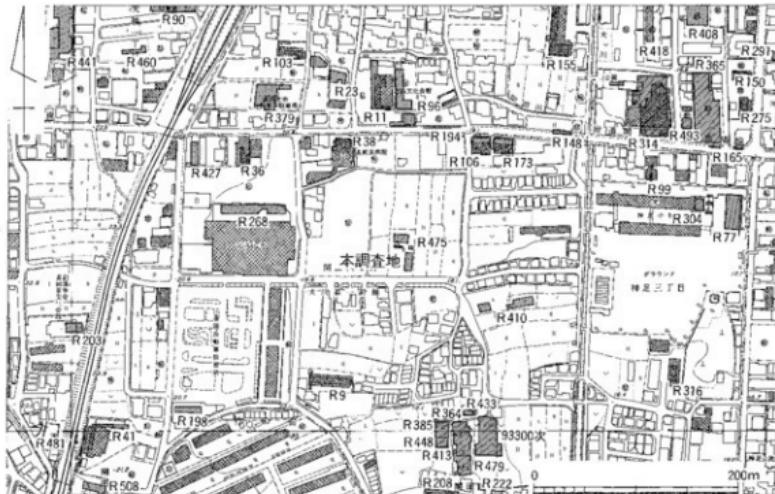
—長岡京跡右京六条二坊十一町、開田遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、1996年1月16日から1月31日まで、長岡京市開田四丁目608-1において実施した発掘調査に関するもので、調査面積は29m²を測る。
- 2 本調査は、調査地周辺に存在が推定されている長岡京の「西市」に関する資料を得ることを主目的として実施された。
- 3 調査は平成7年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となって実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、中島浩夫が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者の樋口一雄氏、水道の借用をお願いした勝ヘルプなど、近隣の水田所有者・住民に数々のご援助をいただいた。
- 5 調査後の図面・遺物整理には岡本弓美子・尾崎みづ樹をはじめ多くの方々の協力を得た。
- 6 本報告の執筆および編集は中島が行った。

2 調査経過

調査地は阪急長岡天神駅の南東約300mに位置し、周辺の地形は大川が形成した後背湿地で、標高18.5m前後を測る。周辺は以前から西市の候補地として注目されていた場所で、1994年には



第46図 発掘調査地位置図(1/5000)

右京第475次調査が行われ、六条条間南小路などが確認されている。今回の調査区は、右京第475次調査第1トレンチの南に設定し、途中、遺構確認のために部分的な拡張を行った。調査は耕作土および床土を小型重機で、以下は人力によって掘削し、調査終了後には畠地への復旧を行った。なお、第Ⅶ座標系による調査区の中心は、Y=-27,678、X=-119,821である。

3 検出遺構

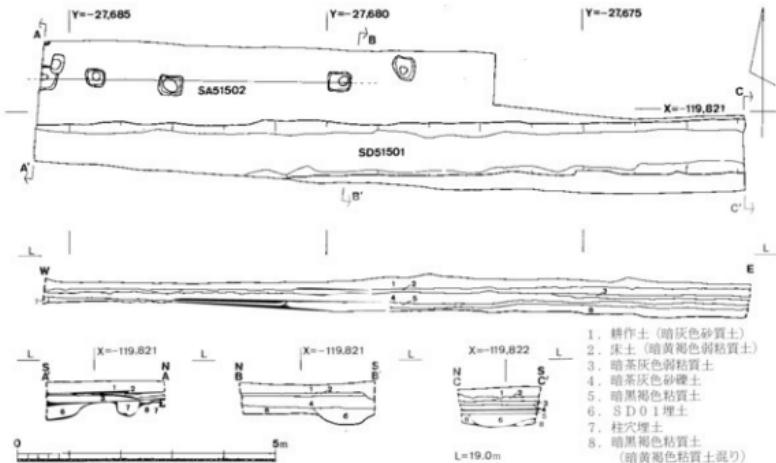
層序（第47図）は、耕作土、床土の下に暗茶灰色から黒褐色の堆積層（第3～5層）があり遺構面にいたる。長岡京期の遺構面を形成するのは厚さ0.3mまでの暗黒褐色粘質土（第8層）で、その下には黄灰色砂質土がある。第5層は右京第475次調査の長岡京期包含層に対応する。

調査区で検出した遺構には、長岡京期の溝1条・柵1条・柱穴2基がある（第47図）。

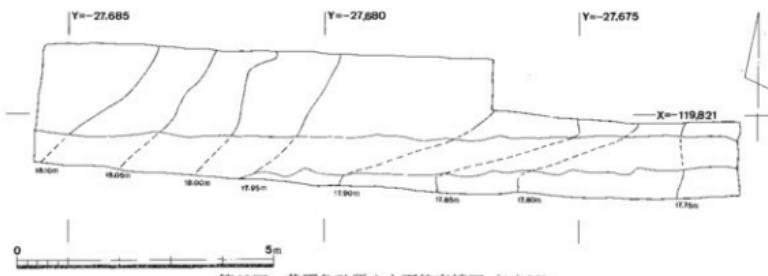
溝 S D51501 右京第475次調査の溝S D47507に連続する溝で、六条条間南小路の北側溝に相当する。側溝は南肩の輪郭が不明瞭であるが、幅約1mで深さ0.4m前後を測る。埋土は暗灰褐色を呈する粘質土で、部分的ではあるが埋土の中位に灰色の砂質土が薄く堆積していた。溝の中心は、第Ⅶ座標系のY=-27,680で、X=-119,821.80であった。

柵 S A51502 六条条間南小路北側溝S D51501の北肩から0.8mの位置に設けられた、右京六条二坊十一町の南辺を区画する東西方向の柵である。検出した三間の柱間間隔は不揃いで、各柱穴は一辺0.4m前後の隅円方形を呈し、深さ0.1～0.3mを測る。

第48図は第8層を除去した段階、黄灰色砂質土上面の等高線図である。不明瞭ではあるが、標高18.05m付近から南西に傾斜する地形が形成されている。この地形は、右京第475次調査地のS X47501に相当するものと考えられる。



第47図 調査地検出遺構図・土層図 (1/100)



第48図 黄灰色砂質土上面等高線図 (1/100)

4 出土遺物

調査区からは土師器、須恵器、墨書き器、線刻土器、製塙土器、縁釉陶器、埴輪などが出土した。埴輪、縁釉陶器、土師器小皿は包含層出土のもので、他は側溝 S D51501から出土している。

側溝 S D51501出土遺物

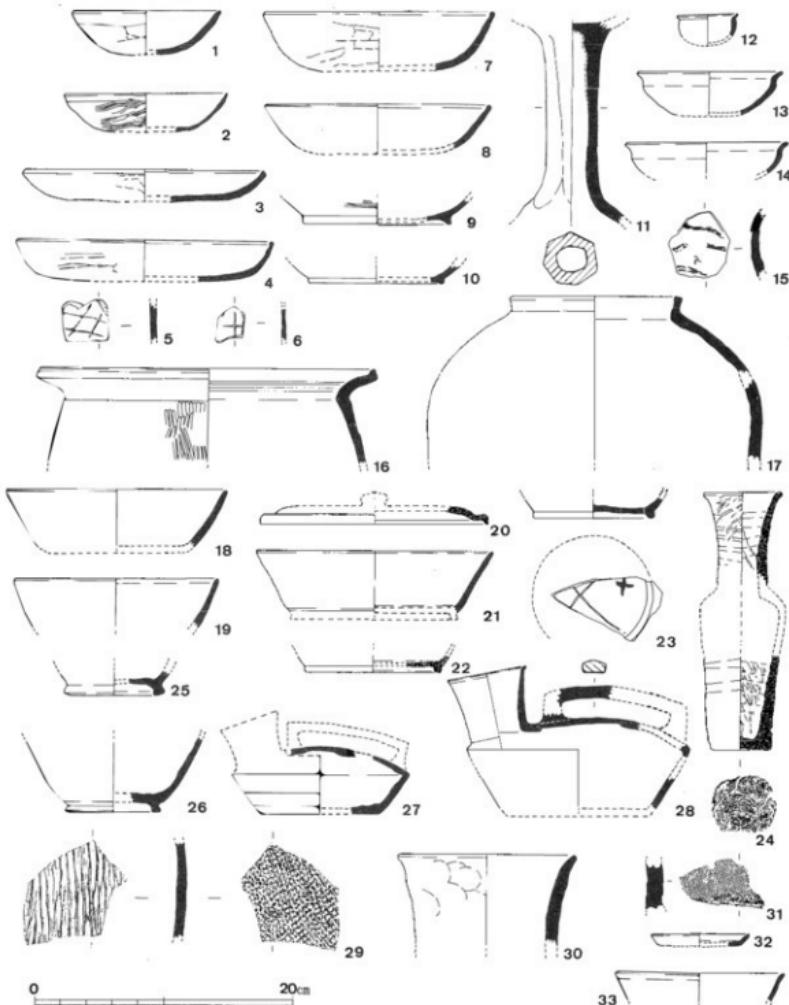
土師器 (第49図1~17) 土師器は、碗、皿、杯、高杯、甕、壺、ミニチュア土器、墨書き人面土器、線刻土器がある。1は器高3.2cm、口径が11.7cmの碗Aで、外面調整にヘラケズリを施す。2は外面調整にヘラミガキが施される碗Cで、口縁端部付近がナデによって若干立ち上がり気味になる。器高3.1cm、口径は12.6cmである。3・4は器高2.6・3.2cm、口径が18.9・20.1cmを測る皿AⅡで、外面はヘラケズリによって調整されている。5・6は皿Aの底部と考えられる破片で、外面には「井」および「十」と考えられる線刻が施されている。杯には杯A(7・8)と杯B(9・10)がある。7・8は器高3.9・4.5cm、口径が17.7・17.9cmの杯AⅡで、外面はヘラケズリによって調整される。11は高杯の脚部で、柱状部は棒芯作りで外面は7角形に面取りされている。16の甕は口径が26.2cmで、体部外面は粗いタテハケによって調整されていた。17は短頸壺と考えられるもので、口縁部径は13.4cmである。12はミニチュアのカマドである。体部は丸い甕型のもので、口径が4.7cmを測る。13~15は墨書き人面土器である。このうち、13・14は小型品で、口縁部径が11cm前後、器高は3cm程度と考えられる。

須恵器 (第49図18~29) 杯、杯蓋、壺、平瓶、甕が認められる。杯には杯B(18・19)と杯B(21~23)がある。18・19の杯Aは、口径が17cm程度を測る。杯Bにも完全なものはないが、口径18.4cmの杯BⅣ(21)と小型品(22・23)に分類できる。23の底部外面には、「×」の線刻と「十」の墨書きが認められた。24は壺Gで、口縁部径6.1cm、器高は20cm程度のものと考えられる。底部には糸切り痕が認められる。25・26は壺の底部片である。平瓶には、体部径が13.9cmの小型品(27)と体部径17.4cmの大型品(28)がある。29は甕の体部と考えられる破片で、外面に密な格子タタキを施し、内面には縦筋の繩目痕跡が認められる。29と同様な成形痕跡を残すものに、右京第451次調査の井戸出土資料がある。

製塙土器 (第49図30) 口縁部の径が13.9cmの製塙土器片である。

包含層出土遺物

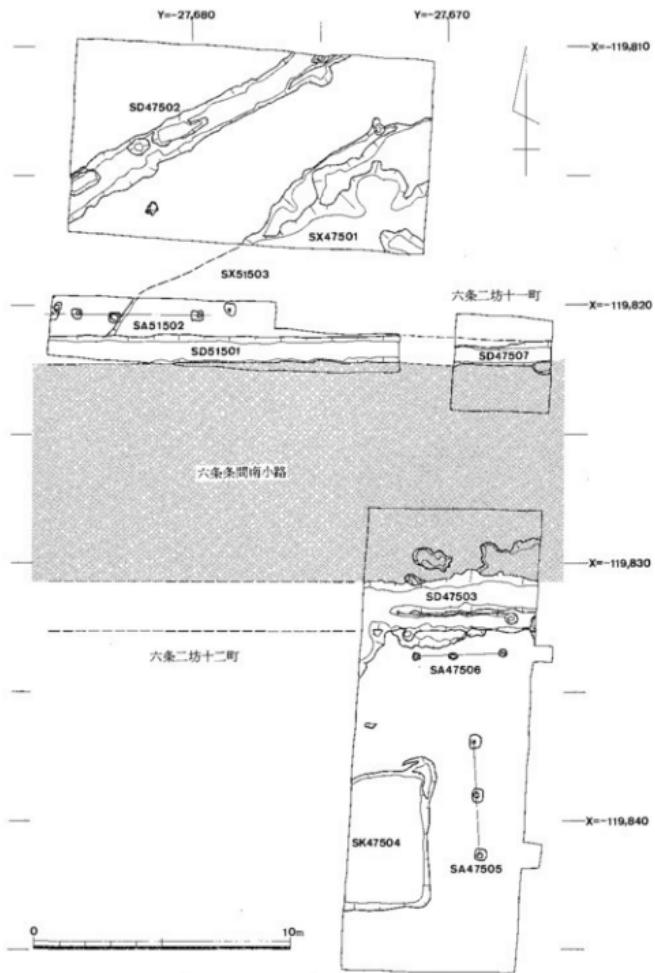
包含層からは、第49図31～33などの遺物が出土した。図示していないが、近世以降のものが多く出土した。31はV期の埴輪片で、外面にはタテハケが施されている。右京第475次調査でも埴輪片が出土しており注目される。31は土師器の小皿で、口径が7.6cmを測る。33は緑釉陶器の椀と考えられる破片である。軟陶であり、平安時代前期のものと考えられる。



第49図 出土遺物実測図（1/4）

5 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、長岡京期のものと長岡京期以前の堆積層である。また、出土した遺物には、古墳時代、長岡京期から鎌倉時代、江戸時代のものがあり、量的に多いのは長岡京期のものであった。



第50図 周辺遺構配置図 (1/200)

長岡京期の調査結果について

右京六条二坊十一町では、今回の調査を含めて6回の調査が行われている。しかし、これまでの調査は十一町の北辺部に集中しており、中央部の調査は未だに行われていない。また、十一町の周囲を画する条坊側溝についても、例えば、南辺を画する六条条間南小路の北側溝が、右京第475次調査と本調査で17mが調査対象となっただけである。「西市」の検討を含めて、十一町の性格を解明するためには、より広範な調査、あるいは継続的な調査が必要である。

右京第475次調査地と本調査地では、長岡京期以前の流路状堆積層（S X47501）が確認されている。流路状堆積層の形成時期、そして、長岡京期における土地条件を検討することによって、条坊道路や居住域の造作に与えた影響、居住域の性格との関連などが徐々に解明されるものと考えられる。

注1) 木村泰彦「右京第475次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊 1995年

2) 中島啓夫「右京第451次調査概報」『長岡京市センターニュース』平成5年度 1995年



第51図 調査作業風景（東から）

第3章 長岡京跡右京第527次（7 A N I S Y - 2 地区）調査概要

——長岡京跡右京四条三坊十町、今里遺跡、今里城跡——

1 はじめに

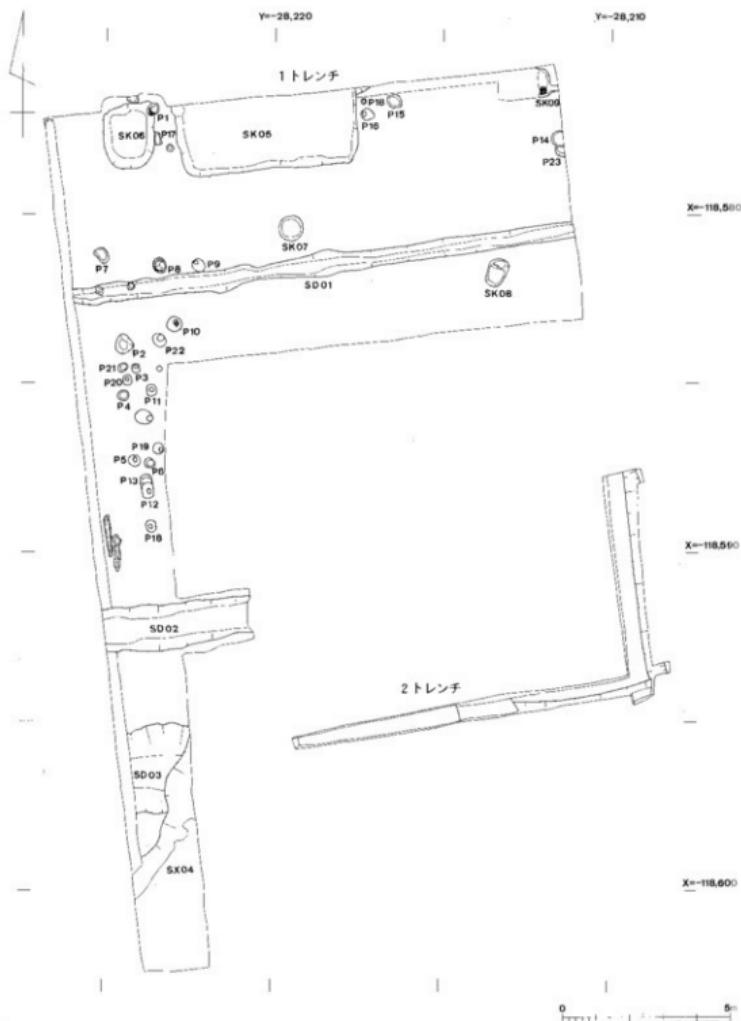
- 本報告は、1996年5月27日から6月18日まで、長岡京市今里二丁目115、127において実施した、長岡京跡右京四条三坊十町および今里遺跡、今里城跡に関するものである。調査面積は169m²である。
- 本調査は、調査地東隣で一部確認されている「今里城跡」に関する資料を得ることを主な目的として実施したものである。
- 調査は平成8年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から御長岡京市埋蔵文化財センターに委託された調査の一環として実施し、小田桐淳が担当した。
- 調査の実施にあたっては、土地所有者の友繁寿江子氏に、水道の借用を始め数々のご援助をいただいた。また、大山崎町歴史資料館学芸員福島克彦氏には現地でのご教示を得た。
- 本文中の遺構番号は正式のものであるが、遺構図中では最初の3桁の調査次数を省略した。
- 本報告の執筆及び編集は小田桐がおこなった。



第52図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 検出遺構

今回の調査は、当初の計画により1トレンチを設定して調査を進めたが、調査終盤に2トレンチを設け、S D52702・03、S X52704の方向を確認し、東隣の右京第356次調査との関連を追究



第53図 検出遺構図 (1/150)

した。主な検出遺構は以下のとおりである。

溝 S D52702 幅1.3m前後で深さ55cmの断面逆台形をした溝である。少なくとも一度掘り直されており、最後は人為的に埋められている。断面図1～3層は掘り直された後の埋土である。また4層には長岡京期の土器片が含まれ、5層には径10cm強の川原石が多く混入している

など、いずれの堆積層も自然堆積とは考えにくい。この溝は敷地東端および北部では確認されておらず、敷地中央部付近で終わるか、もしくは南に折れ曲がるものと考えられる。埋土の質から見ると、後述するS X52704につながる可能性が高いと考える。奈良時代から中世までの遺物が出土しているが、一番新しい中世遺物の量が少なく、全て二次堆積と考えられることから、この溝の時期は近世以降になるものと

考えられる。方位は東で北に6°弱振れる。

溝 S D52703 幅約2.6mで深さ1.1mの東西溝で、方位は東で北に5°30'ほど振れる。S X52704

に切かれているが、その延長は2

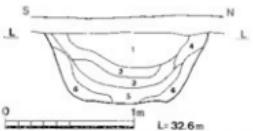
トレンチでも北方が検出されており、右京第356次調査の堀S D35602につながる溝の延長部分と考えられる。溝の北肩は未調査部分1.5mを隔ててつながるが、溝幅はS D35602が約4.4mであるに対し、だいぶ狭くなっている。出土遺物が少なく、時期は確定できないが、瓦器の小片を数片伴うことから中世以降であることがいえる。

池状遺構 S X52704 1トレンチ南端で南東に落ちる肩が検出され、その延長は2トレンチでも確認されている。敷地南部でのボーリング調査でも地山層は確認されないことから、池状の遺構になるとを考えられる。深さは1mほどで底面は平らになっている。この遺構が掘られて早い時期に北部の肩が埋められて縮小されている状況が見てとれる。

土坑 S K52705 1トレンチ北端で検出された方形の土坑で、さらに北へ延びている。深さは40cmで、底は平坦となっている。

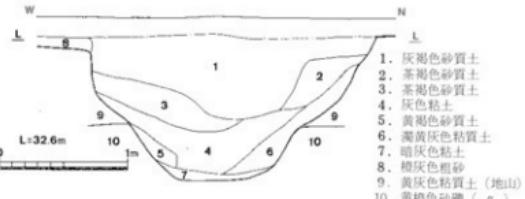
出土遺物から17世紀頃の時期と考えられる。この遺構の南辺は東で北へ5°40'ほど振れている。埋土の状況から2・3層で一気に埋め立てられていると考えられる。

土坑 S K52706 短辺1.5m、長辺1.9mの隅円方形の土坑

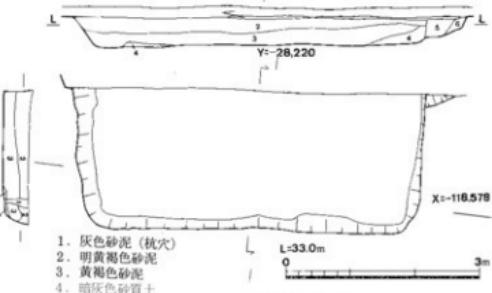


1. 黄灰色粘質土 2. 濁黄褐色粘質土 3. 茶褐色砂泥
4. 灰褐色砂泥 5. 暗灰色粘土 6. 灰褐色砂泥

第54図 S D52702西壁断面図 (1/40)



第55図 S D52703西壁断面図 (1/40)



第56図 S K52705断面図 (1/80)

である。深さは23cm程で皿状にくぼむ。近世の土坑と考えられる。

土坑 S K52708
長径85cm、短径60cmほどの梢円形を呈した土坑で、深さは20cmであるが、北東部が段状に浅くなっている。

埋土は淡茶灰色砂泥層の單一層であ

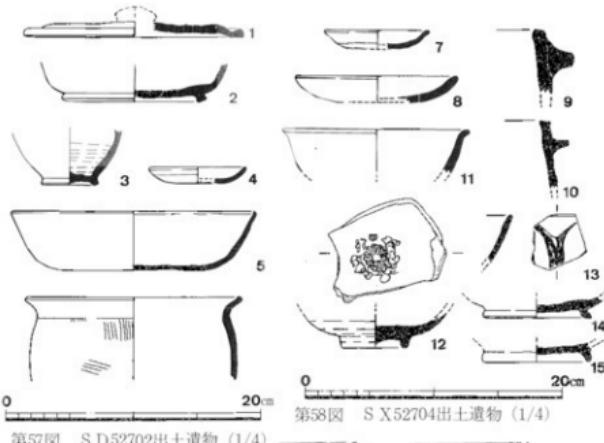
る。この浅い面から弥生時代後期の壺形土器が1点だけ出土した。

その他の遺構 溝 S D52701は現代床土層を埋土とする現代溝であり、水田区画と方向を一にする溝である。土坑 S K52707は直径75cmで深さ20cmの土坑である。柱穴はほとんどから瓦器小片が出土しており、中世の所産であると考えられる。特記事項としては、P 1では根石として平らな川原石を置き、その上にさらに軒平瓦が置かれていたのが確認されている。

3 出土遺物

溝 S D52702出土遺物 ここに図示した遺物は第4層から出土したもので、大半が奈良時代から長岡京期のものである。この中で4の土師器皿は淡赤褐色のやや粗い胎土で、金雲母を含んでいる。この皿は中世のものになる。他に小片であるが16世紀にみられる屈曲する体部の土師器皿や青磁片も出土している。

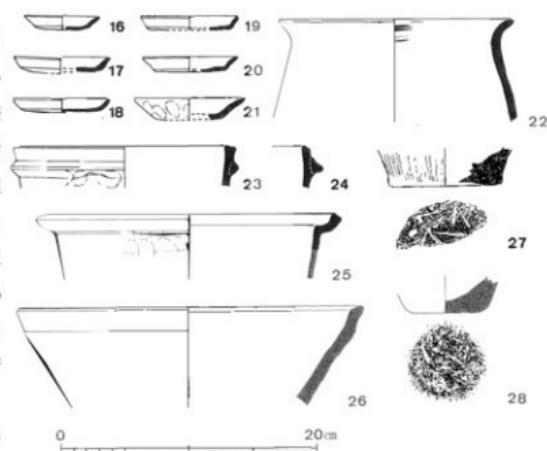
S X52704出土遺物 この遺構から出土している遺物も



第58図 S X52704出土遺物 (1/4)



第59図 S K52706出土遺物 (1/4)



第60図 S K52705出土遺物 (1/4)

少なく、また各時期の遺物が混在して出土しているため、時期を確定する資料とはならない。第58図に示した遺物は遺構北部の肩部が埋められた以降の新しい堆積から出土したものである。ここでは8の厚手の土師器皿や12の国産青磁など、近世に属するものが最も新しいものである。他に11・13の中国製青磁片や瓦器羽釜片などの中世遺物、15の無釉陶器、14の奈良時代須恵器片などが混入している。

土坑 S K 52705出土遺物 図示した遺物は第56図の断面図中の第4層から出土したものである。2・3層にはほとんど遺物がなかった。第4層でも遺構の東肩口からの出土が多い。土師器皿では、口縁が外反するタイプがほとんどである。これらは16世紀頃のものであろう。26の練り鉢は赤色粒子と径1~3mmほどの石英を含む胎土で明赤灰色に焼きあがる信楽系の鉢である。17世紀におさえられる。これらの遺物以外にこの土坑には弥生時代の土器片も混入している。27・28は木葉痕を有する壺と甕の底部である。27は外面が縦方向に磨かれている。

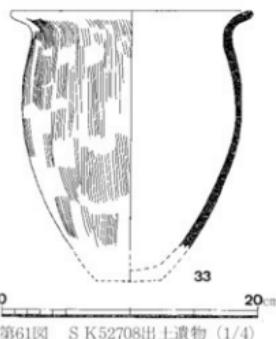
土坑 S K 52706出土遺物 遺物は少ないが、29~31の土師器皿や32の瀬戸系陶器碗が出土した。これらの遺物は17世紀代のものである。

土坑 S K 52708出土遺物 33はこの土坑唯一の遺物で、畿内第Ⅱ様式に属する甕である。口縁端部は丸くおさめ、体部外面には縦方向のハケを施す。

柱穴出土遺物 34はP-19の柱あたりから出土した中世の土師器皿である。35はP-4から出土した三彩陶器鉢片である。白色のきめ細かな素地で、外面には綠釉と黄釉、褐釉が施され、内面にも黄釉が施されている。この柱穴からはほかに瓦器片も出土していることから、柱穴自体は中世の時期であり、二次堆積資料である。36はP-1の根石上に、凸面を上にして敷かれていた軒瓦である。瓦当面の残存部が少ないが長岡宮式7721型式と考えられる。この瓦は乙訓寺に多く用いられているもので、長岡京期に製作されたものである。おそらく中世になって二次的に使用されたものであろう。

4 まとめ

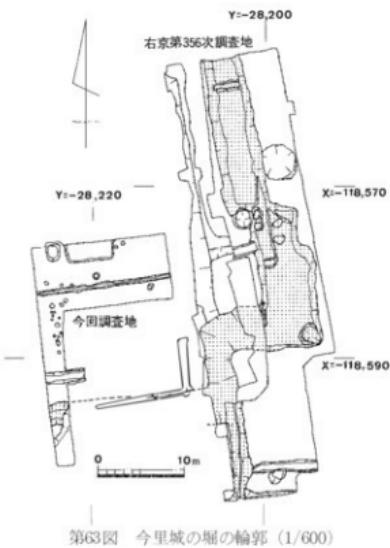
今回の調査では、古い時期では弥生時代中期の土坑が1基検出されたのみであったが、遺物には奈良時代や長岡京期の土器が共伴しており、周辺に今里遺跡の遺構や長岡京期の遺構が存在することは間違いない。中でも中世の柱穴から出土した三彩陶器は奈良三彩の鉢片であり、寺院な



第61図 S K 52708出土遺物 (1/4)



第62図 柱穴出土遺物 (1/4)



第63図 今里城の堀の輪郭 (1/600)

S D52703が検出され、城の輪郭を補強することができた。右京第356次調査の堀が南部で西へ分岐して延びることが判明したことによって、堀による区画が単郭ではなかった可能性がでてきた。これまで、右京第356次調査で検出された南北方向の堀は城本体の西を画するものと考えられていた。この堀につながる東西方向の溝が堀に水を引き込む性格の溝なのか、それとも他の施設を画する堀なのか今後の研究が待たれるところである。

17世紀になって S K52705と S D52702が掘られるが、これらの遺構の方位は S D52703とほぼ平行する。この時期には城の堀はすでに埋まっているが、その方向性はまだ残っていたものと考えられる。S D52702との関連が考えられる S X52704も含めて、これらの遺構の性格が今後問題となつてこよう。

注1) 原 秀樹「右京第356次調査」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度 1992年

ど特殊な施設との関連が想定される。その有力な候補として乙訓寺があげられる。調査地から現在の乙訓寺南門までは直線距離にして200mほど離れている。そしてこの間には風呂川が東西に流れており、谷が通っている。従って当地は乙訓寺の寺域からは外れるが、寺に近接する所として、この三彩陶器はもとは乙訓寺にあったものとして位置付けてよいであろう。乙訓寺は郡名寺院として著名であるが、調査がまだ十分でなく、具体的な様相がはっきりしていない。

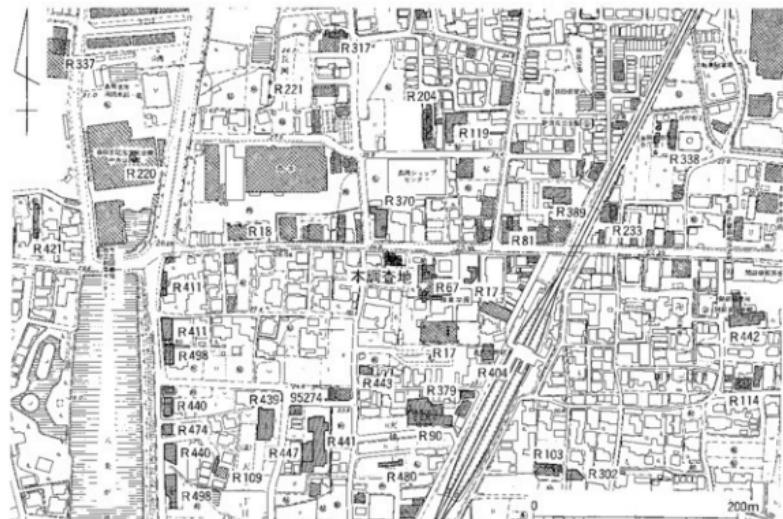
ⁱⁱⁱ 今里城に関しては、右京第356次調査で屈曲する南北の堀が検出され、中から16世紀代を中心とした遺物が多数出土している。今回の調査では堀につながる溝

第4章 長岡京跡右京第528次（7ANKSC－6地区）調査概要

——長岡京跡右京六条三坊一町、開田城跡、開田城ノ内遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1996年6月3日から同年7月3日まで、長岡京市天神一丁目313番地の3において実施した長岡京跡右京六条三坊一町と開田城跡や開田城ノ内遺跡の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、住宅建設にともなう事前調査で、158m²の調査を行った。当調査の目的は、長岡京跡推定宅地内の土地利用の解明に主眼を置き、開田城の西辺と、開田城ノ内集落遺跡の資料を得ることとした。
- 3 調査は、平成8年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会の指導のもと、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが受託して行った。現地調査は同センター主査岩崎誠が担当した。
- 4 当調査は、土地所有者の小森一栄氏の文化財保護に対する深いご理解とご協力があり、なしえたものである。
- 5 本報告の執筆及び編集は岩崎が行ったが、現地調査や整理作業には多くの方々の協力があった。^③



第64図 発掘調査位置図（1/5000）

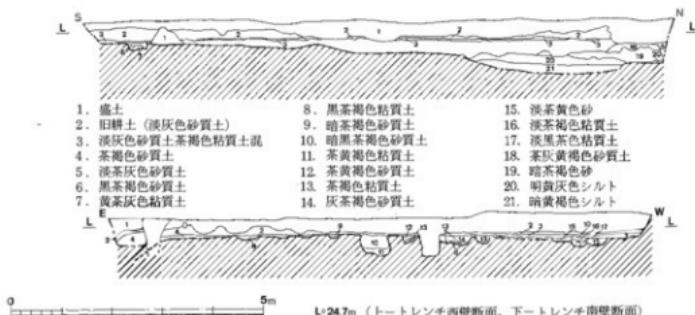
2 調査経過

調査地は、阪急長岡天神駅の北西約150mにある。調査地の東には開田城が接しており、西辺堀の西肩が検出できる可能性があった。また調査地北側では、右京第370次調査^⑨が行われており、弥生時代から長岡京期にかけての集落や宅地に関連する遺構が確認され、中・近世の水田開発に関連する溝群も明らかになっている。

当調査では、厚さ約0.15～0.25mの盛土造成がなされていたが、その下には旧畑作土が厚さ約0.08～0.15mあり、この下面からは水平堆積になつて薄い茶褐色粘質土混じりの淡灰色砂質土が見られた（第66図）。当調査の遺構は、すべてこの層を除去した段階で検出した。検出遺構の時期は、古墳時代から室町時代である（第65図）。



第65図 検出遺構図（1/200）



第66図 調査地土層図（1/100）

3 検出遺構

鎌倉時代以後の遺構には溝や柱穴、近代搅乱坑などがある（第67図）。調査地北端に東西方向の溝S D01、東辺に南北方向の溝S D08～10や土坑状遺構S X21・23・24・28、柱穴群P 29・30・32・41・69などが検出された。このうちP 41からは13世紀代の瓦器焼が出土した。溝S D10は開田城西辺堀西肩と考えられる。

飛鳥～奈良時代の遺構には、柱列やまとまりのつかなかつた柱穴群がある（第68図）。柱列の一部は掘立柱建物になる可能性をもつものもある。柵S A12としたものを除いて、右京第119次と370次の両調査で検出された奈良時代倉庫群に近い方位にある。多くの倉庫をもつ奈良時代の大規模な施設が考えられる。

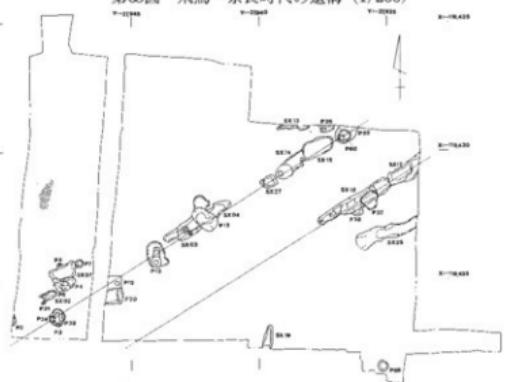
古墳時代の遺構には、北東～南西方向に連なる遺構群が3列あるほか、土坑状の遺構や柱穴・焼土面などがある（第69図）。3列の遺構群はほぼ並行しており、特に平面図に直線で示した2列は約2.5mの間隔を保って築かれている。P 60からは6世紀前半の須恵器杯身などが出土している。焼土面は網かけで表現した。



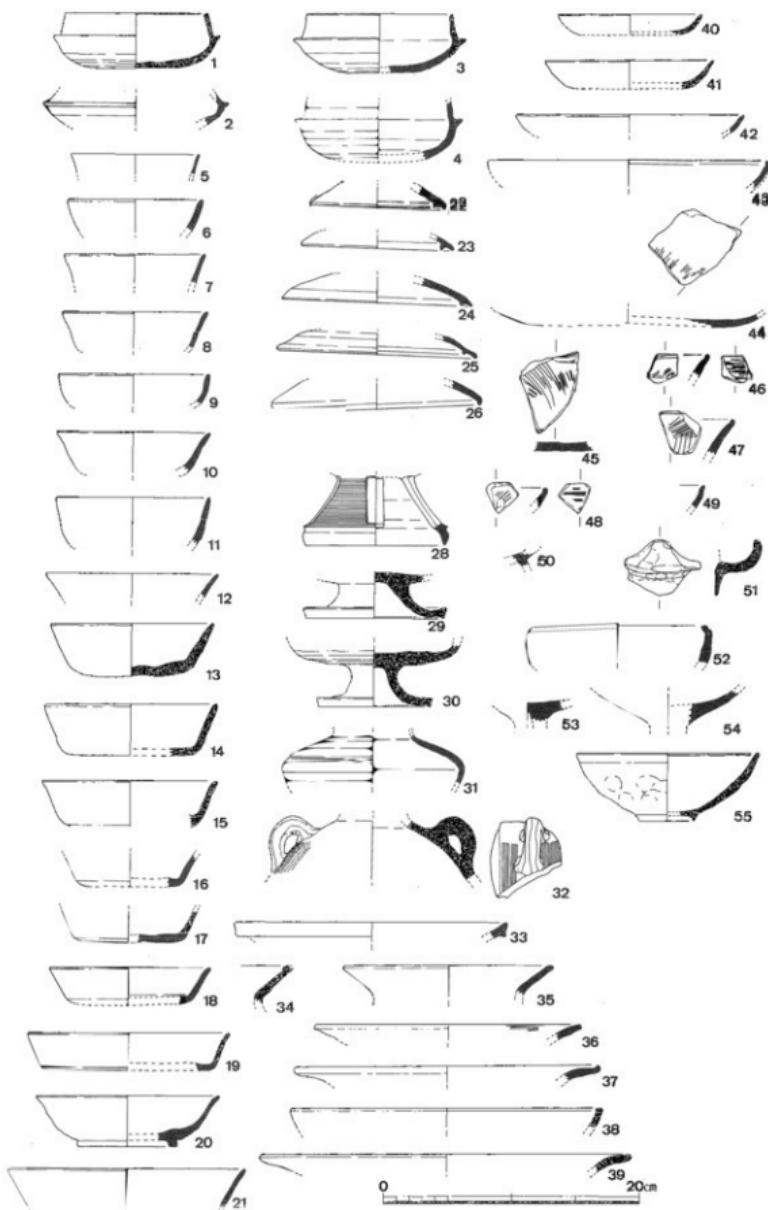
第67図 鎌倉時代以後の遺構 (1/200)



第68図 飛鳥～奈良時代の遺構 (1/200)



第69図 古墳時代の遺構 (1/200)



第70図 出土遺物実測図 (1/4)

4 出土遺物

出土遺物には、縄文土器数点の他、古墳時代から奈良時代と鎌倉時代の土器類がある。中でも飛鳥～奈良時代の遺物の出土量が多かった。

縄文時代の土器

第71図57は、後期の深鉢片と思われる小片である。柵S A29 P 2から出土した。表面の残りが悪いため調整不明であるが、縄文を区画する沈線と思われる装飾がみられる。石英・長石粒が多い胎土である。このほか細片が数点があるが、いずれも2次堆積である。

古墳時代の遺物

須恵器杯（第70図1～4）・高杯（同図28）・提瓶（同図32）・土師器甕（同図34・35）・高杯（53・54）がある。須恵器杯は、いずれも立ち上がり受け部から2cm近くの高さをもつ。1は口縁端部に平坦面をもつもので、3は口縁端部を丸くおさめたものである。体部は丸みをもつもの（1・3・4）と、偏平なもの（2）がある。前者は立ち上がりがやや内傾する程度に鋭く上方に伸び、口径は11～11.5cm程度である。後者はおおきく内傾し、口径は前者より大きい。このような特徴から前者はTK23～47型式前後、後者はTK10型式前後の時期と考えられる。高杯は短脚1段透かしの脚部（28）で、外面にカキメが施されている。古い様相をもつ杯類と同時期であろう。提瓶は環状把手をもつ破片（32）で、一部にカキメがみられる。新しい様相をもつ杯と同時期に捉えられよう。1は外面の受け部以下が、32は内面以外が赤茶褐色に焼き上がっている。土師器甕は口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させた34と、肥厚させない35がある。土師器は甕・高杯とともに布留式土器の新しい特徴を備えている。これらのほか、移動式竈の基底部片と思われるものが1点ある（第71図56）。

飛鳥～奈良時代の土器

須恵器杯A（または杯G、第70図5～19）・杯B（同図20・21）・杯B蓋（または杯G蓋、同図22～27）、高杯（同図29・30）・短頸壺（同図31）・甕（同図33）、土師器皿A（同図40～43・49）・杯A（同図47）・甕（同図36～39・51）、製塩土器（同図52）などがある。

須恵器杯Aは、口径12.5～13.6cm、器高2.8～4.2cmの13～15・18（杯AⅣ）と、口径15.2cm、器高3.0cmの19（杯AⅢ）の2群の法量分布にまとめられる。13は底部から口縁部への移行が滑らかに湾曲しており、杯Gの形態をとどめている。杯Bは口径14.2cm、器高4.0cmの20（杯BⅢ）と、口径18.5cmの21（杯BⅡ）がある。杯B蓋は口縁端部を下方に垂下させるように折り曲げた形態（26・27）のものと、内面にカエリをもつ杯G蓋の形態を受け継ぐもの（22～25）がある。前者は口径16.2～17cmで、杯BⅢ蓋の法量を備える。後者は口径10.6～11.9cmの杯BⅤ蓋（22・23）と、口径15～15.7



第71図 出土土師器甕・縄文土器拓影図(1/3)

cmの杯BⅢ蓋（24・25）がある。高杯は、脚部が2点があり、いずれも短脚である（29・30）。短頸壺は、肩部に沈線と波状文を施したものである（31）。甕は口縁部に端面をもつもので、口径21.3cmを測る（33）。土師器ⅢAは、口径22.0cmの43（皿AⅠ）、口径13cm、器高2.2cmの41（皿AⅡ）、口径11.1cm、器高1.6cmの40（皿AⅢ）がある。42は口径17.3cmあり、杯AⅠの可能性がある。杯A（47）は、細片ではあるが、放射状暗文が2段に施されている。このほか杯皿類の細片に放射状暗文を施したもの（45～48）や底部内面に連弧文がみられるもの（50）がある。46・48の外面には横方向の箆磨きが施されている。甕には、口縁端部に面をもつE形態（36・38・39）と、口縁端を上方にわずかに巻き込むA形態（37）がある。また把手部分も出土している（51）。製塙土器は、石英や長石砂粒を多く含むもので、茶褐色粒も多い。前者は角張ったものが多く、後者は円や梢円などの粒である。この他、柵S A11P 4から炉壁体細片が少量出土した。

鎌倉時代の遺物

口径14.2cm、器高5.3cmの瓦器椀（55）などがある。内面のミガキは粗く、外面ミガキはみられない。口縁部内面には沈線を施している。底部には断面三角形の低い高台をつけている。13世紀の所産であろう。P44から正立させた形で出土した。

5 ま と め

当調査では、開田城の西辺堀西肩と思われる落込みが検出でき、開田城の西辺が確定できたこと、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物や柵・柱穴群などが検出でき、周辺地で検出されている倉庫群との関連や、炉壁体の出土などで、一般的な農村や在地有力者の宅地とは考えにくく、大規模な施設が予想されること、また古墳時代については、遺構の性格こそつかめなかったが、並行して築かれた遺構群が古墳時代集落内の何かを区画しているように見られることなど、多くの貴重な成果をあげることが出来た。長岡京市内で最も華やかな繁華街にあって、徐々に重複した遺跡の様相が明らかになってきた。しかし全容を明らかにするには程遠い状況である。調査の困難を極める当地周辺での細かな調査成果が積み重ねられれば、一步ずつでも当時の姿が明らかになり、遺跡の復元が可能になると共に、当時の社会構造、ひいては歴史的事実の解明に欠かせないものとなろう。

注1) 作業員

全京都建設協同組合（奥戸幸雄、石津一男、吉川幸美、高沢明人、太田善雄、山本文智）

補助員・整理員

池庄司淳、橋田邦夫、森 昌彦、西口秀樹、大谷 弘、佐藤陽子、酒井 歩、谷村雅世、
村田美智子、森元希美、岡村まり江、天白真理子、小畠絢子、田中京子、畠谷智香、
尾崎みづ樹、西澤正晴

2) 木村泰彦「右京第370次（7 ANK S N - 5 地区）調査略報」財團法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 1993 平成5年3月20日

3) 岩崎 誠「山城西部（乙訓）」古代の土器研究会『古代の土器4－煮沸具（近畿編）－』1996
年9月

第5章 長岡京跡右京第549次（7 A N I S T -10地区）調査概要 ——長岡京跡右京四条三坊一町、乙訓寺跡、今里遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1996年11月5日から11月29日まで、長岡京市今里三丁目12番1号の大正寺境内において実施した発掘調査に関するもので、調査面積は146m²を測る。
- 2 本調査は、大正寺本堂の新築工事に伴うもので、乙訓寺と大正寺の関連や長岡京三条大路に関する資料を得ることを主な目的として実施された。
- 3 調査は平成8年度国庫補助事業として財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが主体となって実施し、現地調査は中島皆夫が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者の宗教法人大正寺（代表 森岡隆威氏）に数々のご援助をいただいた。
- 5 調査後の図面・遺物整理には井上礼子、小畠絢子氏をはじめ多くの方々の協力を得た。⁽⁸⁾
- 6 本報告の執筆および編集は中島が行った。

2 調査経過

調査地は阪急長岡天神駅の北約1.2km、小畠川が形成した低位段丘の縁辺部に位置する。調査地の南西には7世紀代から現代まで法灯を伝える乙訓寺があり、乙訓寺創建時は本調査地も寺域



第72図 発掘調査位置図 (1/5000)

に含まれていたと考えられる。調査は本堂解体工事の終了後に着手し、盛土を重機で掘削した後人力による掘削を行った。調査では解体以前の大正寺本堂や乙訓寺に関連する遺構の検出が期待されていた。また、調査地が長岡京期の三条大路にあたることから長岡京期の成果も注目されていた。なお、第VI座標系による調査区の中心は、Y = -27,993、X = -118,337で、周辺の標高は32m前後を測る。

3 検出遺構

調査区には0.1~0.7mの盛土が施されていた（第73図第1~3層）。この盛土は本堂に伴うもので、本堂建立以前の遺構は、茶褐色砂礫土ないし黄褐色粘質土の地山面から掘り込まれている。

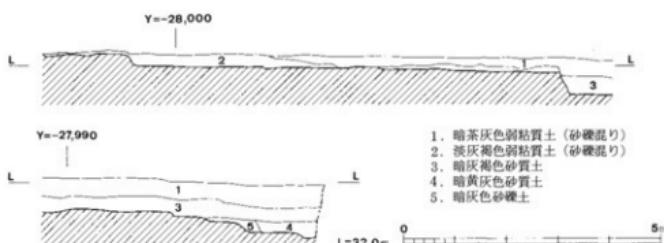
調査区で検出した遺構（第74図）は、大正寺の本堂に関連する時期のものと、本堂が建立される前の時期に大別される。本堂建立以前の遺構には、江戸時代初頭と鎌倉時代後期のものがある。

溝 S D02 盛土面から掘られた東西溝で、調査区の東で南東方向に屈曲している。本堂の中央部に位置していることから、本堂床下の湿気抜き用と推定される。溝の幅は0.5~1 m、深さ0.3 m前後で、西から東へ傾斜していた。

土坑 S K03 溝 S D02と同様に盛土上面から掘られている。溝 S D02と連結する土坑で、調査区の南東外へさらに延びている。

壇 S X04 本堂の基壇北辺にあたる段差で、盛土上面から掘られていた。底面から検出面までの高さは0.3~0.7mを測る。壇 S X04の東では、簡単な石積が確認されており、石積の控え土からは棟瓦が出土している。

土坑 S X01・11・12（第75図） 調査区の西半部で3基の土坑が固まって確認された。土坑 S X11・12の形態は、平面形が方形ないし開円方形で、断面形は箱形に近く平坦な底部を持つ。また、土坑 S X01は、後世の廐芥処理用の土坑が掘られており、本来は土坑 S X11・12と同様な形態であったと考えられる。3基の土坑の性格については、いずれも縁部の埋土がよく縮まっているのに対し中央部が軟弱であることや、土坑 S X11から完形に近い天目茶碗と土器器皿が出土したことなどから、座棺墓と考えられる。底部の長軸は0.9~1.1mで、底面の高さは標高31.8m前後に掘っていた。出土遺物から江戸時代初頭の時期が想定される。

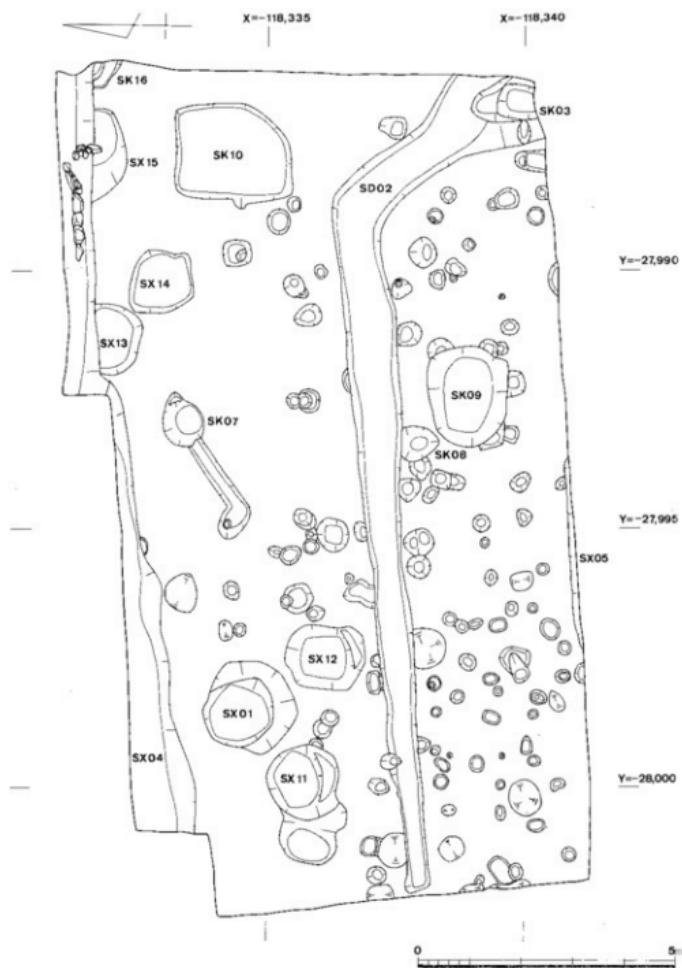


第73図 調査地土層図 (1/100)

土坑 SX13~15 (第76図) 調査区の北東部で3基の土坑を検出している。このうち、土坑 SX13・14は、規模、平面形態および断面形態、埋土の状況が前述の土坑 SX01・11・12に近いことから、座棺墓と推定される。この2基は底面の高さも31.7m前後であった。土坑 SX15については、埋土の状況と底面の高さが異なっており、座棺墓とは考えにくい。

土坑 SK09 調査区の中央で確認された楕円形の土坑で、中世の瓦器梶片が出土した。

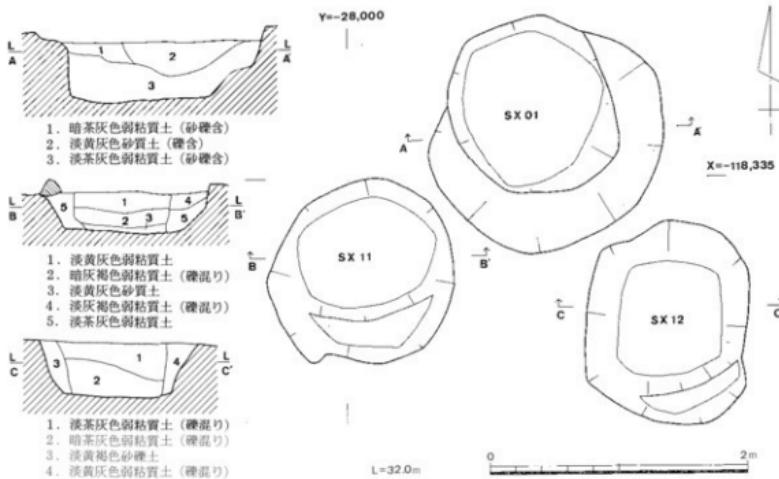
土坑 SK10 調査区の東辺で確認した土坑で、土坑 SK09と同様な遺物が出土した。



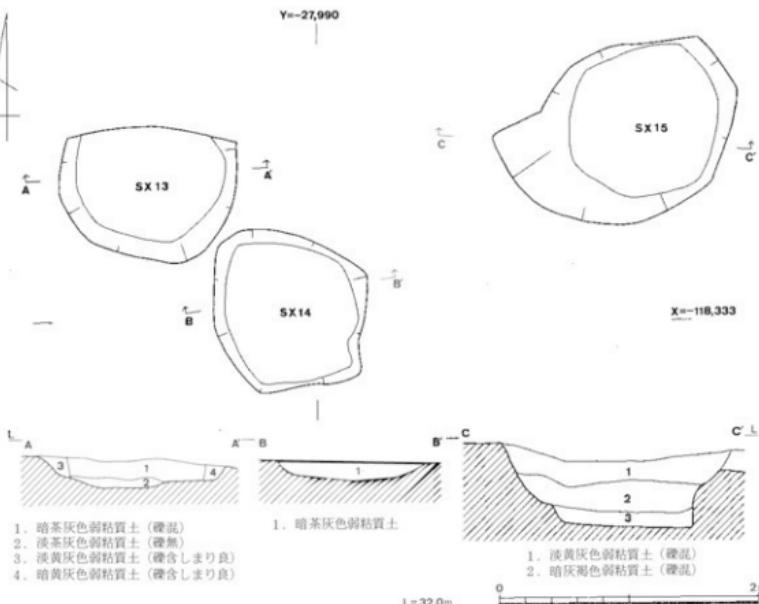
第74図 検出遺構図 (1/100)

土坑 S K16 調査区の北東端で部分的に確認した土坑。瓦器梶の破片が出土している。

このほかにも、柱穴・土坑が多数存在するが性格は判然としなかった。



第75図 土坑S X01・11・12実測図(1/40)

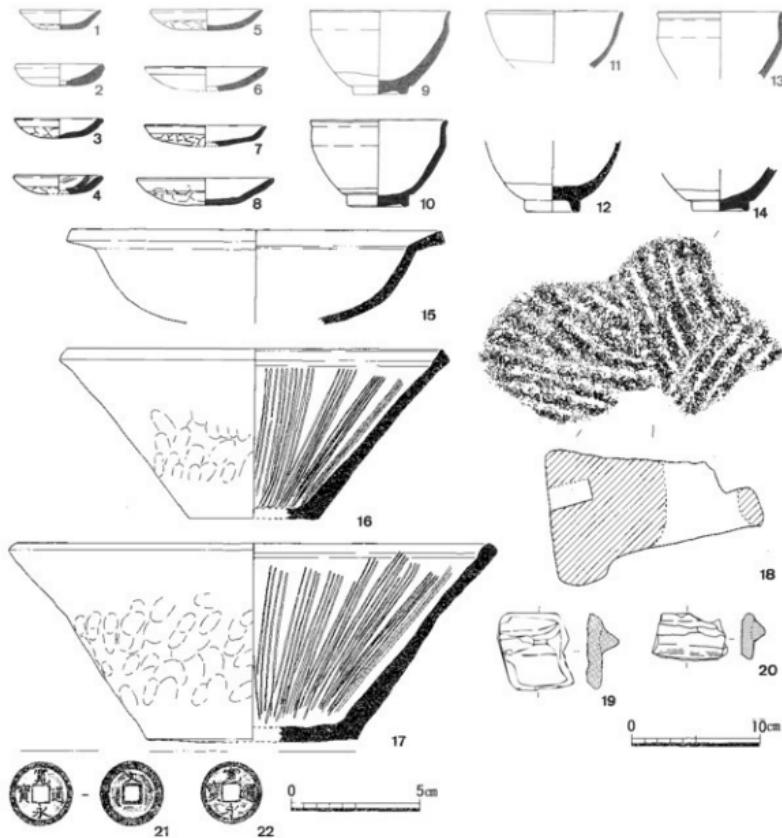


第76図 土坑S X13～15実測図(1/40)

4 出土遺物

調査区からは、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石臼・瓦・埴輪・銭貨・鉄器などが、整理箱にして計4箱出土した。出土遺物は江戸時代初頭のものが多いが、遺構から出土したものは少ない。また、瓦器椀や土師器皿などに鎌倉時代の後半期と考えられる遺物もあるが、図示できるものは無かった。

土師器 皿（1～8）、鍋（15）、甕などがある。皿には口径7cm前後のもの（1～4）と9cm前後のもの（5～8）が認められる。いずれも、内面と外面上半にナデが施され、底部外面は指頭圧痕を残す。8は完成品で、土坑S X11から出土した。鍋（15）は口径が28.9cmの大型品である。土師器の皿と鍋は江戸時代初頭頃のものと推定される。



第77図 出土遺物実測図（1～20-1/4, 21・22-1/2）

須恵器 杯、壺、甕の破片があるが、所属時期は不明である。また、図示できるものもない。

瓦器 粗雑な暗文を施した瓦器焼片が多数あり、鎌倉時代後半のものと考えられる。

陶磁器 天目茶碗（9～14）、甕、插鉢（16・17）がある。天目茶碗は美濃焼と考えられ、口径10.5cm前後、器高6.5cm前後のものである。9は完成品で、8の土師器皿と同様に土坑S X11から出土した。插鉢は信楽産と考えられる。

石臼（18） 18の石臼は、土坑S X01の埋土上層部から出土した。

埴輪片（19・20） 破片であり詳細は分からぬが、タガの突出が明瞭なものである。19の外面には赤色顔料が付着している。20の外面にはヨコハケが施される。

銭貨 寛永通宝2枚（21・22）の他に、銭文は判読できないが輸入銭と考えられるものもある。土坑S X11から完形の土師器皿・天目茶碗とともに出土したのは輸入銭であった。

5 ま と め

今回の調査では、小面積ながら多数の溝、柱穴、土坑などが検出された。しかし、出土遺物や遺構の特徴から時期や性格を想定できたものは、本堂に伴う溝、土坑、基壇、江戸時代初頭の土坑群、鎌倉時代後半の土坑、柱穴など数少ない。また、当初想定されていた乙訓寺や長岡京に関連するものは、確認した遺構、遺物のなかには存在しなかった。

大正寺本堂建立以前の土坑群について

今回検出された遺構のなかで、最も注目されるのが江戸時代初頭の土坑群である。前述したように、これらの土坑は座棺墓であり、これより当地が江戸時代初頭に墓地として利用されていたことが分かる。座棺墓は西の3基と東の2基の2群合計5基を確認した。西群の座棺墓の配置には計画性が看取され、そして、東西両群とも近接して掘られているにもかかわらず重複関係が認められない。このことは、各群の座棺墓が同時期ないし短期間に掘削されたことを示している。また、断面観察における埋土の状況はいずれも似かよっており、数は少ないが出土遺物が示す時期も大きな幅を有さないことから、東西の2群についても同時期ないし短期間の掘削が想定されるのである。

座棺墓群からは被葬者の特定に結びつく資料は確認されなかったが、当時の埋葬形態や副葬品を考慮すれば僧籍など比較的身分の高い人物が想定される。また、この座棺墓群と大正寺建立を直接関連付ける資料も調査区からは検出されていない。しかし、本堂の直下から座棺墓群が確認され、大正寺の建立年代を少なくとも江戸時代前期以降に求めることが可能になった。また、大正寺建立の契機に、座棺墓群の被葬者の鎮魂という可能性が加えられたことも、調査成果に挙げられるだろう。

注) 整理作業においては、田中京子、野村江美子、西口秀樹氏の協力も得た。

付表2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	長岡市文化財調査報告書							
副書名								
巻次	第36冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本輝雄、小田綱淳、岩崎誠、中島皆夫、中尾秀正							
編集機関	財團法人長岡市埋蔵文化財センター							
発行機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒617 京都府長岡市開田一丁目1番1号 TEL. 075-951-2121							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
走田古墳群（第1次）	長岡市	26209	56 57	34度55分 24秒	135度40分 45秒	19951002 ～19960113	271m ²	本堂建設
海印寺跡（第3次）	奥海印寺明神前31							
長岡京跡（右京第515次）	長岡市	26209	107 80	34度55分 10秒	135度41分 49秒	19960116 ～19960131	29m ²	遺跡確認
開田遺跡	開田四丁目608-1							
長岡京跡（右京第527次）	長岡市	26209	107 29 32	34度55分 50秒	135度41分 28秒	19960527 ～19960618	169m ²	住宅建設
今里城跡	今里二丁目115他							
今里遺跡								
長岡京跡（右京第528次）	長岡市	26209	107 74 73	34度55分 23秒	135度41分 39秒	19960603 ～19960703	158m ²	住宅建設
開田城跡	天神一丁目313-1							
開田城ノ内遺跡								
長岡京跡（右京第549次）	長岡市	26209	107 28 32	34度55分 58秒	135度41分 37秒	19961105 ～19961129	146m ²	本堂建設
乙訓寺跡	今里三丁目12-1							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
走田古墳群（第1次）	古墳	古墳（後期）	走田8・9号墳の横穴式石室	組合せ式家形石棺、須恵器、四注式陶棺、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶器、青磁、白磁、石器、鐵器、錢貨、鉄釘、延石、瓦	走田9号墳の横穴式石室を保存			
海印寺跡（第3次）	寺院跡	安土桃山～江戸	土葬墓、集石造構、溝、土坑					
長岡京跡（右京第515次）	都城跡	平安（長岡京期）	溝、柵列	土師器、須恵器、墨書き土器、線刻土器、製塙土器、綠釉土器、埴輪	六条条間南小路			
開田遺跡	集落跡				北側溝			
長岡京跡（右京第527次）	都城跡							
今里城跡	城跡	室町	土坑	土師器、須恵器、三彩陶器、軒平瓦（長岡宮式）、弥生				
今里遺跡	集落跡	弥生	溝、土坑、池状遺構	土器、青磁、瓦器				
長岡京跡（右京第528次）	都城跡	古墳（後期）	土坑、柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、				
開田城ノ内遺跡	集落跡	飛鳥・奈良	掘立柱建物	製塙土器、瓦器				
開田城跡	城跡	鎌倉・室町	溝、土坑					
長岡京跡（右京第549次）	都城跡							
今里遺跡	集落跡	鎌倉（後期）	土坑	土師器、須恵器、瓦器、陶器				
乙訓寺跡	寺院跡	江戸（初期）	座棺墓、土坑	磁器、石臼、瓦、埴輪、錢貨、鉄器				

図 版

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
一



1. 空からみた調査地



2. 寂照院と走田古墳群（南から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
一



上、調査前全景（南西から） 中、調査前の8号墳（西から） 下、調査前の9号墳（南から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版三



1. 8号墳全景（南から）



2. 8号墳横穴式石室全景（南から）



3. 同（北から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

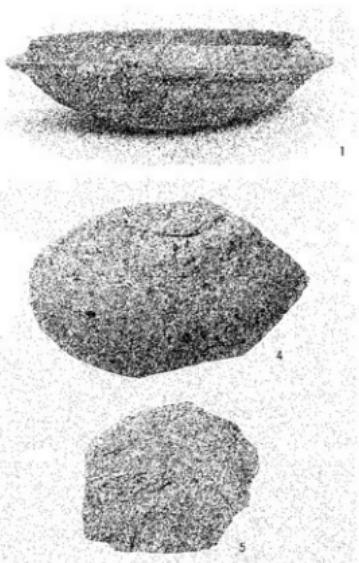
図版四



1. 8号墳横穴式石室全景（西から）



2. 8号墳石室内の遺物出土状況（南西から）



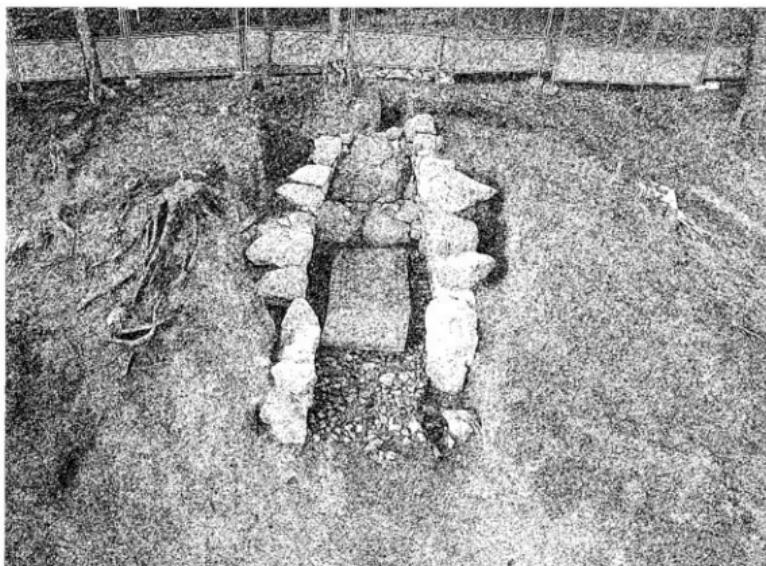
3. 8号墳出土遺物

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版五



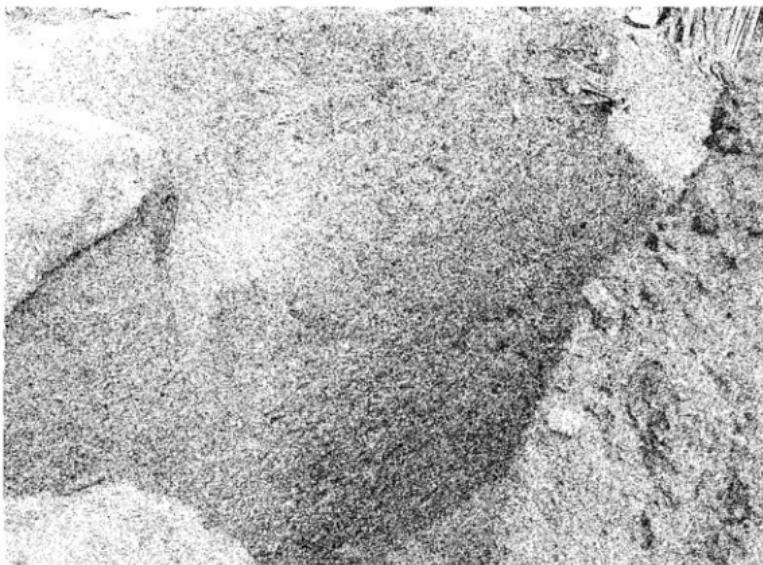
1. 9号墳遠景（南から）



2. 9号墳全景（南から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
六



1. 9号墳墳丘東部の盛土（南西から）



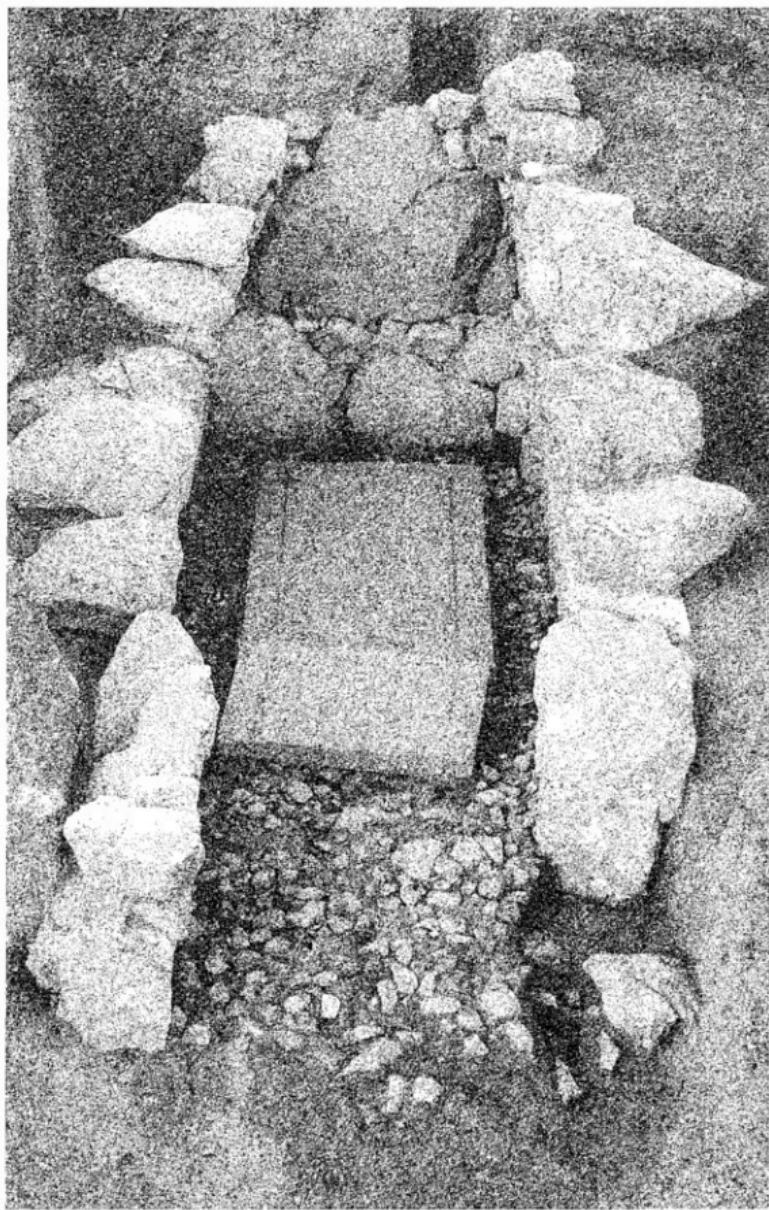
2. 9号墳石室東側壁背後の状況（東から）



3. 9号墳石室西側壁背後の状況（西から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

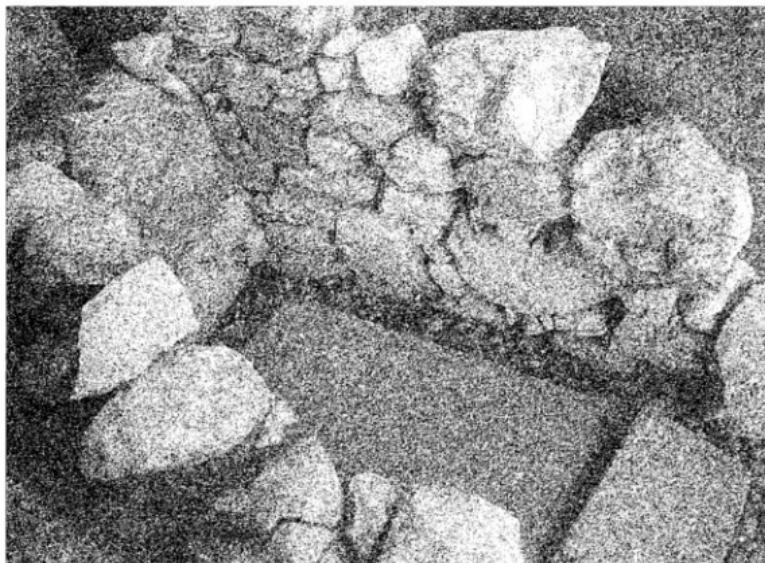
図版七



9号墳横穴式石室全景（南から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版八



1. 9号墳石室奥壁と東側壁（南西から）



2. 9号墳石室奥壁と西側壁（南東から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版九



1. 9号墳石室玄
室の東側壁
(西から)



2. 9号墳石室玄
室の西側壁
(東から)



3. 9号墳石室羨
道の袖石
(北から)

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版一〇



1. 9号墳石室上面の砾床（南から）



2. 同（北から）



3. 9号墳石室下面の砾床（南から）



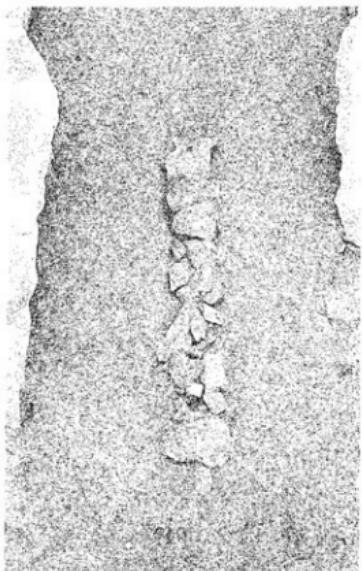
4. 同（北から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

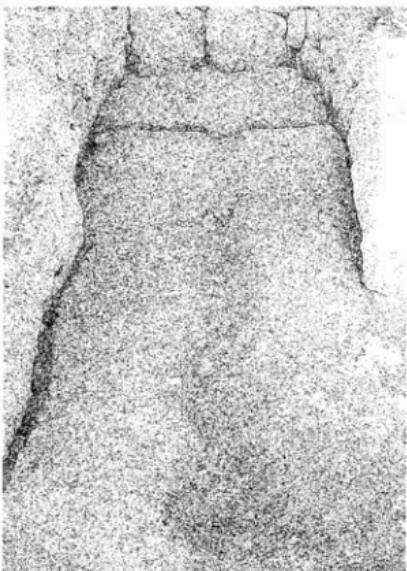
図版
一



1. 9号墳の石室排水溝全景（南から）



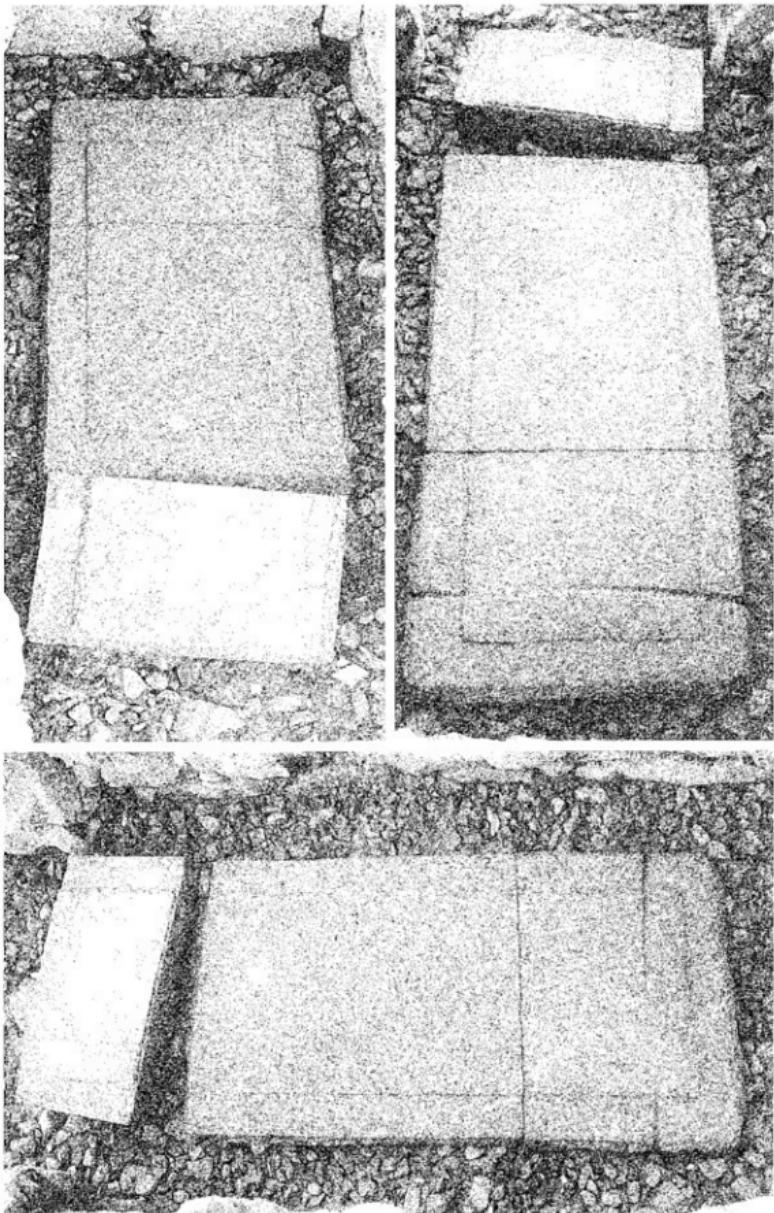
2. 9号墳の石室羨道の排水溝（南から）



3. 9号墳の石室排水溝完掘状況（南から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

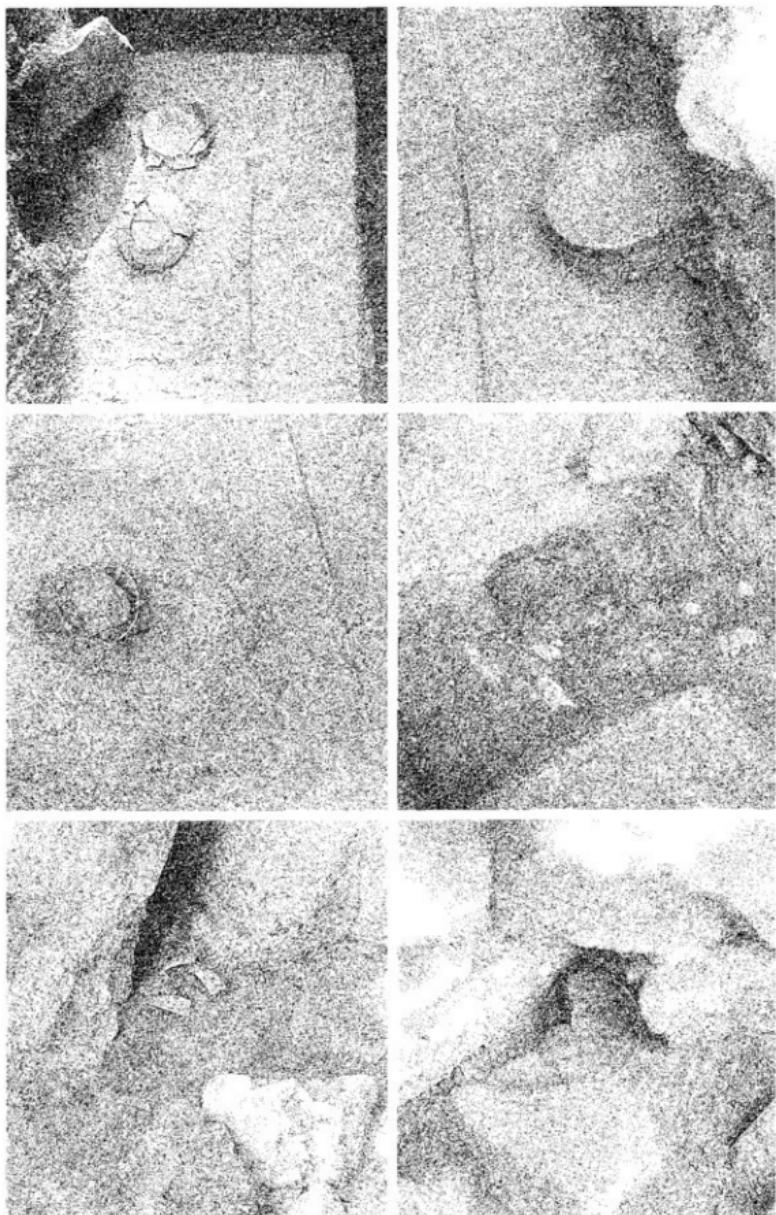
図版
一二



上左、9号墳の組合せ式家形石棺（南から） 上右、同（北から） 下、同（東から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

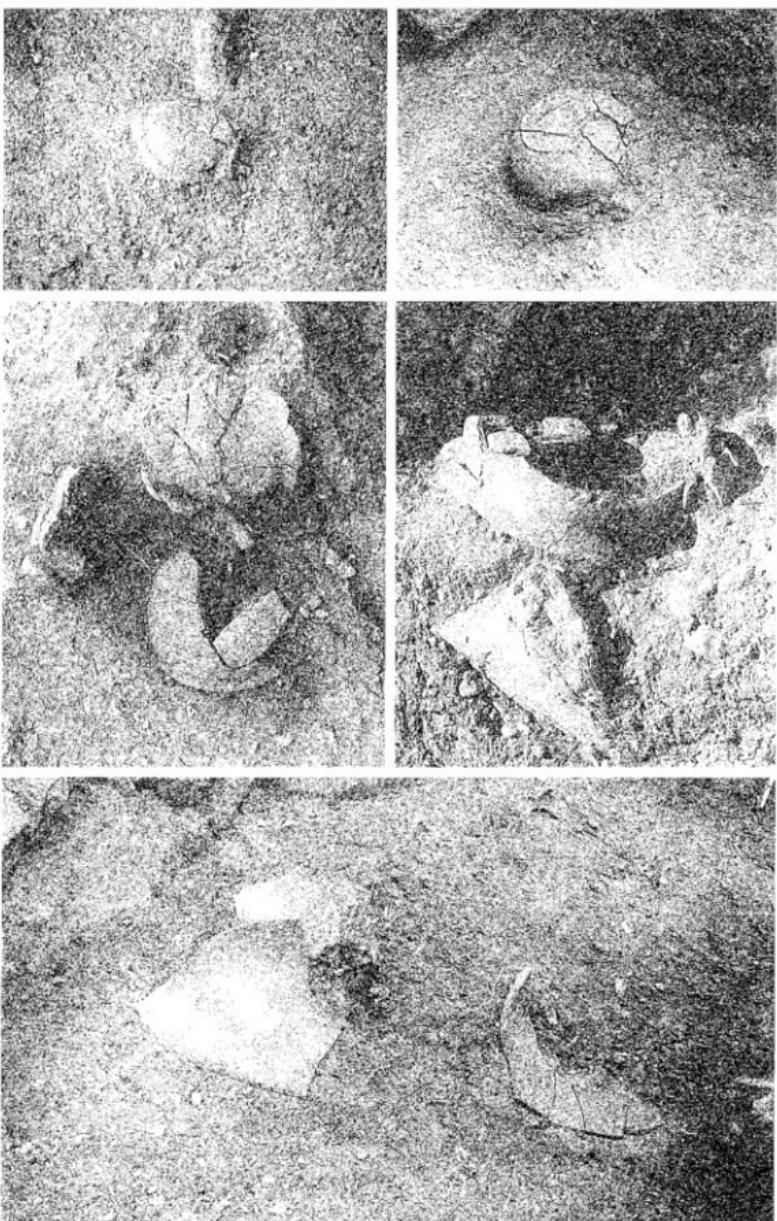
図版
一三



9号墳石室床面上の遺物出土状況
(左列、古墳時代の須恵器 右列、長岡京期の土師器)

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
一四

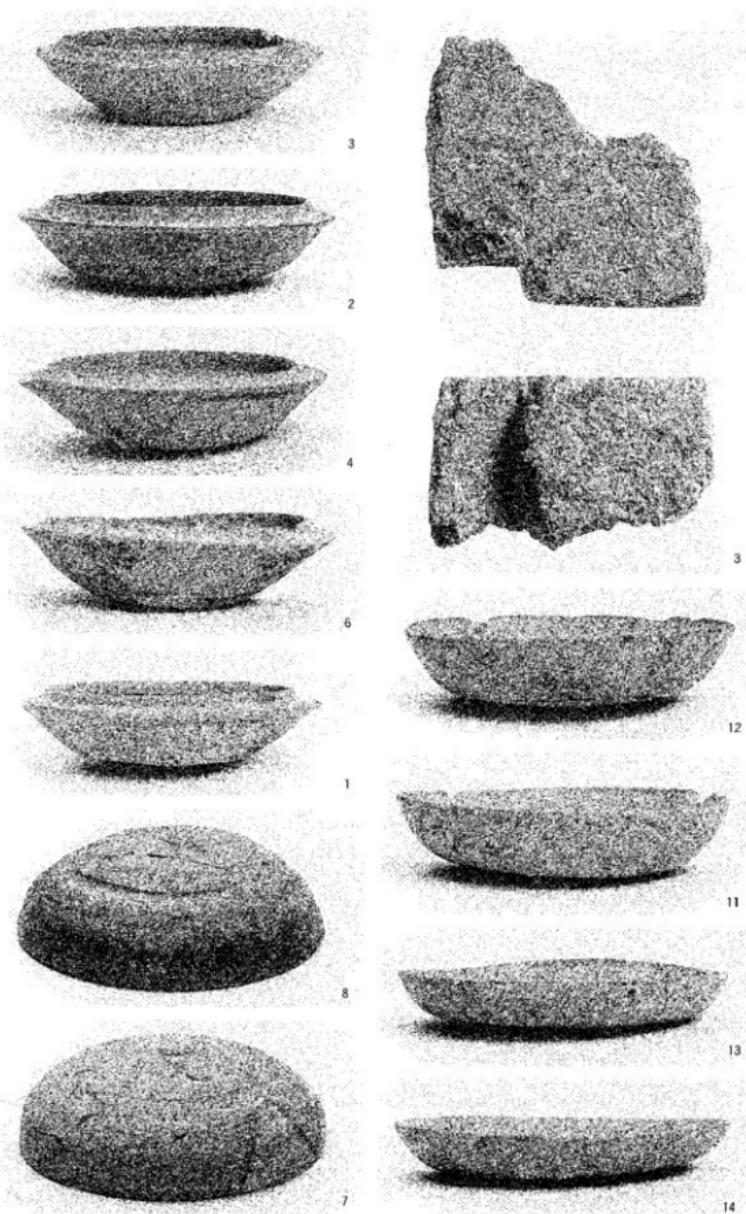


9号墳石室堆積土中の遺物出土状況

(上左、土師器小皿 上右、黒色土器椀 中左・中右、土師器壺B 下、須恵器甕)

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版一五



9号墳石室内出土遺物 1

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
一六



15



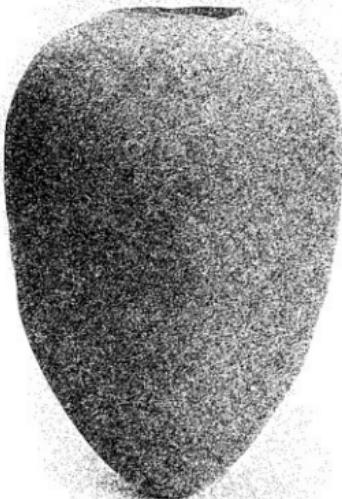
17



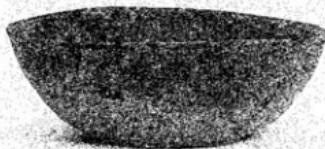
10



16



18



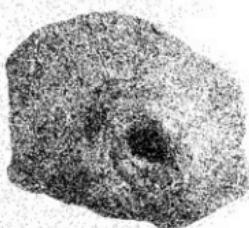
19



20



21

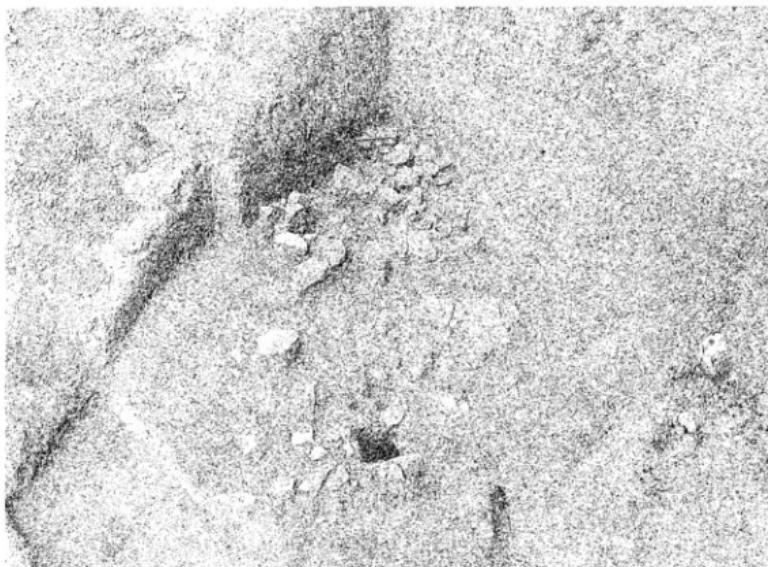


22

9号墳石室内出土遺物2

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版一七



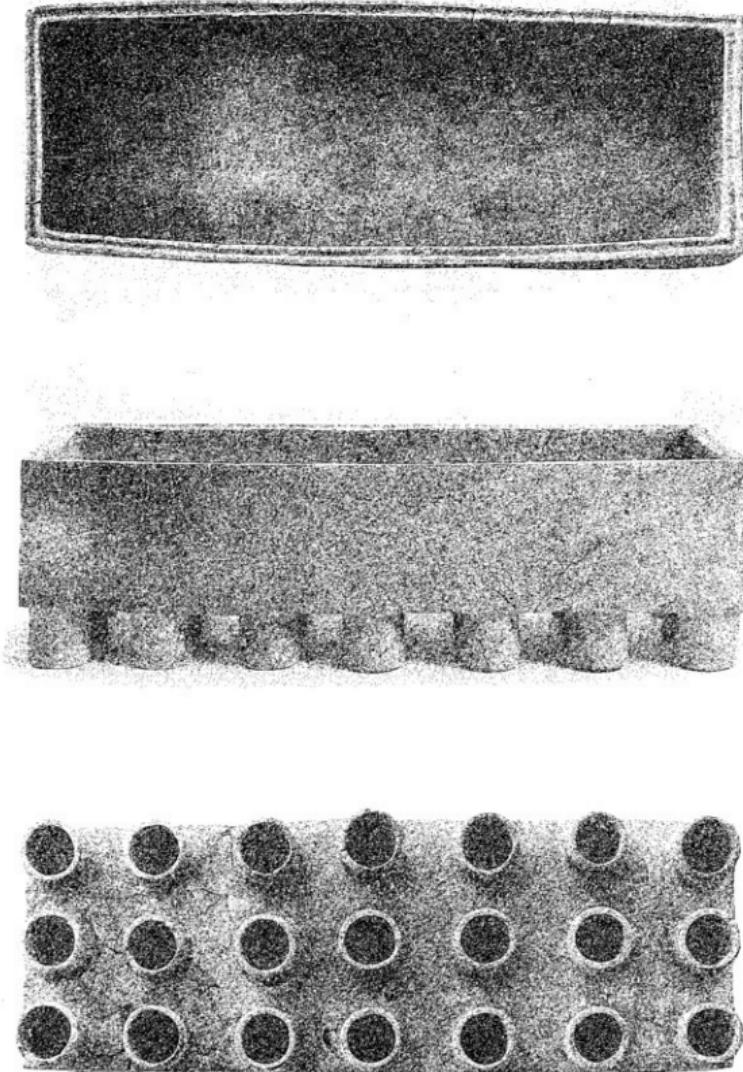
1. 8・9号墳間（D区）の陶棺出土状況（南東から）



2. 同遺物出土状況（南東から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

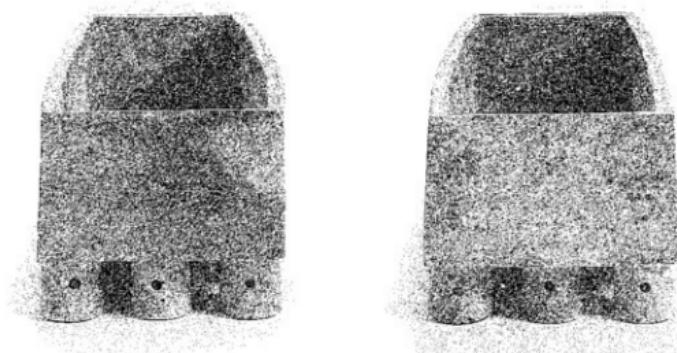
図版
一八



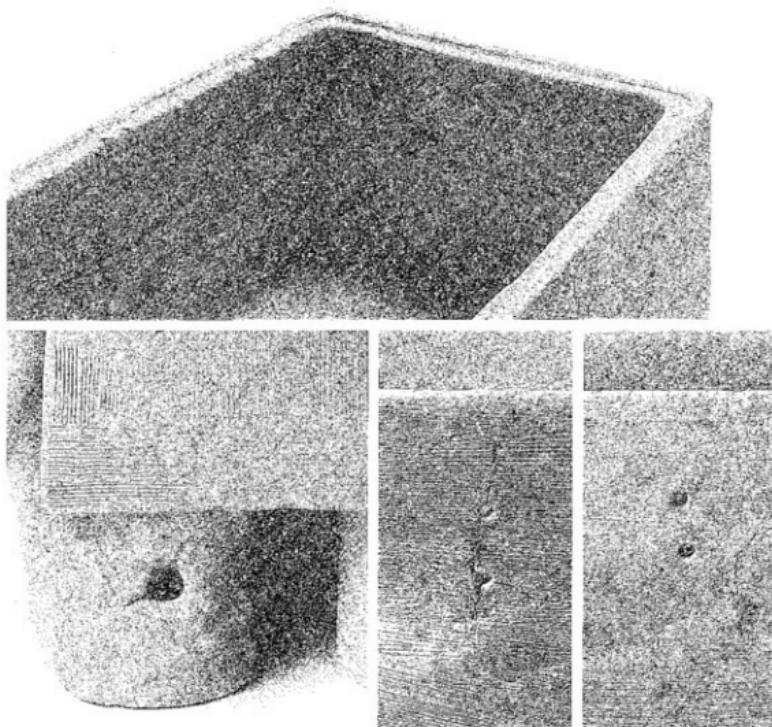
陶棺1（上、上面 中、長側面 下、底部）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
一九



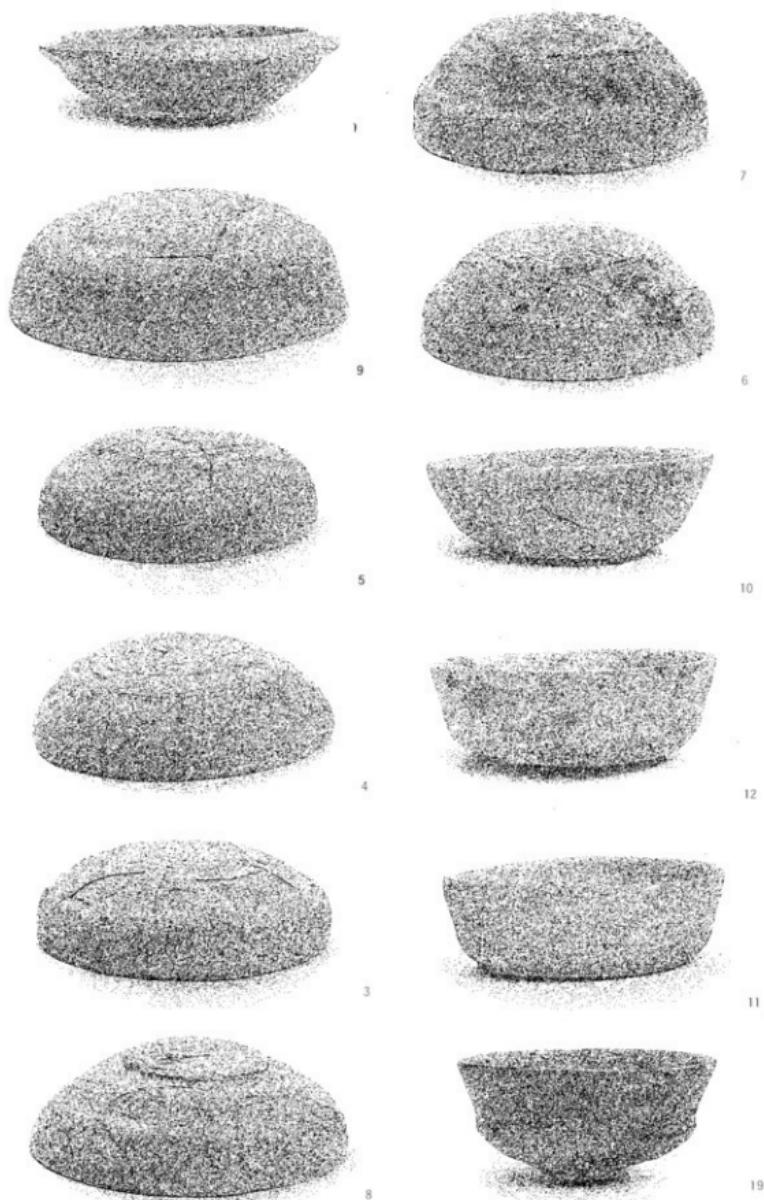
陶棺2（左・右、短側面）



陶棺3（上、蓋受け部　下左、脚と円孔　下中・下右、長側面の穿孔）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

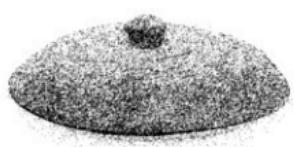
図版
〇



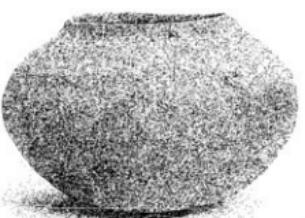
8・9号墳間（D区）の出土遺物 1

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

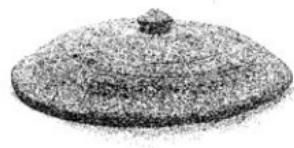
図版二
一



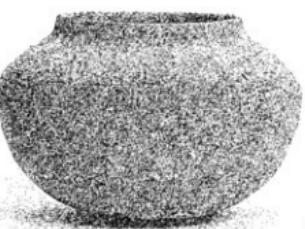
13



21



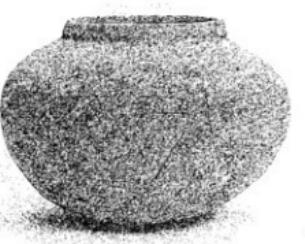
14



22



17



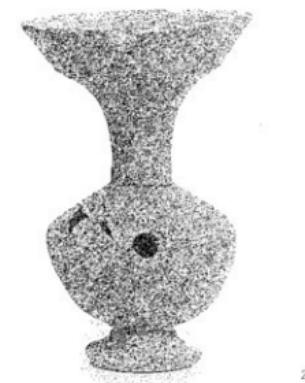
23



15



18

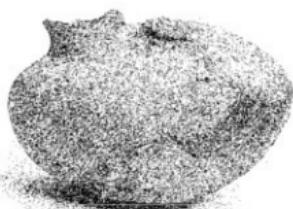


20

8・9号墳間(D区)の出土遺物2

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版
三



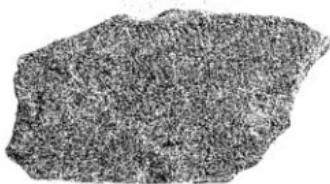
24



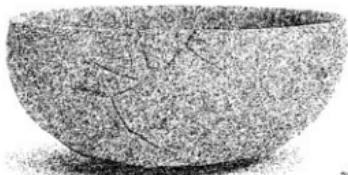
27



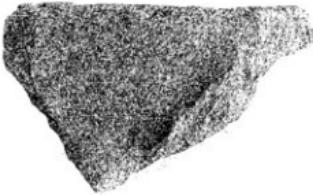
25



2



26



1

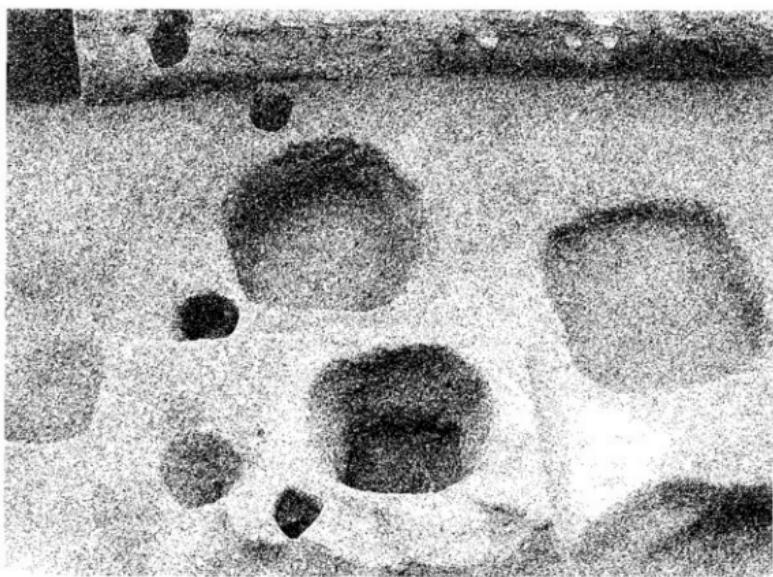
8・9号墳間（D区）の出土遺物3、陶棺4

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二三



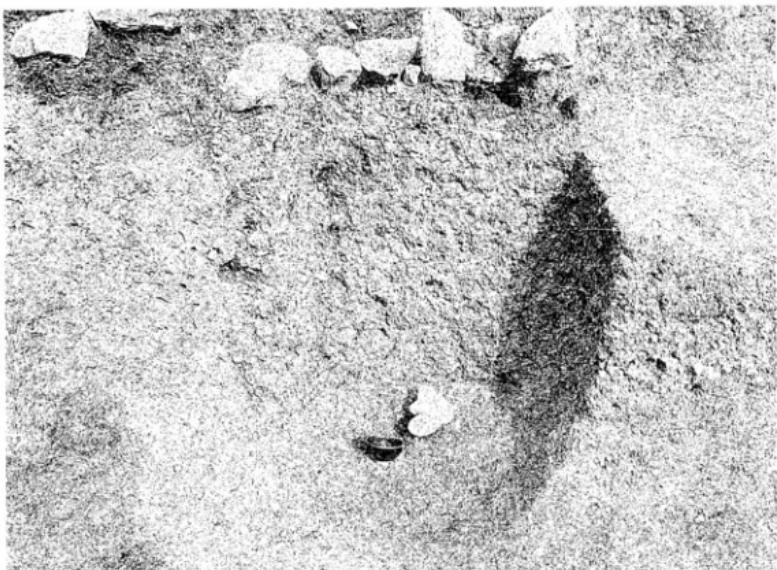
1. A区全景（北東から）



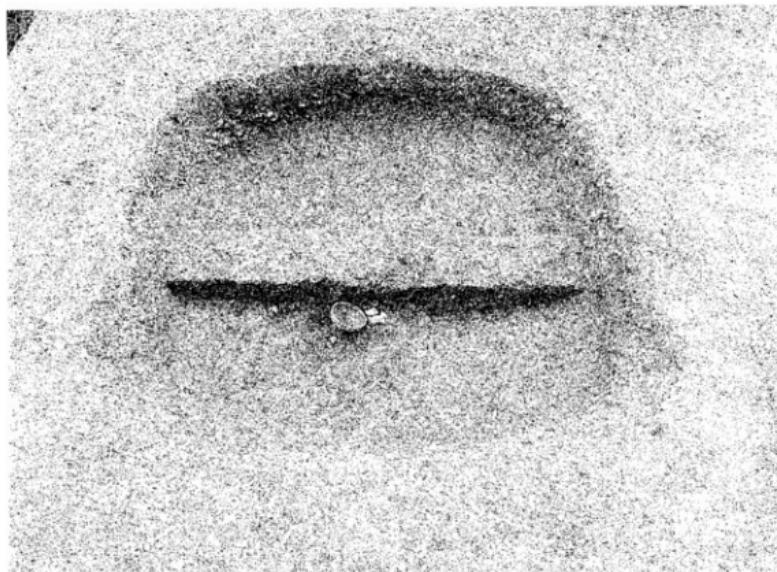
2. 土葬墓群全景（北から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二四



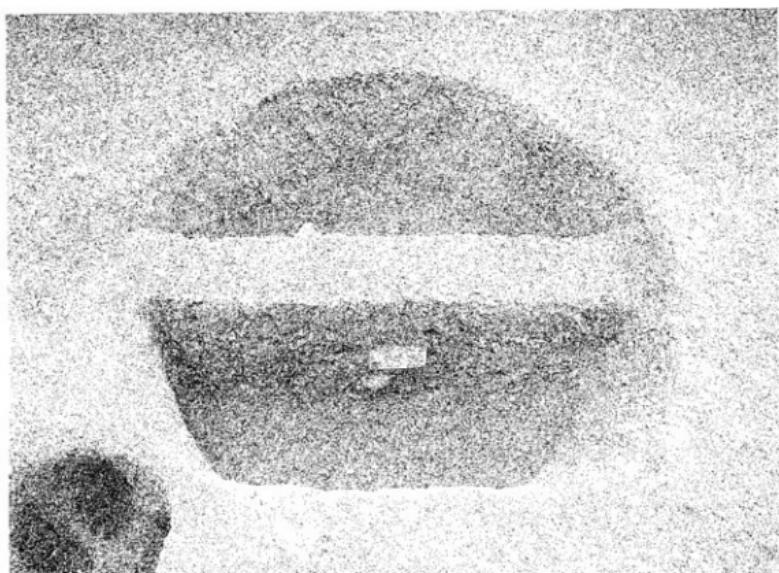
1. 土葬墓S X 0 1 (南から)



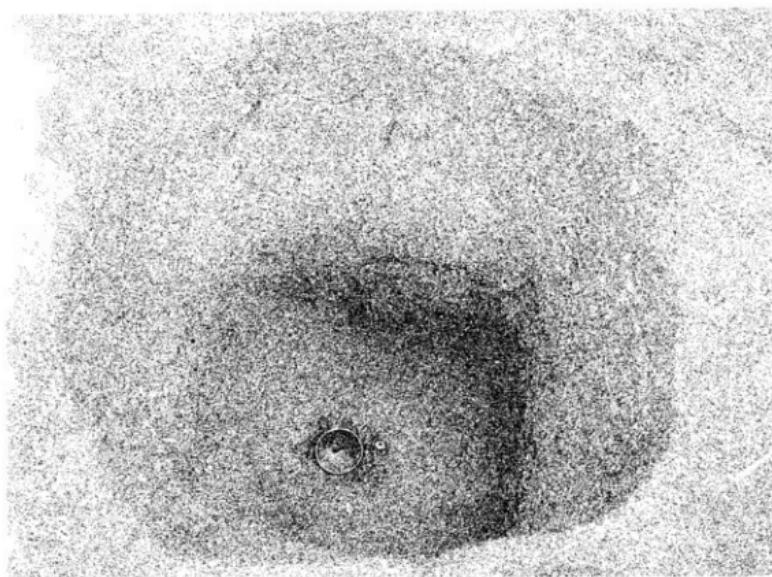
2. 土葬墓S X 0 2 (北から)

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二五



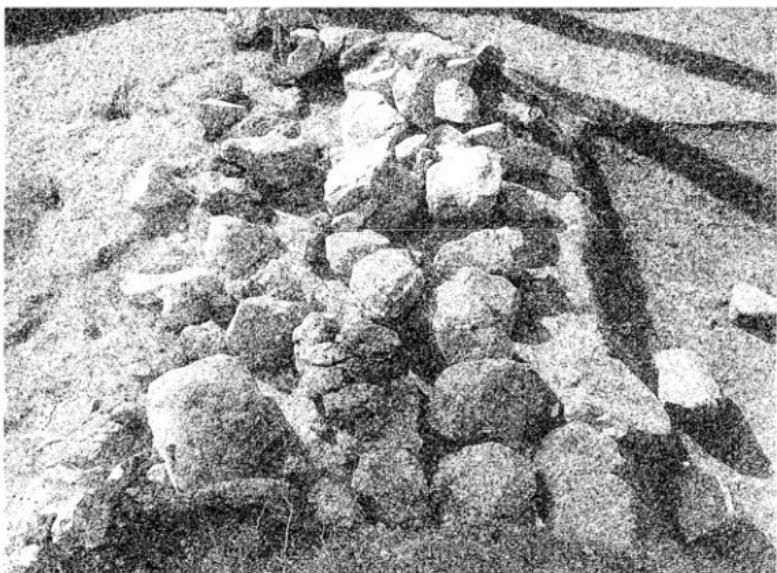
1. 土葬墓 S X 0 3 (北から)



2. 土葬墓 S X 0 8 (南から)

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二六



1. 集石遺構 S X 0 6 全景（東から）



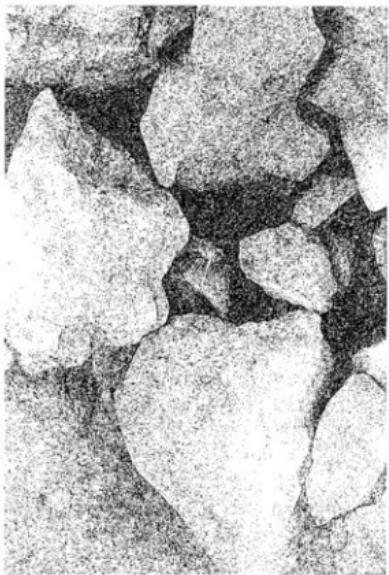
2. 集石遺構 S X 0 6 全景（西から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二七



1. 土坑SK 07全景（北西から）



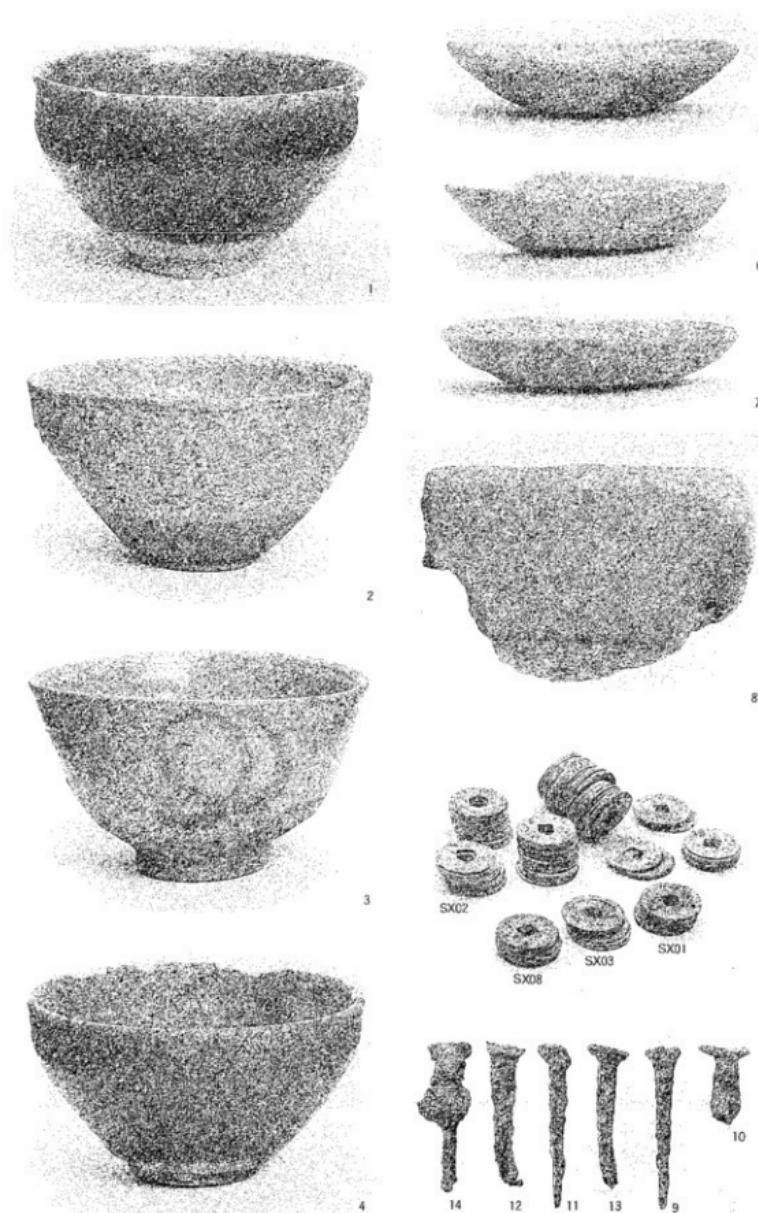
2. 土坑SK 07蔵骨器出土状況（北東から）



3. 溝SD 04全景（東から）

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

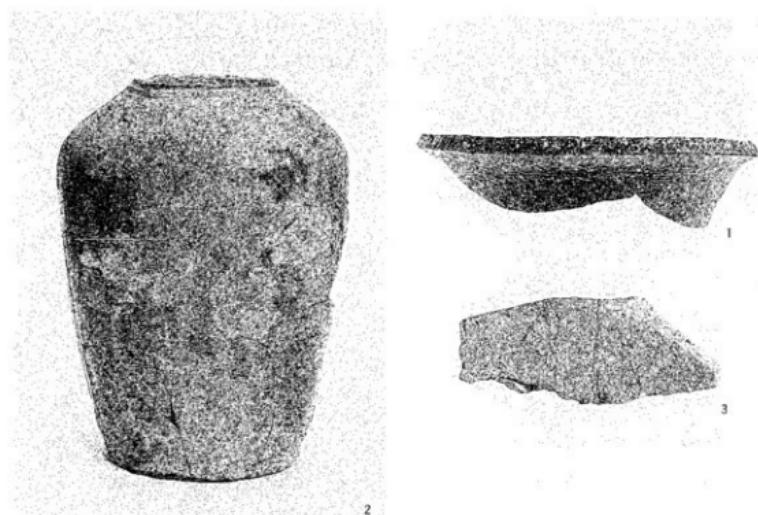
図版一八



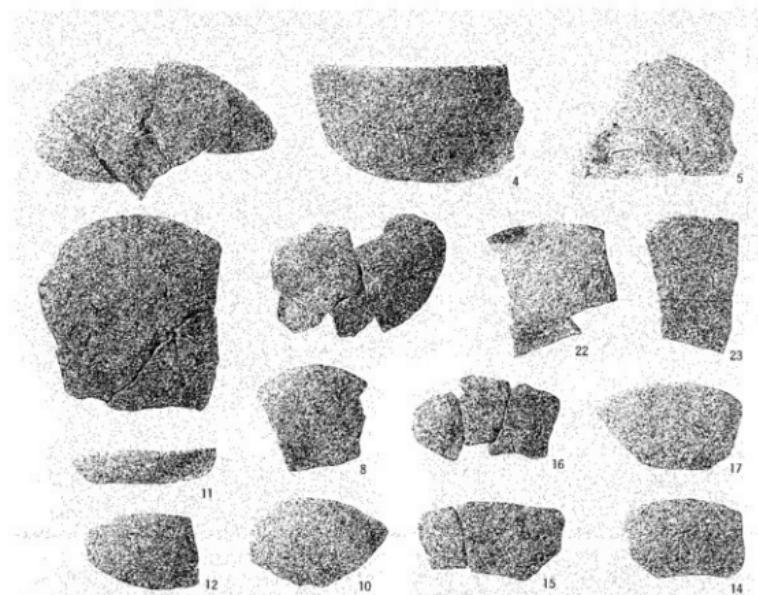
上：葬墓出土遺物

走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査

図版二九



1. 土坑SK05出土遺物



2. 溝SD04・表土出土遺物（番号なしは表土出土）

長岡京跡右京第515次調査

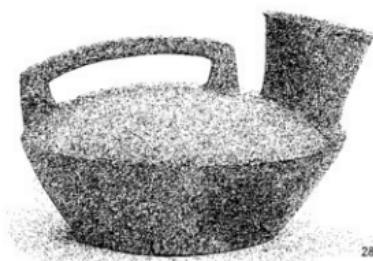
図版三〇



1. 調査区全景（東から）



2. 拡張区全景（東から）



28



17

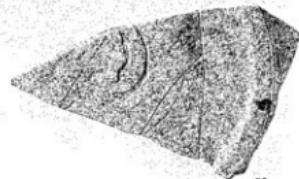


12

5

6

15

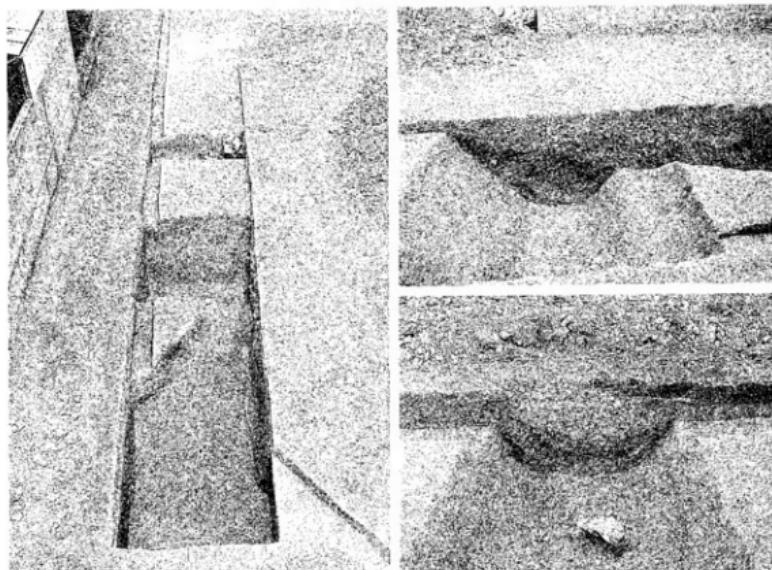


23

3. 出土遺物



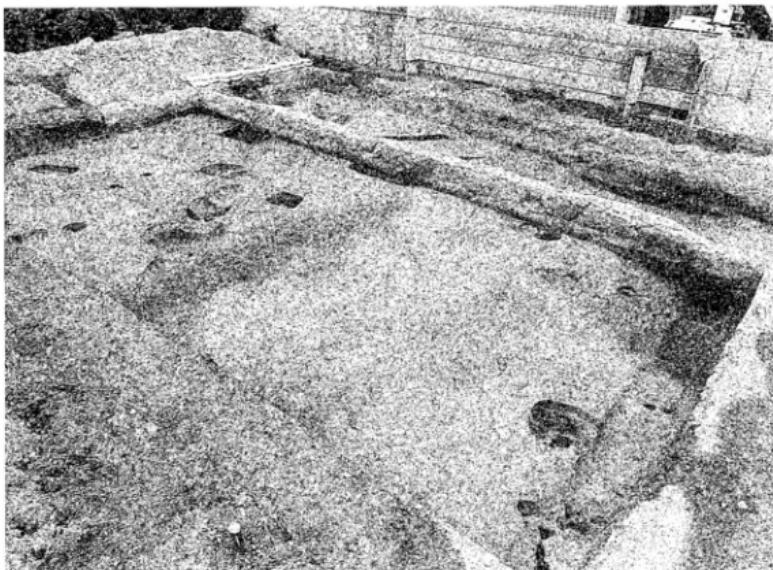
1. 調査地全景（北東から）



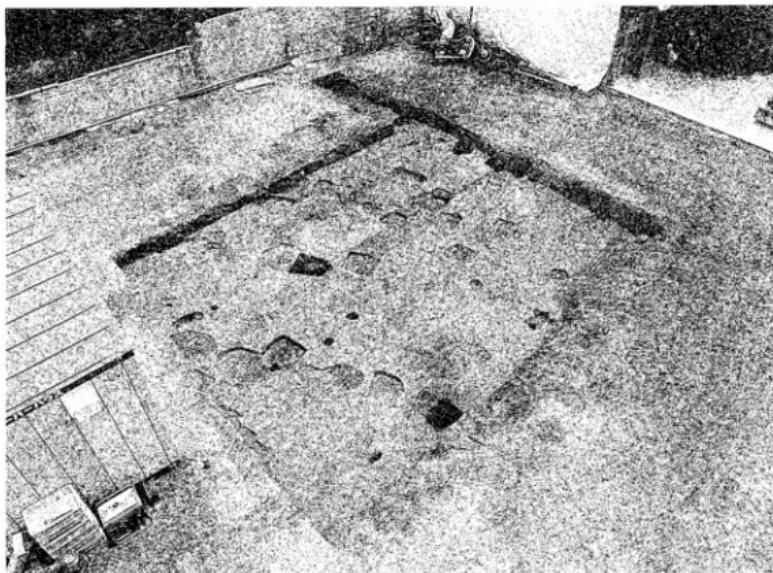
2. 左・1トレンチ南部（南から） 右上・SD 03断面（東から）
右下・SD 02断面（東から）

長岡京跡右京第528次調査

図版三二一



1. 西部調査区全景（北東から）



2. 東部調査区全景（北西から）

長岡京跡右京第549次調査

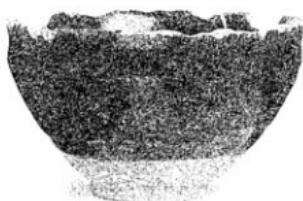
図版三三



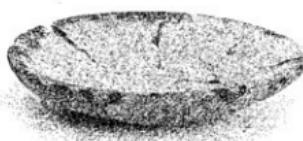
1. 調査地全景（東から）



2. 座棺墓西群（南西から）



9



8

3. 出土遺物

長岡京市文化財調査報告書 第36冊

発行日 平成9年3月31日

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地1

電話 075-955-3622

発行 長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121

印刷 株式会社 きょうせい